

『摧邪輪』卷下

(日本思想大系卷十五『鎌倉旧仏教』岩波書店刊)

於一向專修宗選択集中「摧邪輪」卷下

*335上

第五門決之余。(此卷破群賊喻、并尽雜問答。)

專修人問曰、如汝所言者、念仏衆生撰取不捨文、不限稱名、觀仏等行者、可得其撰取乎。答。爾也。何以得知。以觀仏等は念仏故、是以念仏宗、盛引觀仏等文、証成念仏義。又群疑論、以觀仏等為甚深念仏、淺行既為所撰、豈除深行乎。又若言所撰限稱名者、稱名行既純熟、得根本三昧位、口稱行可中止。於此定位、可不蒙撰取乎。夫深位菩薩、尚受仏加、專在定位。念仏家何限散位、可除定位乎。若爾者、唯不如此念仏行不純熟者、何以故、苦純熟者、必可發得三昧。若發得三昧位、稱名行可中止。若稱名中止位、不可蒙弥陀光明撰取故也。若爾者、無有是處。

問曰、弥陀光明、唯無稱名行者。是故觀經云、光明遍照十方世界、念仏衆生撰取不捨。善導疏曰、問曰、備修衆行、但能廻向、皆得往生。何以仏光普照、唯撰念仏者、有何意也。答曰、此有三義。明親縁。衆生起行、口常稱仏、仏即聞之、身常礼敬仏、仏。(觀經疏定善義「即」あり)見之、心常念仏、仏即知之。衆生憶念仏者、仏亦憶念衆生。彼此三業不相捨離故、名親縁也。二明近縁。衆生願見仏、仏即応念現在目前故、名近縁也。三明増上縁。衆生称念、即除多劫罪。命欲終時、仏与聖衆自来迎接。諸邪業繫、無能礙者故、名増上縁也。自余衆行、雖名是善、苦比念仏者、全非比校也云云。又觀念法門、指此文云、如前身相等光、一一遍照十方世界、但有專念阿弥陀仏衆生、彼仏心光常照是人、撰護不捨。惣不論撰余雜業者。文。此兩処解釈并經文、如指掌中。又善導

一向專修宗選択集中に於いて邪を摧く輪 卷下

第五門に決するの余。(此の卷は群賊の喩を破して、并に雜問答を尽す。)

專修人の問うて曰く、汝が言う所の如き、念仏衆生撰取不取の文、稱名に限らずば、觀仏等を修する行者、其の撰取を得べきや。答う。爾かなり。何を以て知ることを得。觀仏等はれ念仏を以ての故に、是を以て念仏宗、盛んに觀仏等の文を引きて、念仏の義を証成せり。又『群疑論』に、觀仏等を以て甚深の念仏と為す、淺行既に所撰と為す、豈に深行を除かんや。又若し所撰は稱名に限ると言わば、稱名の行既に純熟して、根本の三昧を得る位にして、口稱の行を中止すべからず。此の定位において、撰取を蒙むるべからざるや。夫れ深位の菩薩、尚お仏加を受けて、専ら定位に在り。念仏の家、何ぞ散位に限りて、定位を除くべきや。若し爾れば、唯、念仏の行純熟せざるにしかず、何を以ての故に、若し純熟するは、必ず三昧を發得すべし。若し三昧を發得する位ならば、稱名の行を中止すべし。若し稱名中止の位ならば、弥陀の光明撰取を蒙るべからざるが故なり。若し爾りと云わば、是の処あることなけん。

問うて曰く、弥陀の光明、唯、稱名の行者を照す。是の故に『觀經』に云く、「光明遍照十方世界を照らしたまうに、念仏の衆生を撰取して捨てたまわす」と。善導の『疏』に曰く、「問うて曰く、備さに衆行を修してただ廻向すれば、皆往生を得。何を以て仏光普く照すに、唯、念仏者を撰するは、何の意あるや。

答えて曰く、此れに三義あり。一には親縁を明す。衆生行を起こして、口に常に仏を称すれば、仏即ち之を聞きたまう。身に常に仏を礼敬すれば、仏(『觀經疏』定善義「即」あり)之を見たまう。心に常に仏を念ずれば、仏即ち之を知りたまう。衆生仏を憶念すれば、仏亦衆生を憶念したまう。彼此の三業相捨離せず、故に親縁と名くるなり。二には近縁を明す。衆生仏を見たまつらんと願すれば、仏即ち念に応じて現じて目の前にまします。故に近縁と名くるなり。三には増上縁を明す。衆生称念すれば、即ち多劫の罪を除く。命終らんと欲する時、仏聖衆と自ら来りて迎接したまう。諸邪業繫、能く礙うる者なし。故に増上縁と名くるなり。自余の衆行、是れ善と名くと雖も、若し念仏に比ぶれば、全く比校にあらざるなり」と云云。又『觀念法門』に、此の文を指して云く、「前の身相等の光の如きは、一一に遍く十方世界を照らすに、唯、阿弥陀仏を專念する衆生ありて、彼の仏心の光常に是の人を照らして

*335下

処処解積、專以稱名為念仏。爾者非下弥陀光明唯照触称名行者不及余乎、如何。

答。如前説、念仏有淺深。其深念者、非必称名。若夫為念仏者、念仏衆生文、何簡深念人乎。善導解積、又以觀仏等為念仏、如前積成。就中依善導解積、弥陀身光照十方世界衆生也。即疏云「仏光普照者、仏光者、身光也、普照者、十方世界衆生蒙身光照觸故、云普照也。次疏文云「唯撰念仏者」者、指心光撰取也。是故觀念法門云、又如第九真身觀説云。弥陀仏金色身毫。「觀念法門「相」あり」光明遍照十方衆生、身毛孔光亦遍照衆生、円光亦遍照衆生、八万四千相好等光亦遍照衆生云云。〔此次汝所引文来。〕解曰、阿弥陀仏有二光。一身光、二心光也。〔常途曰「身光智光」〕身光遍照十方世界衆生、今所出文、四処有遍照衆生句。汝所出此文又云、如前身相等光、一一遍照十方世界、但有專念阿弥陀仏衆生、彼仏心光常照是人、撰護不捨、惣不論照撰余雜業行者云云。此文亦云「一一遍照十方世界。准前具可云「十方世界衆生也。并前四句為五句。於其中、心光照撰專念人、不撰雜業。准此積、專念人蒙身心二光照觸、雜業人唯蒙身光照觸也。是故前經文、具可云「光明遍照十方世界衆生」念仏衆生撰取不捨也。即觀念法門云「如前身相等光一一遍照十方世界者、積光明遍照十方世界句也。次文云「但有專念阿弥陀仏衆生彼仏心光常照是人撰護不捨者、積念仏衆生撰取不捨句也。即經意云、光明遍照十方世界衆生、於其中、念仏衆生撰取不捨。〔為言〕是故遍照義寛、通專念雜業故。撰取義狭、唯限專念故。撰取者、約所得法言之者、証得義也。是故或師積「双觀経我当修行撰取文」云、未聞説法時、住地前位故、言「我当修行撰取等。聞法已、五劫思惟地上故、言我已撰取等也。其修行心浄、自然仏土浄故、言撰取等也。文。

良以念仏衆生蒙如来撰取者、依此念仏行撰取仏境故也。謂念仏行者、撰取仏境、置於己心。如彼甚深念仏三昧、其業用

*388上

撰護して捨てたまわず。惣じて余の雜業の行者を照撰することを論せず」と。文。此の両処の解積並びに經文、掌中を指すが如し。又善導の処処の解積、専ら称名を以て念仏と為す。爾れば弥陀の光明ただ称名の行者を照觸して余に及ばざるにあらずや。いかん。

答う。前説の如し、念仏に淺深あり。其の深念は、必ずしも称名にあらず。若し夫れ念仏を為す者、念仏衆生の文に、何ぞ深念の人を簡ばんや。善導の解積、又觀仏等を以て念仏と為すこと、前の積に成ぜるが如し。中に就いて善導の解積に依らば、弥陀の身光の十方世界の衆生を照すなり。即ち『疏』に「仏光普照」と云うは、仏光は身光なり、普照は、十方世界の衆生、身光照觸を蒙むる故に、普照と云うなり。次に『疏』の文に「唯撰念仏者」と云うは、心光撰取を指すなり。是の故に『觀念法門』に云く、「又第九真身觀の説に云うが如し。弥陀仏の金色身毫〔觀念法門「相」あり〕光明遍く十方衆生を照したまうに、身毛孔光亦遍く衆生を照したまう、円光亦遍く衆生を照したまう、八万四千の相好等の光亦遍く衆生を照したまう」と云云。〔此の次に汝が引く所の文に来る。〕解して曰く、阿弥陀仏に二光あり。一に身光、二に心光なり。〔常途に身光智光と曰う〕身光遍く十方世界の衆生を照すに、今、出す所の文、四処に「遍照衆生」の句あり。汝が出す所の此の次の文に又云く、「前の身相等の光の如し、一一に遍く十方世界を照したまうに、但阿弥陀仏を專念する衆生ありて、彼の仏の心光常に是の人を照して、撰護して捨てたまわず、惣じて余の雜業の行者を照撰することを論せず」と云云。此の文に亦「一一に遍く十方世界を照したまう」と云う。前に准じて具さに十方世界の衆生と云うべきなり。前の四句と并べて五句と為す。其の中において、心光は專念の人を照撰し、雜業を撰せず。此の積に准ずるに、專念の人は身心二光を蒙むり、雜業の人は唯、身光の照觸を蒙むるなり。是の故に前の經文に、具さに「光明遍く十方世界の衆生を照らしたまうに念仏の衆生を撰取して捨てたまわず」と云うべきなり。即ち『觀念法門』に「如前身相等光一一遍照十方世界」と云うは、「光明遍照十方世界」の句を積するなり。即ち『經』の意に云く、光明遍く十方世界の衆生を照らしたまうに、其の中において、念仏の衆生を撰取して捨てず。〔為言〕是の故に遍照の義は寛し、專念雜業に通ずる故に。撰取の義は狭し、唯、專念に限る故に。撰取は、所得の法に約して之を言わば、証得の義なり。是の故に或る師、『双觀経』「我当修行撰取」の文を積して云く、「未だ説法を聞かざる時に、地前の位に住する故に、我当修行撰取等と言えり。法を聞き已りて、五劫思惟して地上に登る故に、我已撰取等と言うなり。其の修行の心浄し、自然に仏土浄きが故に、撰取等と言うなり」と。文。

良以て念仏の衆生、如来の撰取を蒙むるは、此の念仏の行、仏境を撰取するに依るが故なり。謂く念仏の行者、仏境を撰取して、己心に置きけり。彼の甚深の念仏三昧の如く、其の業用は不可思議不可思

不可思議不可思議。謂諸根毛孔容無量仏刹、四大微塵現三世仏事。善導疏所出功德雲比丘說念仏三昧中云、住一切法微細念仏門、於一毛孔見不可說諸仏出興、咸至其所而承事故、住刹那際莊嚴念仏門、於一念中、見一切刹皆有諸仏、成正覺現神變故等云云。且置此事而不論之。彼称名念仏亦随分撰取仏境。謂執取相計名字相心、計著名字(仁品・活本なし)相一生。謂先聞仏名計著名字、次執仏体生執取相。二相相応生甚深愛敬。遍計分別心、雖不縁如来実徳、縁勝福田生甚深信解。此信解力印持如来悲願、置己心中、愛敬念徹到故、任運与如来悲願相応互不捨離故、云撰取不捨也。如善導云衆生念仏還念者、即此義也。造立堂舍等善根、初心行人其心向土木転、不親縁如来身心故、無能所撰取義、此依善導称名宗一往述。余善無撰取義。他師积此文、未必如此、臨文可見也。即善導所出三義、俱皆衆生先念持仏。是故仏亦撰取衆生身光之照触大悲遍故、遍諸衆生、心光之撰取、衆生無感不至也。爰有一人作因論生論曰、若余善無撰取義者、我欲不修之、如何。答。善導約下行称名時、念仏心易生、修余善時、念仏心難生一類、作此説。然世間亦有一類、欲称名字睡眠忽起、欲修余善念心自任。有此一類、致信心修余善、廻此善根求往生浄土。此心即是名念仏心。弥陀心光撰取之。是故念仏善根、種類無辺。四十八願、唯云乃至十念、不云名字。善導积十声者、且约称名門也。余師积此十念文異説云云。非必指称名也。若順一理者、何必漏於十念願乎。若不漏十念願者、何必違善導遺訓乎。諸积互守一理、各相成終無違故也。若不然者、非甘露門也。若初心人依守有縁一行暫依附一師者、諸師皆爲世尊使。善導何答之乎。如善導疏云、各随所樂疾得解脱、(略鈔)即是相成諸行也。更莫得一片忘三隅而上。

問。此事実然。若爾者、我依善導解釋、執称名一行、入一念仏門。汝何破之乎。答。如先約而言。我全不非称名義、不

*367 下

議なり。謂く諸根毛孔に無量の仏刹を容る、四大微塵に三世の仏事を現す。善導の『疏』に出す所の功德雲比丘、念仏三昧を説く中に云く、「住一切法微細念仏門、一毛孔において不可說諸仏の出興を見たてまつる、咸く其の所に至りて承事する故に、住刹那際莊嚴念仏門、一念中において、一切刹に皆諸仏ましまし、等正覺を成じ神変を現じたまうを見たてまつる故に」等と云云。且く此の事は置きて而も之を論ぜず。彼の称名念仏も亦随分に仏境を撰取す。謂く執取相計の名字相心、名字(仁本・活本「字」なし)の相に計著して生ず。謂く先ず仏名を聞きて名字に計著し、次に仏体を執りて執取の相を生ず。二相相応じて甚深の愛敬を生ず。遍計分別心、如来の実徳を縁せずと雖も、勝福田を縁じて甚深の信解を生ず。此の信解力は如来の悲願を印持して、己の心中に置き、愛敬の念徹到する故に、任運に如来の悲願と相応して互に捨離せざる故に、「撰取不捨」と云うなり。善導が「衆生念仏還念」と云うが如きは、即ちこの義なり。造立堂舍等の善根、初心行人其の心、土木に向い転じて、如来の身心に親縁せざるが故に、能所撰取の義なし、此れ善導の称名宗に依りて一往述ぶ。余善撰取の義なし。他師は此の文を积すに、未だ必ずしも此の如くならず。文に臨みて見るべきなり。即ち善導の出すところの三義、俱に皆衆生先ず仏を念持せり。是の故に仏亦衆生を撰取したまう。身光の照触大悲遍き故に、諸の衆生に遍ず、心光の撰取、衆生感ずることなくば至らざるなり。

爰に一人ありて、因論生論を作して曰く、「若し余善に撰取の義なくば、我れ之を修せざらんと欲す、いかに。答う。善導は称名を行ずる時、念仏心生じ易し、余善を修する時、念仏心生じ難き一類に約して、此の説を作す。然るに世間に亦一類あり、名字を称せんと欲するに睡眠忽ち起り、余行を修せんと欲するに念心自ずから住す。此の一類あらば、信心を致すに余善を修し、此の善根を廻して往生浄土を求む。此の心即ち是れ念仏心と名く。弥陀の心光、之を撰取したまう。是の故に念仏の善根、種類無辺なり。四十八願、唯、乃至十念と云いて、名字と云わず。善導の十声と积するは、且く称名門に約してなり。余師此の十念を积するに異説あり」と云云。必ずしも称名を指すにあらざるなり。若し一理に順ぜば、何ぞ必ず十念の願に漏れんや。若し十念の願に漏れずば、何ぞ必ず善導の遺訓に違せんや。諸积互に一理を守る、各の相い成じて終に違なき故なり。若し然らずば、甘露の門にあらざ。若し初心の人、有縁の一行を守るに依りて暫く一師に依附するは、諸師皆世尊の使いと為す。善導に何ぞ之を咎めんや。善導の『疏』に云うが如し、「各の所樂に随いて疾く解脱を得よ」と、(略鈔)即ち是れ諸行を相い成ずるなり。更に一片を得て三隅を忘ることなかれとするならくのみ。

問う。此の事、実に然なり。若し爾れば、我れ善導の解釋に依りて、称名一行を執りて、一念仏門に入る。汝何ぞ之を破すや。

*367 上

破善導積。但正所破者、汝之撥菩提心等邪過也。傍所破者、汝依下舉善導積弊、佗師義、稱名一類有憑拋。佗門行人失所歸。依之顯念仏実義、興隆往生要行也。是又不假他門。即往生宗有盛談。如彼云、十地菩薩念仏為一行等者、(正文在安樂集下卷大意淨土門諸師皆共同)十地所修福德、以不離念仏念法乃至念具足一切種智等心故、此中以初一念為念仏。此雖出能念自利行、所修福德布施愛語利益同事等諸行無辺。此等皆以不離念仏故、名念仏善根、以不離念法故、名念法善根、以不離念同行菩薩故、名念諸同行菩薩善根、乃至念具足一切種智善根。具如華嚴說。十地論第三、撰為四念中、以念三宝名上念。今所言者、其中念仏善也。此中無辺諸行、皆得念仏等名。此義唯不可限地上、地前諸位皆以可同也。依此理而言之、若有人懷呪詛毒心、為惱乱他人稱仏名。此可不蒙弥陀心光攝取。此非諸經所說念仏心故。苦復有人、深厭生死欣求淨土、以一搏食供仏像等、是名念仏衆生。弥陀心光可撰取之。諸經所說念仏善故。依之善導所出三義、俱皆衆生先撰取仏。是故仏亦撰取衆生。身光之照触大悲遍故、遍諸衆生。心光之撰取、衆生無感不至。此四道理中、是法爾道理、亦是作用、道理所顯也。縁起道理無作者故、諸法業用如是故、如無辺淨業成、弥陀之身光土。念仏淨業可蒙心光攝取故、更非弥陀如来有偏頗過也。

何者今所言心光者、莊嚴論云、能取及所取、此二唯心光。貪光及信光二光無二体。瑜伽論出三種光明中、云法光明者、謂如有一隨其所受所思所触、觀察諸法、或復修習隨念仏等。准此而言之、心光義多種。貪等是煩惱光也。信等是善法光也。觀察諸法是智光也。修念仏等是念光也。准知今所言心光者、是慈悲也。慈有三種、一衆生縁、二法縁、三無縁。今所言是無縁慈也。是故天台觀經疏云、念仏衆生撰取不捨者、若為仏慈悲所護、終得離苦、永得安樂。論云、譬如魚子母若不念子則爛壞、衆生亦爾。仏若不念、善根則壞。今明無縁慈者、諸仏所被謂心

*361下

答う。先に約して言うが如し。我れ全く称名の義を非とせず、善導の積を破せず。但し正しく破する所は、汝の撥菩提心等の邪過なり。傍らに破する所は、汝が善導の積を挙げて他師の義を弊するに依りて、称名の一類に憑拋あり。他門の行人所歸を失う。之に依りて念仏の実義を顯わして、往生の要行を興隆するなり。是れ又他門を仮らず。即ち往生宗に盛談あり。彼に「十地の菩薩は念仏を行と為す」と云う等の如きは、(正文「安樂集」下卷にあり。大意淨土門の諸師皆共に同じ)十地所修の福德、念仏・念法乃至念具足一切種智等の心を離れざるを以ての故に、此の中に初一念を以て念仏と為す。此れ能念自利の行を出すとも雖も、所修の福德・布施・愛語・利益・同事等の諸行、無辺なり。此れ等皆念仏を離れざるを以ての故に、念仏の善根と名く、念法を離れざるを以ての故に、念法の善根と名く、念同行菩薩を離れざるを以ての故に、念諸同行菩薩の善根と名く、乃至念具足一切種智善根と名く。具さに『華嚴經』の説の如し。『十地論』の第三に、撰して四念と為す中に、念三宝を以て上念と名く。今、言う所は、其の中の念仏善なり。此の中の無辺の諸行、皆念仏等の名を得。此の義は地上に限るべからず、地前諸位皆以て同じかるべきなり。此の理に依りて之を言うに、若し人ありて呪詛毒心を懷きて、他人に悩乱を為して仏名を称す。此れ弥陀の心光の撰取を蒙むらざるべし。此れ諸經所說の念仏心にあらずるが故に。若し復人ありて、深く生死を厭い淨土を欣求して、一搏食を以て仏像に供する等、是れを念仏衆生と名く。弥陀の心光、之を撰取すべし。諸經所說の念仏の善の故に。之に依りて善導の出す所の三義、俱に皆衆生先ず仏を撰取す。是の故に仏亦衆生を撰取したまう。身光の照触の大悲遍き故に、諸の衆生に遍す。心光の撰取、衆生の感なくば至らず。此れ四道理の中に、是れ法爾道理なり、亦是れ作用は、道理の所顯なり。縁起道理は作者なき故に、諸法の業用は是の如きの故に、無辺の淨業の弥陀の身光土を成ずるが如し。念仏の淨業は心光撰取を蒙るべきが故に、更に弥陀如来に偏頗の過あるにあらざるなり。

何者か今、言う所の心光は、『莊嚴論』に云く、「能取および所取、此の二は唯、心光なり。貪光および信光の二光は二の体なし」と。『瑜伽論』に三種の光明を出す中に、「法光明と云うは、謂く一其の所受所思所触に隨いて諸法を觀察し、或いは復隨念仏等を修習することあるが如し」と。此れに准じて之を言わば、心光の義多種なり。貪等は是れ煩惱の光なり。信等は是れ善法の光なり。觀察の諸法は是れ智光なり。修念仏等は是れ念光なり。准知するに今、言う所の心光は、是れ慈悲なり。慈に三種あり、一衆生縁、二法縁、三無縁なり。今、言う所は是れ無縁の慈なり。是の故に天台の『觀經疏』に云く、「念仏衆生撰取不捨は、若し仏の慈悲の為に護らるれば、終に離苦を得て、永く安樂を得と。『論』に云く、譬えば魚子の母若し子を念ぜざれば子則ち爛壞するがごとし、衆生も亦爾なり。仏若し念じたまわらず、善根則ち壞す。今、無縁の慈を明かすは、諸仏の所被謂く心、有無に住せず、三世に依らず、

不_レ住_二有無_一、不_レ依_二三世_一、知_二緣不_レ実_一、以_二衆生不_レ知_一故、実相智慧令_二衆生得_レ之_一、是為_二無緣_一也。文。此三種大慈、与_二平等性智_一相応。仏地論第五、出_二此大慈所緣_一。評家云、如_レ是說者亦緣_二有情_一、但無分別平等行相。了_二知一切仮立有情性平等_一故、縁生等法性平等故、無我真如性平等故、名_二平等智_一。此智相応就_二所縁境_一、得_レ具_二三慈_一。但無分別平等行故、説名_二無緣_一。文。十地論第五、名_二衆生念法念無念_一、積_二無念義_一云、無念者有_二二種_一。一自相無念、觀_二法無我_一、世間中最、如_レ經法界世間最故、二遍至無尽觀、如_レ經究竟虚空界故、一切世界普行故、如_レ經遍覆一切世間行故。〔已上〕探玄記第十三、積_二十地論文_一云、初当体無念、二分齊無尽。文。当_レ知如来大慈、当体無念。離_二遍計情_一、謂_レ深義也。分齊無尽。無_レ不_二周遍_一。〔広義也。〕雖_レ然衆生極淨念持如来功德、名曰_二念仏_一。如来無縁慈、応_二衆生淨念_一、名為_二摂取_一。猶如_レ彼法慧菩薩入_二菩薩無量方便三昧時_一、一切如来与_レ無礙智無住智等十智。經説_二其所由_一云、彼三昧力法如是故、此亦可_レ説云。何故如来心光応_二淨念_一耶。彼念力法如是故、其猶_二明月無心_一、水清影現、水濁影昏。何以故、法如是故、此亦如是衆生念心水清、如来心光影現、感応義准_レ此可知。当_レ知身光照_二一切者_一、依_二此大悲力_一也。依_レ論_二摂取有無_一、非_レ謂_二如来大慈不_レ遍也_一。譬如_レ説云_二日光遍照_一天下有目衆生摂取不_レ捨者、有目無目衆生、得_二日光照_一者、如_レ弥陀身光遍照_二十方衆生_一。有目人如_レ有_二念仏心_一。日輪示_二其体_一者、如_レ弥陀垂_二摂取_一。無目人如_レ無_二念仏心_一。日輪為_二此人_一不_レ示_二自体_一者、如_レ不_レ蒙_二弥陀心光摂取_一。為_二無目人_一、日輪不_レ失_レ体、為_二無念心_一衆生、無縁大慈不_レ止、見不見唯任_二眼目有無_一。非_レ日輪過、摂不摂赤依_二念心有無_一、非_レ弥陀過也。是故歴_二万境_一有_二念心_一者、是名_二念仏_一。得_レ摂取、如_レ指_二掌中_一。其有_二念心_一善根者、各符_二根機_一、偏莫_レ執_二一門_一。是故諸師積_二此文_一、未_レ心〔仁本・活本「必」同〕善導_二一往雖_レ似_二相違_一、始終無_レ差異。往復旋還、入_二念仏門_一。上所_レ出十地念仏等義、念仏宗所_レ引用、即成_二此義_一也。

問。若如_レ所_レ信者、念仏善通_二多善_一為_レ体。然者何故前所_レ引善

308上

縁不実を知る、衆生知らざるを以ての故に、実相の智慧、衆生をして之を得しめん、是れを無縁と為すなり」と。文。此の三種の大慈、平等性智と相応す。『仏地論』第五に、此の大慈の所縁を出す。評家の云く、「是の如き説は亦有情を縁するに、但無分別平等の行相なり。一切仮立有情性平等を了知するが故に、縁生等法性平等の故に、無我真如性平等の故に、平等智と名く。此の智相応して所縁の境に就いて、三慈を具することを得。但無分別平等行の故に説きて無縁と名く」と。文。『十地論』第五に、衆生念・法念・無念と名け、無念の義を釈して云く、「無念は二種あり。一には自相の無念、法無我を観ず、世間の中の最、經の如く法界は世間の最なる故に、二には遍至無尽觀、經の如く究竟虚空界の故に、一切世間に普く行ずるが故に、經の如く遍く一切世間を覆う行なるが故に」と。〔已上〕『探玄記』第十三に、『十地論』の文を釈して云く、「初めに当体無念、二に分齊無尽」と。文。当に知るべし、如来の大慈、当体無念なり。遍計の情を離る、謂く〔深義なり〕。分齊無尽なり。周遍せざるところなし。〔広義なり。〕然りと雖も衆生極淨にして如来の功德を念持するを、名けて念仏と曰う。如来の無縁の慈、衆生の淨念に應ずるを、名けて摂取と為す。猶お彼の法慧菩薩の菩薩無量方便三昧に入る時、一切如来は無礙智・無住智等の十智を与うるが如し。『經』に其の所由を説きて云く、「彼の三昧力の法は是の如き故に、此れ亦説きて云うべし。何の故か如来の心光は応に淨念なるべきや。彼の念力の法は是の如き故に、其れ明月に心なく、水清きに影現われ、水濁るに影昏きが猶し。何を以ての故に、法是の如き故に、此れ亦是の如く衆生の念心の水清くば、如来の心光影現す」と、感応の義此れに准じて知るべし。当に知るべし、身光の一切を照すは、此の大悲の力に依るなり。摂取の有無を論ずるに、如来の大慈遍かざると謂うにはあらざるなり。譬えば説きて日光遍く天下を照すに有目の衆生を摂取して捨てずと云うが如きは、有目無目の衆生、日光の照触を得るは、弥陀の身光遍く十方衆生を照すが如し。有目の人は念仏の心あるが如し。日輪の其の体を示すは、弥陀の摂取を垂れるが如し。無目の人は念仏の心なきが如し。日輪の此の人の為に自体を示さざるは、弥陀の心光の摂取を蒙らざるが如し。無目の人の為に、日輪体を失わず、念心なき衆生の為に、無縁の大慈は止まず、見・不見は唯、眼目の有無に任せり。日輪の過にあらざらず、摂・不摂は亦念心の有無に依る。弥陀の過にあらざるなり。是の故に万境を歴て念心あるは、是れを念仏と名く。摂取を得ること、掌の中を指すが如し。其れ念心ある善根は、各の根機に符せり、一門を執するなかれ。是の故に諸師の此の文を釈すに、未だ心〔仁本・活本「心」の字「必」〕善導に同じからず。一往相違に似ると雖も、始終差異なし。往復旋り還りて、一念仏門に入る。上に出す所の十地の念仏等の義、念仏宗に引用せられて、即ち此の義を成ずるなり。

問う。若し言う所の如くならば、念仏の善は多善に通ずるを体と為す。然れば何が故ぞ前に引く所の

導疏「問端」中云、備修衆行、但能廻向皆得往生。何以仏光普照、唯撰念仏者、有何意也。文。此中衆行外、既出念仏善。明知二行遂有差別。何可會之乎。答。依善導意、世間孝養父母等善、未親縁如来身心故、不名念仏。然依廻向力、猶得往生。況中品下生人、雖修世福、未希求出離、如此疎縁未熟行、不發三昧、難得一心、廻向位雖有念仏義、(本職業種為因縁縁。求生心為次第縁。極樂依正為所縁縁。余法不礙為増上縁。依此有念仏心生故、起廻向善根。往生淨土六因四縁分別義可。見孔目章云云)非恒時相統故、謂稱名字觀相好等、初中後心恒縁仏境。如彼廻世善生上善者、後時雖縁仏境、初中心於余境上。是故念仏外出之也。此亦約一類作此說。一切未必例之。是故善導意、雖以稱名為門、所引念仏文中、亦通多善取之。即觀念法門云、問曰、仏勸一切衆生、發菩提心、願生西方弥陀仏國。又勸造阿弥陀像、稱揚禮拜、香華供養、日夜觀想不絶、又勸專念弥陀仏名、一万二万三万五万乃至十萬者、或勸誦弥陀經、十五二十三十五十一百、滿十萬遍者、現生得何功德、百年捨報已後有何利益、得淨土以下。答曰、現生及捨報決定有大功德利益、准依仏教、顯明五種増上利益因縁。一者滅罪増上縁、二者護念得長命増上縁、三者見仏増上縁、四者撰生増上縁、五者証生増上縁。(乃至)又依灌頂經第三卷説云、若人受三歸五戒者、仏勸天帝、汝差天神六十一人、日夜年月隨逐守護受戒之人、勿令獲諸惡鬼神相惱害、此亦是現生護念増上縁。又如淨度(仁本「土」)三昧經説云。仏告瓶沙大王、若有男子女人、於三月月六齋日及八王日、向天曹地府一切業道、數教首過、受持齋戒者、仏勸六欲天王、各差二十五善神、常采隨逐守護持戒之人、亦不令有諸惡鬼神相惱害、亦無橫病死亡災障、常得安穩、此亦是現生護念増上縁。(已上)此中既引三歸戒善功德文、為念仏護念縁。明知念仏善中撰戒善也。如戒善余善亦可准知。若念仏善通余善者、余善中亦撰念仏善也。相撰義如理可知之。是故三念中念仏善文、念仏宗引之為証。

*88下

善導の『疏』に問端を挙ぐる中に云く、「衆行を備さに修して、但能く廻向すれば皆往生を得。何を以て仏光普く照すに、唯、念仏者を撰するは、何の意かあるや」と。文。此の中に衆行の外に、既に念仏の善を出す。明らかに知りぬ、二行遂に差別あり。何ぞ之を會すべきや。

答う。善導の意に依らば、世間の孝養父母等の善、未だ如来の身心に親縁ならざる故に、念仏と名けず。然るに廻向の力に依りて、猶お往生を得。況んや中品下生の人、世福を修すと雖も、未だ出離を希せず、此の如き疎縁未熟の行、三昧を發さず、一心得がたし、廻向の位に念仏の義ありと雖も、(本職業種を因縁縁と為す。求生心を次第縁と為す。極樂の依正を所縁縁と為す。余法不礙を増上縁と為す。此れに依りて念仏心の生ずることある故に、廻向の善根を起す。往生淨土の六因四縁の分別の義は『孔目章』を見るべしと云云)恒時の相統にあらざる故に、謂く名字を稱し相好を觀する等、初中後心恒に仏境を縁ず。彼の世善を廻らして生るる如き等は、後時に仏境を縁ずと雖も、初中の心、余境の上に転ず。是の故に念仏の外に之を出すなり。此れ亦一類に約して此の説を作す。一切未だ必ずしも之に例せず。是の故に善導の意、稱名を以て門と為すと雖も、引く所の念仏の文中に、亦多善に通じて之を取。即ち『觀念法門』に云く、「問うて曰く、仏、一切衆生に勸めて、菩提心を發さしめ、西方弥陀仏國に生れんと願わしむ。又勸めて阿弥陀像を造り、稱揚禮拜、香華供養せしめ、日夜に觀想絶えざらしむ、又勸めて弥陀仏の名を專念せしむること、一万・二万・三万・五万乃至十萬の者、或いは勸めて『弥陀經』を誦すること、十五・二十・三十・五十・一百、十萬遍に滿つる者、現生に何の功德を得ん、百年捨報已後に何の利益あらん、淨土に生るることを得るや、いなや。答えて曰く、現生及び捨報に決定して大功德利益あり、仏教に准依して、五種の増上の利益の因縁を顯明せん。一には滅罪増上縁、二には護念得長命増上縁、三には見仏増上縁、四には撰生増上縁、五には証生増上縁なり。(乃至)又『灌頂經』第三卷の説に依りて云く、若し人の三歸五戒を受持する者、仏、天帝に勸す、汝天神六十一人を差わして、日夜年月に受戒の人に隨逐し守護せよ、諸の惡鬼神に横相惱害を獲しむることなかれ、此れ亦是れ現生増上縁なり。又『淨度(仁本「土」)三昧經』の説に云うが如し。仏、瓶沙大王に告げたまわく、若し男子・女人ありて、三月月六齋日及び八王日において、天曹地府一切の業道に向いて數教首過、齋戒を受持する者、仏、六欲天王に勸して、各の二十五善神を差わして、常に來たりて持戒の人に隨逐し守護せしめん、亦諸の惡鬼神の横相惱害をあらしめざれ、亦横病死亡災障なく、常に安穩を得、此れ亦是れ現生護念増上縁なり」と。(已上)此の中に既に三歸戒の善功德の文を引き、念仏の護念の縁と為す。明らかに知りぬ、念仏の善中に戒善を撰するなり。戒善の如く余善亦准じて知るべし。若し念仏の善、余善に通ずるならば、余善の中に亦念仏の善を撰するなり。相撰の義、理の如く之を知るべし。是の故に三念中の念仏善の文、念仏宗は之を引きて証と為す。然れば此の三念は亦三歸と名く。是の故に『經』中に、或いは「念仏・念法・念僧」と云い、或いは「歸仏・歸法・歸僧」と云え

*89上

然此三念亦名三歸。是故經中、或云念仏念法念僧、或云歸仏歸法歸僧。然歸仏義、未可必限稱名。依之通多善、立念仏名也。雖然善導撰他善、稱名作一門也。然則善導盡稱名義、他師極諸門理。其盡極者、即究竟二無我義、開闡三法印道。念仏善根得成立、往生直路無歧徑。諸經俱為一仏説。諸義同順一法印。各順一理修行、往生淨土無疑。唯念仏心為先者、百即百生千即千生、縱雖稱名字、無念仏心者、千中一難得。大綱是足、得一察万。此決若迄重重者、專修人定謂非善導一矣。

問曰、何為撰取義乎。答。撰取者、即是撰義也。即撰者、如下菩提資糧論第一積資糧義云。以持為義、譬如世間共行日撰於熱月撰於冷。撰是持義。如是持菩提法、為菩提資糧。言資糧者、即是持義云云。此亦如是、弥陀心光如日月、行者念心如熱冷。日撰熱者、同熱性故、心光撰念心者、同是念性故、月喻亦如是。日不撰冷者、不同性故、非可撰法。心光不撰無念者、不同念故、非可撰法。謂広歴諸法言之者、謂就四大種者、水大種成撰用。謂令離散極微撰之成一聚也。就心王言之者、謂阿頼耶識、撰藏諸法種子生現行。就心所言之者、謂念心所。撰所持緣令不忘。如此歴方境衆多。今言撰取者、謂仏は大覚円満聖者、衆生は無明未悟凡夫。迷悟既隔、如極微離散。然念仏心印持仏境、置迷心中、知水大種撰持極微。是故衆生稱念仏、亦俱時成撰取用。名字影。「底本・仁本附訓「ウカヒ」衆生舌端、法体入衆生思想中。如下有本質鏡現影像。是謂撰取義。善導三縁義、准此可知。挙要言」之者、三業常恒順仏境也。如下清涼大師出齊州大行禪師念仏行云。四字教詔、謂信憶二字不離於心、稱敬兩字不離身口。彼論云、往生淨土、要須有信。若信、千即千生、万即万生、信仏名字、不離心口、諸仏即救、諸仏即護。心恒〔隨疏演義鈔八五以下「隨疏」と稱なし〕常憶。〔隨疏「仏あり」、口常稱名、身恒常敬、始名深信、任意早晚、終無下再〔隨疏「暫」〕住閻浮之法上。

*399下

り。然れば歸仏の義、未だ必ずしも稱名に限らず。之に依りて多善に通じて、念仏の名を立つるなり。然りと雖も、善導は他善を撰して稱名に属して一門を作すなり。然れば則ち善導は稱名の義を尽くし、他師は諸門の理を極む。其の尽極は、即ち二無我の義を究竟し、三法印の道を開闡す。念仏の善根は成立を得、往生の直路に歧徑なし。諸經俱に一仏説を為す。諸義同じく一法印に順ず。各の一理に順じて修行す、往生淨土疑いなし。唯、念仏の心を先と為るは、百は即ち百ながら生れ千は即ち千ながら生る、縦い名字を稱すと雖も、念仏の心なくば、千の中に一も得ること難し。大綱是に足んぬ、一を得て万を察せよ。此に決するに若し重重に迄る者、專修の人は定んで善導にあらずと謂うのみ。

問うて曰く、何をか撰取の義と為すや。

答う。撰取は即ち是れ撰の義なり。即ち撰は、『菩提資糧論』の第一に資糧の義を積して云うが如し。「持を以て義と為す、譬えば世間の共行、日は熱を撰し月は冷を撰するが如し。撰は是れ持の義なり。是の如く菩提を持つ法を、菩提資糧と為す。資糧と言うは、即ち是れ持の義」と云云。此れ亦是の如し、弥陀の心光は日月の如し、行者の念心は熱冷の如し。日の熱を撰するは、同じく熱の性の故に、心光の念心を撰するは、同じく是れ念性の故に、月の喻も亦是の如し。日の冷を撰せざるは、同性ならざるが故に、撰すべき法にあらず。心光の無念を撰せざるは、同念ならざる故に、撰すべき法にあらず。謂く廣く諸法を歴りて之を言わば、謂く四大種に就いては、水大種は撰の用を成ず。謂く離散の極微の之を撰して一聚を成ぜしむるなり。心王に就いて之を言わば、謂く阿頼耶識、諸法の種子を撰藏して現行を生ず。心所に就いて之を言わば、謂く念心所なり。所縁を撰持して忘れざらしむ。此の如く万境を歴ること衆多なり。今、撰取と言うは、謂く仏は是れ大覚円満の聖者、衆生は是れ無明未悟の凡夫なり。迷悟既に隔たること、極微の離散するが如し。然るに念仏の心は仏境を印持して、迷心の中に置くこと、水大の種極微を撰持するが如し。是の故に衆生仏を称念すれば、亦俱時に撰取の用を成ず。名字衆生の舌端に影（底本・仁本附訓「うかび」）び、法体衆生の思想中に入る。本質ありて鏡に影像を現するが如し。是れを撰取の義と謂う。善導の三縁の義、此れに准じて知るべし。要を挙げて之を言わば、三業の常恒に仏境に順ずるなり。清涼大師の齊州大行禪師の念仏行を出して云うが如し。四字の教詔、謂く信憶の二字は心を離れず、稱敬の兩字は身口を離れず。彼の『論』に云く、「淨土に往生せんは、要らず須らく信あるべし。若し信せば、千は即ち千ながら生じ、万は即ち万ながら生ず、仏の名字を信じ、心口を離れざれば、諸仏即ち救け、諸仏即ち護りたまう。心に恒〔隨疏演義鈔「恒」なし〕常に憶〔隨疏演義鈔「仏」の字あり〕い、口に常に名を稱し、身に恒常に敬するを、始めて深信と名く。意を早晩に任せて、終に再〔再〕の字〔隨疏演義鈔「暫」〕び閻浮に住するの法なし。此に初心を策る、最

此策「初心」、最爲「要也」。(已上) 善導解釈亦准「此可」知。

是故「三業依順」仏境、「蒙」弥陀心光「撰取」故、「云」念仏衆生「撰取不捨」。於「身光照蝕」、非「有」彼此「分限」也。是故六時札讀、「弥陀身色如金山相好光明照十方」唯有念仏蒙光接当知本願最爲強等文、亦准「觀念法門」可「成一義」。即言「照十方」者、「十方衆生也」。言「蒙光接」者、「指」心光也。若不「爾者」、一師「解釋何成」梓楯乎。今所「成義」、五翻中依「異事翻」。謂蒙光接一言下有「二義」。一「身光」、二「心光」也。今會取「順理正義」、即爲「心光」也。七例中是第三例、「蒙光接義」、正依「心光位本」説。況云「光接」、不「云」光照。即指「撰念」也。如「彼云」彼仏心光常照是人「等者」、体用俱約「響説」也。今法譬双举、体用合明。即光者譬也、接者法也、光者体也、接者用也、「義准可」知。阿毘達磨法相如是。更可「止」迷倒也。然汝集出「此等文」、令「身光不」照「十方衆生」、亦不「分」身心「二光」。若如「汝所解」者、令「弥陀如来有」大悲不遍之過。又令「四十八願無」称性之徳。「汝非」造「書述」此義、假「凶像」頭「此意趣」、名「撰取不捨漫」。(仁本・活本「曼」) 茶羅。中央「凶」阿弥陀如来。光明照「十方」、周匝「在家出家諸人」、在家称名諸人受「光照」、出家雜善行人、不「蒙」照蝕。此像处处遍滿。無「情愚人等」、悉皆信「伏之」。称名行不「專一」、不法過日熾盛。以「此爲」往生淨業、以「此爲」深信至極。非「唯輕」聖道仏法、「還亦黷」淨土門行。

専修人問曰、「觀經説」第十一勢至觀「中云」、以「智慧光」普照「一切」、令「離」三塗「得無上力」。是故号「此菩薩」名「大勢至」。文。善導和尚釈云、「七明」光之体用、即無漏為「体故」、名「智慧光」。又能除「息十方三惡」。(「觀經疏」定善義「之」) 苦「名」無上力、即為「用也」等云云。案「釈意」曰、「此上經文云」、次觀「大勢至菩薩」、此菩薩身量大小、亦如「觀世音」、円光面各百二十五由旬、照「二百五十由旬」、举身光明照「十方国」、作「紫金色」、有縁衆生皆悉得「見」。但見「此菩薩一毛孔光」、即見「十方無量諸仏淨妙光明」、是故号「此菩薩」名「無辺光」。(已上) 此次以智慧光等文来。是故此釈中言「光之体用」者、上所説身光無漏為「体」、息苦為「用」。就「中智慧光者」、就「体立」名也。

*370上

も要と為すなり」と。(已上) 善導の解釈も亦此れに准じて知るべし。

是の故に三業仏境に順ずるに依りて、弥陀心光撰取を蒙むる故に、「念仏衆生撰取不捨」と云う。身光照蝕において、彼此の分限あるにあらざるなり。是の故に『六時札讀』に、「弥陀身色如金山相好光明照十方」唯有念仏蒙光接 当知本願最爲強」等の文、亦『觀念法門』に准じて一義を成すべし。即ち「照十方」と言うは、十方衆生なり。「蒙光接」と言うは、心光を指すなり。若し爾らずば、一師の解釋何ぞ梓楯を成ぜんや。今、成ずる所の義は、五翻中の異事の翻に依る。謂く「蒙光接」の一言下に二義あり。一に身光、二に心光なり。今、会して順理正義を取りて、即ち心光と為すなり。七例中の是れ第三例、「蒙光接」の義、正しく心光位本に依る説なり。況んや光接と云うは、光照と云わず。即ち撰念を指すなり。彼に「彼仏心光常照是人」と云うが如き等は、体用俱に譬えに約する説なり。今、法譬双へ挙げて、体用合すること明らかなり。即ち光は譬なり、接は法なり、光は体なり、接は用なり、義准じて知るべし。阿毘達磨の法相は是の如し。更に迷倒を止むべきなり。然るに汝が『集』に此れ等の文を出して、身光をして十方衆生を照さざらしむ、亦身心の二光を分けず。若し汝が所解の如きは、弥陀如来をして大悲不遍の過あらしむ。又四十八願をして称性の徳なからしむ。汝が書を造るに此の義を述ぶるのみにあらず、凶像を仮りて此の意趣を顕わし、撰取不捨漫(「漫」の字、仁本・活本「曼」) 茶羅と名く。中央に阿弥陀如来を図す。光明十方を照すに周・に在家出家の諸人を図す、在家称名の諸人は光照を受く、出家雜善の行人は、照蝕を蒙むらず。此の像处处に遍滿す。情なき愚人等、悉く皆之に信伏す。称名の行専一ならず、不法の過日に熾盛なり。此を以て往生の淨業と為す、此を以て深信の至極と為す。唯、聖道の仏法を軽んずるのみにあらず、還りて淨土門の行を黷せり。

*370下

専修人の問うて曰く、『觀經』の第十一勢至觀を説きたまう中に云く、「智慧光を以て普く一切を照し、三塗を離れ無上力を得しめたまう。是の故に此の菩薩を号して大勢至と名く」と。文。善導和尚の釈して云く、「七には光の体用を明かす、即ち無漏を体と為す故に、智慧光と名く。又能く十方の三惡三(「三」の字、『觀經疏』定善義「之」) 苦を除息するを無上力と名く、即ち用と為すなり」等と云云。釈意を案じて曰く、此の上の經文に云く、「次に大勢至菩薩を觀ず、此の菩薩の身量の大小、亦觀世音の如し、円光面各の百二十五由旬、二百五十由旬を照したまう、举身の光明は十方国を照し、紫金色と作る、有縁の衆生皆悉く見たてまつることを得。但此の菩薩の一毛孔の光を見たてまつるに、即ち十方無量諸仏の淨妙の光明を見たてまつる、是の故に此の菩薩を号して無辺光と名く」と。(已上) 此の次に「以智慧光」等の文来る。是の故に此の釈の中に「光の体用」と言うは、上の所説の身光は無漏を体と為す、息苦を用と為す。中に就いて智慧光は、体に就いて名を立つるなり。即ち有爲無漏は道諦の撰なるが故

即有為無漏道諦撰故、言「智慧光」也。(為言)然者今所「言心光義、亦可例」此。非「弥陀身光無漏為」体故、舉「四智相応淨識」為「身光体」云「心光」乎。望「地上菩薩識所變、淨土諸境雖」通「有漏無漏、今善導意、且舉無漏義邊。無漏義亦雖」通「心境、善導意亦取無漏心心所法。是故積勢至觀、就經說取淨識相応心所、積「弥陀身光、雖」無「文、依」理出「心王淨識」云「心光。此即可」云「出」身光体也。然者我之所「因曼荼羅、何為」謬乎、如何。

答。此救不「可」然、勢至觀經文、連「統名無辺光文、言」以「智慧光等」。所以善導積「明」上「身光体」也。第九觀中、不「云」智慧光、唯云「念仏衆生撰取不捨、於」八字中、「下四字即弥陀慈念功用也。仏地色心俱雖」尊高、「慈念功德約」意業故、「撰取不捨之言、全不」関「身光。是故身光照」十方衆生、「顯」大悲普遍徳。「心光撰」專念行者、「成」感応必然義。善導宗義如「是。觀念法門解釋、如」向「鸞鏡。若不」然者、「有」何用「五処遍照文外可」云「但有專念等」乎。若成「此義」者、聞「念仏名字」人、倍可「增」信敬。若如「汝義」者、令「弥陀如來有」愛憎過。生機衆生、豈得「入」弥陀願海乎。更可「止」迷倒也。若如「汝所解」者、我亦欲「因」一「弥陀撰取曼荼羅」。謂如「前所」出、觀經并善導解釋中、口稱憶念差別。其中語意合取「之者、唯為」一念仏三昧。其旨如「上成」。又善導觀念法門、引「六部往生經」明「五種増上縁義、多出」親念想利益文、「為」念仏功德。然般舟三昧經是六部之随一也。彼經中舉「丈夫念」須門等「三女人」譬喻、「説」念仏義、「以」心念「為」主、終明「發得三昧」義。善導法事讚出「召請詞」。発句云、般舟三昧樂願往生。又觀經疏并觀念法門、積「身光照」一切「心光撰」念仏者、「能所撰取義、心念勝故也。若爾者、約」合門「者、語意雖」無「差別、約」離門「者、心念是為」勝。如「觀仏三昧經第三云、稱」南無仏、「所」得果報、今於「我世」現前受「記。何況正念思惟」仏「者。文。如」是文証非「一。此復如」上成。「就」善導宗義、「以」心念「非」不「為」本。然者我令「弥陀光明照」触觀念行者、「欲」隔「称名行者」如何。汝捨「心念」取「称名」者、如「捨」種求「菓。我取」深捨「浅者、且可」成「捨劣得勝一義。此為」懲「汝狭

*37上

に、智慧光と言うなり。(為言)然れば今、言う所の心光の義、亦此れに例すべし。弥陀の身光は無漏を体と為す故に、四智相応の淨識を挙げて身光の体と為て、心光と云うにあらずや。地上の菩薩の識所變に望みて、淨土の諸境の有漏・無漏に通ずと雖も、今、善導の意、且く無漏の義邊を挙ぐ。無漏の義は亦心境に通ずと雖も、善導の意は亦無漏の心・心所法を取る。是の故に勢至觀を積して、經說に就いて淨識相応の心所を取る、弥陀の身光を積するに、文なしと雖も、理に依りて心王の淨識を出して心光と云う。此れ即ち身光の体を出すと云うべきなり。然れば我れの因する所の曼荼羅、何ぞ謬りと為んや、いかん。

答う。此の救い然るべからず、勢至觀の經文、「名無辺光」の文に連続して、「以智慧光」等と言う。所以に善導は上の身光の体を明かすと積するなり。第九觀の中に、智慧光と云わず、唯、「念仏衆生撰取不捨」と云う、八字の中において、下の四字は即ち弥陀の慈念の功用なり。仏地の色心俱に尊高なりと雖も、慈念の功德は意業に約する故に、「撰取不捨」の言、全く身光に関わらず。是の故に身光の十方衆生を照したまうに、大悲普遍の徳を顯わしたまう。心光の專念の行者を撰するは、感応必然の義を成す。善導の宗義は是の如し。『觀念法門』の解釋、鸞鏡に向うが如し。若し然らずば、何の用ありてか五処遍照の文の外に「但有專念」等と云うべきや。若し此の義を成せば、念仏名字を聞く人、倍す信敬を増すべし。若し汝等の如きは、弥陀如來をして愛憎の過あらしめん。生機の衆生、豈に弥陀の願海に入ることを得んや。更に迷倒を止むべきなり。若し汝が所解の如くならば、我れ亦一の弥陀撰取曼荼羅を因かんと欲す。謂く前に出す所の如し、『觀經』並びに善導の解釋の中に、口稱・憶念の差別あり。其の中の語意を合して之を取らば、唯、一念仏三昧と為す。其の旨は上に成ずる如し。又善導の『觀念法門』に、六部の往生經を出して五種の増上縁の義を明かすに、多く觀念想利益の文を出して、念仏の功德と為す。然るに『般舟三昧經』は是れ六部の随一なり。彼の經の中に丈夫の須門等三女人を念ずる譬喻を挙げて、念仏の義を説くに、心念を以て主と為して、終に三昧を發得する義を明かす。善導の『法事讚』に召請の詞を出す。発句に云く、「般舟三昧樂願往生」と。又『觀經疏』並びに『觀念法門』に、身光の一切を照らしたまうに心光の念仏者を撰するを積するは、能所撰取の義、心念勝れたる故なり。若し爾れば、合門に約するは、語意に差別なしと雖も、離門に約さば、心念是れを勝と為す。『觀仏三昧經』の第三に云うが如し、「南無仏と称せば、得る所の果報、今、我が世において現前に記を受く。何に況んや正念に仏を思惟せん者をや」と。文。是の如き文証は一にあらず。此れ復上に成ずるが如し。善導の宗義に就いて、心念を以て本と為すにはあらず。然れば我れ弥陀の光明をして觀念の行者に照触せしめん、称名の行者を隔てんと欲す、いかん。汝が心念を捨て称名を取るは、種を捨て菓を求むるが如し。我れ深を取り浅を捨つるは、且く捨劣得勝の一義を成すべし。此れ汝が狭心を懲らしめん為に、且く仮説を設くる、実に称名の行者を隔つと謂うにあらず、驚くなかれ驚くなかれ。

心、且設「假說」、実非謂「隔」称名行者、莫驚莫驚矣。

專修人問曰、我所存義、全不言「取」心念、如「汝之所」責、三心具足、我等共「許」之、然此三心非「必」菩提心。但是信解願欲之心也。然所立意趣、弥陀名号有「不思議」功力之故、設雖「無」菩提心、唯一向專稱、速得「往生」、設雖「有」菩提心、不「稱」仏号者、是雜行故、難「得」往生。所以作「此說」者、近代無「道心」之人、若道心為「先」者、難「入」淨土門。若聞「此旨」者、可有「念仏」之人。作「此集」述「此義」之意趣、甚依「之」也。汝押破「此義」、以「菩提心」為「先」者、誰人有「菩提心」入「淨土門」耶、如何。

*371下

答。言「菩提心」種類不同。有「緣發心」、有「解發心」、有「行發心」等種類、如「前出」。然依「善導意」、淨土宗尤可「取」緣發心。其旨如「土成」。此緣發心、香象大師名「捨邪趣正發心」。翻「無始癡心」、始「向」正道之故。然此緣發心、委細言之、可「通」三乘。有「生」淨土「証」小果之類故。然經論所說、多分說「大乘菩提心」。是殊勝故、為「令」人向「大乘」故。小菩提下劣故、入「二乘道」者、諸仏所「呵」故、於「諸經論」中、広不「讚」之。是故懷感師中品往生人、言「無」菩提心者、指「無」上大菩提心。然言「至心發願」者、言「指」大菩提心。汝又不「許」以「至心發願」為「因」乎。然者此至心發願者、可「當」緣發心。諸樂「往生」輩、誰人無「此心」乎。如「上出大日經」所說。初發心既未「分」別邪正是非。豈足「為」難乎。然者何依「菩提心」為「先」、難「入」往生門「乎」。

問。爾者諸經論、何故以「菩提心」為「難」起乎、如何。答。宿善深厚有「大種姓」人易「發」故、云「不」難也。若無「宿善」小心小姓者、雖「遇」善友、不「肯」聞「深法」、無「由」起「此心」、唯雖「有」厭苦欣樂之心、更無「下」樂「仏境」之志。諸經論依「此義」說「難」發也。今唯約「大種姓人」作「此說」而已。是故所「以」付「属名号」者、深察「宗趣」、設雖「無」余行、念心甚深者、可「往生」也。於「其念心」、以「菩提心」可「為」根本也。然何以「菩提心」、可「云」抑「念仏」耶。檢「抑字」者、玉篇云、損也。即是善畏提心云「損」念仏也。若爾者、被「損」菩提心一名号者、可「為」天魔波旬之名号。豈以「阿弥陀如来」、非「為」天

*372上

專修人の問うて曰く、我が所存の義、全く心念を取らずと言ふにあらず、汝の責むる所の如くならば、三心の具足、我等は之を共に許す、然るに此の三心は必ずしも菩提心にあらず。但是れ信解願欲の心なり。然れば所立の意趣、弥陀の名号に不思議の功力ある故に、設い菩提心なしと雖も、唯、一向に専稱すれば、速やかに往生を得、設い菩提心ありと雖も、仏号を称えずば、是れ雜行の故に、往生を得難し。此の説を作す所以は、近代の道心なきの人、若し道心を先と為さば、淨土門に入り難し。若し此の旨を聞く者に、念仏の人あるべし。此の『集』を作りて此の義を述ぶるの意趣、甚だ之に依るなり。汝は押して此の義を破し、菩提心を以て先と為すは、誰の人か菩提心ありて淨土門に入るや、いかん。

答う。菩提心と言ふに種類不同なり。緣發心あり、解發心あり、行發心等の種類あり、前に出すが如し。然れば善導の意に依るに、淨土宗尤も緣發心を取るべし。其の旨は上に成ずるが如し。此の緣發心、香象大師は捨邪趣正發心と名く。無始の癡心を翻して、始めて正道に向うが故に。然れば此の緣發心、委細に之を言わば、三乘に通ずべし。淨土に生れ小果を証する類あるが故に。然るに經論の所說、多分に大乘の菩提心を説く。是れ殊勝なるが故に、人をして大乘に向わしめん為の故に。小菩提は下劣の故に、二乗の道に入る者、諸仏の呵する所なる故に、諸經論の中において、広く之を讚めず。是の故に懷感師は中品の往生人に、菩提心なしと言ふは、無上菩提心を指す。然れば至心發願と言ふは、大菩提心を指して言ふ。汝は又至心發願を以て因と為すを許さざるや。然れば此の至心發願は、緣發心に當るべし。諸の往生を樂うの輩、誰の人か此の心なきや。上に出す『大日經』の所說の如し。初發心既に未だ邪正是非を分別せず。豈に難と為すに足らずや。然れば何ぞ菩提心を先と為すに依りて往生門に入り難きや。

問う。爾れば諸の經論に、何の故か菩提心を以て起し難きと為んや、いかん。答う。宿善深厚にして大種姓あるの人は發し易き故に、難からずと云うなり。若し宿善なき小心小姓の者は、善友に遇うと雖も、深法を聞くを肯わず、此の心を起すに由なし、唯、厭苦欣樂の心ありと雖も、更に仏境を樂の志なし。諸の經論は此の義に依りて發し難しと説くなり。今は唯、大種姓の人に約して此の説を作すならくのみ。是の故に名号を付属する所以は、深く宗趣を察するに、設い余行なしと雖も、念心甚深なる者は、往生すべきなり。其の念心において、菩提心を以て根本と為すべきなり。然れば何ぞ菩提心を以て、念仏を抑うと云うべきや。「抑」の字を・すれば、『玉篇』に云く、「損なり」と。即ち是れ菩提心は念仏を損なうと云うなり。若し爾れば、菩提心に損なわるる名号は、天魔波旬の名号と為すべし。豈に阿弥陀如来を以て、天魔波旬と為すにあらずや、諸仏の怨敵と謂うにあらずや。

魔波旬^レ乎、非^レ謂^レ諸^レ仏之怨敵^一乎。勿^レ謂^レ勿^レ謂。上品円満之邪見、何事過^レ之乎。

又仏之字即是菩提也。此義如上出。仏陀此云^レ覺、菩提此云^レ智、名異義同。然就阿弥陀仏名字^二積^一其義者、若就字義者、阿字者本不生義、此諸法本際、離^二空有^一二辺義也。弥者吾我不可得、人法二我俱空。謂依本際不生故也。帶短伊音、即是根本義也。謂生死本以^二人法^一二執^一為^二根本^一。阿字不生心地、此二我都無^二自性^一也。比二我無自性處、名^二真如^一。即是陀字、如不可得義也。此真如性離^二情謂四句^一、是云^二不可得^一。(且約^二順觀^一。逆觀准知。)覺^二知此義^一人、名^二仏也^一。上三字所覺、仏字是能覺也。上三字是理、下一字是智、理智円満為^レ仏、即是菩提涅槃^二轉依果也^一。是故唱^二此名字^一、即含^二藏無辺功德^一也。然若無^二仏字^一、上三字未^二必人^一、唯是諸法実義也。結^二上三字^一属^レ人、即是阿弥陀仏也。是故仏言者、即是菩提心也。又就^二字義^一旋轉觀時、順逆絞絡、終歸^二初阿字^一。其阿字者、即菩提心也。阿字觀義、此中可^二広説^一。即是阿弥陀名字体也。汝勸^二称名^一而以^二菩提心^一云^レ抑^二念仏^一、既如^二云^一我母是其石女。即犯^二自語相違^一也、可^レ咲可^レ咲。又阿弥陀此云^二無量寿^一、然云^二無量寿^一時、未^二必知^一仏、終云^二仏時^一、即是為^二阿弥陀如来^一也。若爾者、字義句義、俱以^二菩提心^一為^二仏体^一。汝何以^二仏体^一云^二妨礙^一仏体^一乎。

又大日經疏云、東方宝幢仏、是菩提心也。如^二世軍中有^一幢、是衆中首軍之標幟、咸所^二胆^一。(仁本・活本「瞻」望、進止節莫^レ不^レ隨^レ之。猶如^二一切万行皆為^一此菩提心。以此為^二標主^一故、得名也。南方華開敷仏、是行義。十度万行、由^二菩提心^一次第敷榮。芽・莖・華・葉・滋榮可^レ愛故、得名也。西方阿弥陀、是受用仏。即是成^二大果実^一、受^二用其果無量不思議現法之樂^一故、得名也。北方鼓音仏、是方便也。既得^二大果^一、豈是自受用而已。即為^二一切衆生^一演^レ之、種種方便成所作智。猶如^二天鼓之音無思而成^一事業^一故、得名也。(略抄)当^レ知阿弥陀者、即菩提心果也。其果者、即涅槃界也。依^二秘密釈^一者、菩提心果始終不壞故、離^二微細生滅^一、指^レ之云^二無量寿^一也。是故若汝

謂うなかれ謂うなかれ。上品円満の邪見、何事か之に過ぐるや。

又「仏」の字は即ち是れ菩提なり。此の義は上に出すが如し。仏陀は此に覺と云う、菩提は此に智と云う、名異なり義同じ。然れば阿弥陀仏の名字に就いて其の義を積せば、若し字義に就いては、「阿」の字は本不生の義、此れ諸法の本際、空有二辺を離るる義なり。「弥」は吾我不可得、人法二我俱に空なり。謂く本際不生に依る故なり。短伊の音を帯びるは、即ち是れ根本の義なり。謂く生死の本は人法二執を以て根本と為す。阿字不生の心地、此の二我は都て自性なきなり。此の二我の無自性の處、真如と名く。即ち是れ「陀」の字、如不可得の義なり。此の真如の性は情謂四句を離る、是れを不可得と云う。(且く順觀に約す。逆觀准じて知れ。)此の義を覺知する人、仏と名くるなり。上の三字は所覺、「仏」の字は是れ能覺なり。上の三字は是れ理、下の一字は是れ智、理智円満なるを仏と為す、即ち是れ菩提涅槃の二は転依の果なり。是の故に此の名字を唱うるは、即ち無辺の功德を含藏するなり。然れば若し「仏」の字なくば、上の三字は未だ必ずしも人にあらず、唯、是れ諸法の実義なり。上の三字を結するは人に属す、即ち是れ阿弥陀仏なり。是の故に「仏」の言は、即ち是れ菩提心なり。又字義に就いて旋轉して觀する時は、順逆絞絡して、終に初めの「阿」の字に歸す。其の「阿」の字は、即ち菩提心なり。阿字觀の義、此の中に広く説くべし。即ち是れ阿弥陀の名字の体なり。汝が称名を勧めて而も菩提心を以て念仏を抑うと云うは、既に我が母は是れ石女と云うが如し。即ち自語の相違を犯すなり、咲うべし咲うべし。又「阿弥陀」は此に無量寿と云う、然れば無量寿と云う時に、未だ必ずしも仏を知らず、終に「仏」と云う時に、即ち是れ阿弥陀如来と為すなり。若し爾れば、字義句義、俱に菩提心を以て仏体と為す。汝、何ぞ仏体を以て仏体を妨礙すると云うや。

*32下

又『大日經疏』に云く、「東方の宝幢仏、是れ菩提心なり。世軍の中に幢あるが如し、是れ衆中の首軍の標幟、咸く胆(胆)の字、仁本・活本「瞻」望せらる、進止の節に之に随わざるはなし。猶お一切の万行は皆此の菩提心と為めなるが如し。此れを以て標主と為す故に、名を得るなり。南方の華開敷仏、是れ行の義なり。十度の万行は、菩提心に由りて次第に敷榮す。芽・莖・華・葉の滋榮して愛すべき故に、名を得るなり。西方の阿弥陀、是れ受用仏なり。即ち是れ大果実を成ず、其の果は無量不思議の現法の樂を受用するが故に、名を得るなり。北方の鼓音仏、是れ方便なり。既に大果を得、豈に是れ自受用ならくのみや。即ち一切衆生の為に之を演ぜん、種種方便の成所作智なり。猶お天鼓の音の無思にして事業を成ずる如き故に、名を得るなり」と。(略抄)当に知るべし、阿弥陀は、即ち菩提心の果なり。其の果は、即ち涅槃界なり。秘密釈に依らば、菩提心の果は始終不壞の故に、微細の生滅を離る、之を指して無量寿と云うなり。是の故に若し汝が初心の菩提心を嫌うは、大樹の本莖を捨つるが如し、

嫌「初心菩提心」者、如「捨」大樹本莖、若無「本莖」者、不「成」枝条菓実、不「成」諸度枝条者、不「成」大覺菓実。若嫌「後心」者、即是捨「離」仏体也。何念「仏号」耶。当「知」仏果位以「菩提心」為「体」、又為「名字」。仏子又以「菩提心」為「歌羅羅種子」。(如「前出」)「苦無」此心者、如來大悲胎藏不能「養育」。是故秘密大乘重戒云、不「可」捨「離」菩提心、若捨「此心」者、非「仏子」。(梵網經并大日經等意)「十善戒等、世出世通用之善也。以此戒」為「仏法不共甚深重戒」也。設雖有「破」余戒、若有「菩提心」、即為「仏子」也。如「華嚴經」云。善男子、譬如「金剛雖」破不「全」、猶勝「衆宝全莊嚴具」。菩薩摩訶薩亦復如是。發「菩提心」一切智宝、雖「諸戒行多有」損欠、終能捨「離」一切生死。善男子、譬如「金剛乃至」少分悉能破「壞」一切諸物。菩薩摩訶薩亦復如是。發「菩提心」、乃至一念、即破「一切無量諸感」。文。仏意珍「重菩提心宝」如是。然汝「凌蔑」之、即非「仏子」也。如「同經」云、譬如「金剛不」識「宝人」不「知」其能「不」得「受用」。菩薩摩訶薩菩提心金剛亦復如是。鈍根無智下劣凡夫、不「了」其能、不「得」其用云云。不「識」菩提心宝、不「知」其能、不「得」受用、於「凡夫中」、汝是鈍根無智下劣卑賤愚童也。經文所指正當「汝等」也。問曰、我聞「此難破」、於「菩提心」彌增「退心」。經文既云「鈍根無智下劣凡夫不」得「其用」。我等實為「此類」。更不「得」以「菩提心」為「己有」、如何。答。爾者、汝一人專「此思」、更勿「以」此劣弱卑少之語「令」聞「諸人」。大小根機不同。余人未「必如」汝也。夫衆生無「定性」、隨「縁起」行、悉皆有性。值「大縁」必起「大心」。今聞「汝之言」、甚以可「愍」。華嚴經亦有「誠文」云、如「師子王哮吼之時、師子兒聞、皆增」勇健、余獸聞「之」、脂血銷耗、即皆竄伏。仏師子王菩提心吼一切智声「亦」知亦爾、諸菩薩聞、養「育」法身「增」長功德、其餘一切邪執衆生聞、皆退散、如「氷銷積」。(已上)如來師子王大菩提心哮吼音声、大心衆生堪「聞」之、如「汝等」邪執劣下小獸聞、倍悶絶。誠以可「悲」可「悲」矣。

*373上

若し本莖なくば、枝条菓実を成ぜず、諸度枝条を成ぜずば、大覺菓実を成ぜず。若し後心を嫌わば、即ち是れ仏体を捨離するなり。何ぞ仏号を念ぜんや。当に知るべし、仏の果位は菩提心を以て体と為す、又名字と為す。仏子は又菩提心を以て歌羅羅種子と為す。(前に出すが如し)若し此の心なくば、如來の大悲の胎藏も養育する能わず。是の故に『秘密大乘重戒』に云く、「菩提心を捨離するべからず、若し此の心を捨つるは、仏子にあらず」と。『梵網經』並びに『大日經』等の意)「十善戒等は、世・出世通用の善なり。此の戒を以て仏法不共甚深の重戒と為すなり。設い余戒を破することありと雖も、若し菩提心あらば、即ち仏子と為すなり。『華嚴經』に云うが如し。「善男子、譬えば金剛の破して全ならずと雖も、猶お衆宝の全莊嚴具に勝るが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。菩提心一切の智宝を發さば、復至劣虧損ありと雖も、猶お一切の二乗の功德に勝ることし。善男子、譬えば金剛の損欠ありと雖も、猶お能く一切の貧苦を除滅するが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。菩提心一切の智宝を發さば、諸の戒行に多く損欠ありと雖も、終に能く一切の生死を捨離せん。善男子、譬えば金剛の乃至少分も悉く能く一切の諸物を破壊するが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。菩提心を發さば、乃至一念も、即ち一切の無量の諸惑を破せん」と。文。仏意に菩提心の宝を珍重せんこと是の如し。然るに汝は之を凌蔑せん、即ち仏子にあらざるなり。同『經』に云うが如し。「譬えば金剛の宝なるを識らざる人は其の能を知らずして受用を得ざるが如し。菩薩摩訶薩の菩提心の金剛も亦復是の如し。鈍根の無智下劣の凡夫、其の能を了らず、其の用を得ず」と云云。菩提心の宝を識らず、其の能を知らず、受用を得ず、凡夫の中に於いて、汝は是れ鈍根無智下劣の卑賤の愚童なり。經文の指す所は正に汝等に當るなり。

問うて曰く、我れ此の難破を聞くに、菩提心において弥いよ退心を増す。經文に既に「鈍根の無智下劣の凡夫は其の用を得ず」と云う。我等は實に此の類と為す。更に菩提心を以て己にありと為すを得ず、いかに。

答う。爾れば、汝一人のみ此の思いを専らにせよ、更に此の劣弱卑少の語を以て諸人に聞かしむることなかれ。大小の根機は不同なり。余人は未だ必ずしも汝が如くにはあらざるなり。夫れ衆生に定性なし、縁に隨いて行を起こす、悉く皆有性なり。大縁に値うは必ず大心を起こす。今、汝の言を聞くは、甚だ以て愍れむべし。『華嚴經』に亦誠文ありて云く、「師子王の哮吼の時に、師子の兒の聞かば、皆勇健を増す、余の獸の之を聞かば、脂血は銷耗し、即ち皆竄伏するが如し。仏師子王の大菩提心吼の一切智声は應に知るべし、亦爾なり、諸の菩薩の聞かば、法身を養育し功德を増長す、其の余の一切邪執の衆生の聞かば、皆退散す、氷銷の積の如し」と。(已上)如來師子王の大菩提心哮吼の音声、大心の衆生は之を聞くに堪えたり、汝等が如き邪執劣下の小獸の聞かば、倍す悶絶す。誠に以て悲しむべし悲し

問曰、爾者汝有「菩提心」乎。答。設雖「無」之、如「此知」、是「正見」也。既有「正見」者、欣「可」欣、厭「可」厭。知「菩提心」是「仏道正因」故、念念愛「樂」之。知「汝所立」是「邪道」故、念念厭「惡」之、終必可「下」增「長菩提心」成「無上仏果」。汝厭「惡菩提心」、仏種「既朽敗」。妙果依「何得」成。況又有「相発心」、行「相麤頭」。随「分愛」樂「仏境」者、何必非「菩提心」乎。

問。爾者、我亦随「分厭」生死、欣「極樂」、何是非「菩提心」乎。答。汝厭「菩提心」。若言「有菩提心」者、是「墮」負「処」也。既有「雜行過」。苦如「汝所」言、望「往生」者、千希得「三五歟」。又設汝雖「稱」自有「菩提心」、是可「非菩提心」。夫菩提心者、捨「邪趣」正「行相」也。既有「此大邪見」、非「菩提心」也。唯有「厭苦欣樂心」、外道「邪宗」亦厭「生死」求「解脱」、彼非「三乘菩提心」也。華嚴經中、有「一菩薩」説「大願」云、「寧惡道多劫受」苦聞「仏名」、不願「下」生「善道」暫時不「聞」仏。寧地獄多劫受「苦常見」仏、不願「下」離「三塗」生「無二仏法」処。(已上)当「知」諸「菩薩雖」不「厭苦」、有「菩提心」。汝雖「厭苦」、無「菩提心」。又汝厭「苦欣樂心」、非「唯不」為「仏乘菩提心」、亦非「声聞縁覺菩提心」。何者依「分別事識資持力」故、偏向「入空」一「理」発心、名「二乘菩提心」。然人「空理」中、五蘊皆「空」。汝捨「離菩提心」、別立「念仏心」、其体可「非」空「理」。若「非」空「理」者、是可「為」性有。然者可「同」外道計、「非」仏「法」也。如「成実論」第一云。仏経「清浄」、所説「義趣不」違「実相」、不「同」外道。文。汝之「邪集不」清浄。所説「義趣違」背「実相」。是故其過「同」外道也。其義如「上説」。若亦如「此執立」一「宗」者、可「為」外道宗「義」。然内心不「知」此「義」、意「許欲」演「仏法甚深秘要」、而誤墮「此邪道」。非「仏子」非「外道」、唯可「同」木石。雖「然常途立」附「仏法外道」、例「彼」云「之者」、汝亦可「同」彼「類」也。若又如「汝所」言者、為「善導和尙非」道「心者」乎。苦言「為」道「心者」、是可「為」雜「行人」。爾者非「汝等之祖師」、当「知善導」是「大菩提心」仏子也。勸「往生」亦以「菩提心」為「正業」。汝是「撥」菩提心「之愚童」也。已漏「善導之教訓」。勿「以」善導「為」我「之高祖」。善導「採集中」、都無「此義」。酌「善導

*373下

*374上

むべし。

問うて曰く、爾れば汝に菩提心ありや。答う。設い之なしと雖も、此の如く知る、是れ正見なり。既に正見ある者は、欣うべきを欣い、厭うべきを厭う。菩提心は是れ仏道の正因と知る故に、念念に之を愛樂す。汝が所立は是れ邪道なりと知る故に、念念に之を厭惡し、終に必ず菩提心を増長し無上の仏果を成ずべし。汝の菩提心を厭惡する、仏種既に朽敗せり。妙果何に依りてか成ずるを得んや。況んや又有相の発心、行相麤頭なり。随分に仏境を愛樂するは、何ぞ必ず菩提心にあらずや。

問う。爾れば、我れ亦随分に生死を厭い極樂を欣う、何ぞ是れ菩提心にあらずや。答う。汝は菩提心を厭う。若し菩提心ありと言わば、是れ負処の墮すなり。既に雑行の過あり。若し汝が言う所の如く、往生を望まば、千は希に三五を得るや。又設い汝自ら菩提心ありと稱すと雖も、是れ菩提心にあらずべし。夫れ菩提心は、捨邪趣正の行相なり。既に此の大邪見あり、菩提心にあらずなり。唯、厭苦欣樂の心あり、外道の邪宗も亦生死を厭い解脱を求む、彼は三乗の菩提心にあらずなり。『華嚴經』の中に、「一菩薩ありて大願を説きて云く、「寧ろ惡道にして多劫に苦を受け仏名を聞かん、善道に生じて暫時に仏を聞かざることを願わず。寧ろ地獄にして多劫に苦を受け常に仏を見たてまつらん、三塗を離れて仏法なき処に生ずるを願わず」と。(已上)当に知るべし、諸の菩薩は苦を厭わずと雖も、菩提心あり。汝は苦を厭うと雖も、菩提心なし。又汝が厭苦欣樂の心、亦仏乘の菩提心と為さざるにもあらず、亦声聞縁覺の菩提心にもあらず。何者か分別事識資持力に依る故に、偏に入空一理に向いて発心するを、二乗の菩提心と名く。然るに入空の理の中に、五蘊皆空なり。汝は菩提心を捨離して、別して念仏心を立つ、其の体は空理にあらずべし。若し空理にあらずば、是れ性有と為すべし。然れば外道の計に同ずべし、仏法にあらずるなり。『成実論』の第一に云うが如し。「仏経清浄にして、所説の義趣は実相に違わず、外道に同ぜず」と。文。汝が邪『集』不清浄なり。所説の義趣は実相に違背す。是の故に其の過は外道に同じきなり。其の義は上に説くが如し。若し亦此の如く執して一宗を立つるは、外道の宗義と為すべし。然るに内心に此の義を知らず、意許して仏法甚深の秘要を演べんと欲す、而も誤りて此の邪道に墮せり。仏子にあらず外道にあらず、唯、木石に同ずべし。然りと雖も常途に附仏法の外道を立つ、彼に例して之を云わば、汝は亦彼の類に同ずべきなり。若し又汝の言う所の如くならば、善導和尙は道心の者にあらずと為んや。若し道心の者と為すと言わば、是れ雜行人と為すべし。爾れば汝等の祖師にあらず、当に知るべし、善導は是れ大菩提心の仏子なり。往生を勧むるに亦菩提心を以て正業と為す。汝は是れ菩提心を撥するの愚童なり。已に善導の教訓に漏る。善導を以て我が高祖と為すことなかれ。善導の撰集中に、都て此の義なし。善導の末流を酌んで、還りて善導の宗源を穢す。悲しむべし悲しむべし。

末流、還穢善導之宗源。可悲可悲哀矣。

問。菩提心可有種類不同。一聖道門菩提心、二淨土門菩提心是也。汝之所出者、是可為聖道門。選択集所捨是也。於淨土門菩提心者、不可捨之。是故彼集今汝所引積付屬文之中云、發菩提心者、諸師意不同也。天台即有四教菩提心。謂藏通別円是也。具如止觀說。真言即有三種菩提心。謂行願勝義三摩地是也。具如菩提心論說。華嚴亦有菩提心。知彼菩提心義及遊心安樂道等說。三論法相各有菩提心。具如彼宗章疏等說。又有善導所積菩提心。具如疏述。發菩提心、其言雖一、各隨其宗其義不同。然則菩提心之一句、広亘詩經、遍該顯密。意氣博遠、詮測沖懇。願諸行者莫執一遮一。請求往生之人、各須發自宗之菩提心。縱雖無余行、以菩提心為往生業也。已上集文。此中既分諸宗菩提心、剩不限淨土菩提心、云雖無余行以菩提心為往生業。既不簡他宗、況於淨土菩提心、何捨之乎。故知今所引難文理者、於菩提心者、其行相深遠也。且取信解願欲之心不為菩提心、偏以專稱仏号之功、為往生業勸念仏也。何可云無心或不善無記心念仏乎。汝不以此等諸篇、就惣相致僻難也。情思量之。勿濫文成義。

答。菩提心義、諸宗解釋一往雖不同、其体性実無差別。其義如第一門決初成之。今且就諸宗解釋不同文、言以善導等淨土人師所積為淨土菩提心、以余宗為聖道門菩提心、捨聖道取淨土門菩提心者、見彼集前後文全不取之。何者今所引積如汝言。是積付屬念仏一行処之文也。汝之所知以菩提心為一行、更不許通諸善為体性。然汝集惣標文、云積尊不付屬定散諸行唯以念仏付屬阿難之文云云。然菩提心者、是散善三福中、第三福中出之。汝集中列不付屬諸行中出之。列三福善一一積之、終皆云縱雖無余行、以孝養奉事為往生業也等云云。檢言為往生業之言陳下意許、已不付屬為往生業諸善、唯選付屬念仏。以知余善不留思。為言又許為往生業意、是千希得五三之往生也。為言非謂以自宗之

*374下

問う。菩提心に種類の不同あるべし。一には聖道門の菩提心、二には淨土門の菩提心是れなり。汝の出す所は、是れ聖道門と為すべし。『選択集』に捨つる所是れなり。淨土門の菩提心においては、之を捨つべからず。是の故に彼の『集』に今、汝が引く所の付屬文を積するの中に云く、「發菩提心は、諸師の意不同なり。天台に即ち四教の菩提心あり。謂く藏・通・別・円是れなり。具さに『止觀』に説く如し。真言に即ち三種の菩提心あり。謂く行願・勝義・三摩地是れなり。具さに『菩提心論』に説くが如し。華嚴に亦菩提心あり。彼の『菩提心義』および『遊心安樂道』等に説くが如し。三論・法相に各の菩提心あり。具さに彼の宗章疏等に説くが如し。又善導の所積の菩提心あり。具さに『疏』に述ぶるが如し。發菩提心、其の言は一なりと雖も、各の其の宗に隨いて其の義不同なり。然れば則ち菩提心的一句、広く諸經に亘りて、遍く顯密を該ぬ。意氣博遠にして、詮測沖懇なり。願わくは諸の行者、一を執して万を遮することなかれ。諸の往生を求むるの人、各の須く自宗の菩提心を發すべし。縱い余行なしと雖も、菩提心を以て往生の業と為すなり」と。已上『集』の文。此の中に既に諸宗の菩提心を分かたず、剩え淨土の菩提心に限らず、余行なしと雖も菩提心を以て往生の業と為すと云えり。既に他宗を簡わず、況んや淨土の菩提心をや、何ぞ之を捨てんや。故に知りぬ、今、引きて難する所の文理は、菩提心においては、其の行相深遠なり。且く信解願欲の心を取りて菩提心と為す、偏えに專稱仏号の功を以て、往生の業と為し念仏を勸むるなり。何ぞ無心或いは不善・無記心の念仏と云うべきや。汝は此れ等の諸篇を分かつたずして、惣相に就いて僻難を致すなり。情ら之を思量せよ。文を濫して義を成ずるなかれ。

答。菩提心の義、諸宗の解釋は一往不同なりと雖も、其の体性は實に差別なし。其の義は第一門に決する初めに之を成ずるが如し。今、且く諸宗の解釋不同の文に就いて、善導等の淨土の人師の所積を以て淨土の菩提心と為し、余宗を以て聖道門の菩提心と為し、聖道を捨てて淨土門の菩提心を取ると言わば、彼の『集』の前後の文を見るに全く之を取らず。何んとなれば今、引積する所に汝が言う如し。是れ念仏の一行を付屬するを積する処の文なり。汝の所知の菩提心を以て一行と為すは、更に諸善に通じて体性と為るを許さず。然れば汝の『集』の惣標の文、「積尊、定散の諸行を付屬したまわずして唯、念仏を以て阿難に付屬したまえるの文」と云えり云云。然るに菩提心は、是れ散善三福の中に、第三福の中に之を出す。汝が『集』の中に列して諸行を付屬せざるの中に之を出す。三福の善を列ねて一に之を積して、終に皆縱い余行なしと雖も、孝養奉持を以て往生の業と為すと云う云云。往生の業と為すと云うの言陳ぶる下の意許を・するに、已に往生の業と為す諸善を付屬せず、唯、選びて念仏を付屬す。以て知りぬ、余善に思いを留めず。為言又往生の業と為すを許すの意、是れ千は希に五三の往生を得るなり。為言自宗の菩提心を以て淨土の正因と為すと謂うにあらざるなり。菩提心を嫌うこ

菩提心為淨土之正因也。嫌菩提心、此段处处遍滿。今所出文、又為簡之、且所成之義也。且付下一处文、有一問答曰、問曰、何故以定散諸行而不付屬流通乎。若夫依業淺深、嫌不付屬、三福業中有淺有深。其淺業者、孝養父母奉事師長也。其深業者、具足衆戒發菩提心深信因果誦誦大乘也。須捨淺業付屬深業。○答曰、云望仏本願意在衆生一向專稱弥陀仏名、定散諸行非本願故、不付屬之云云。乃至、此文、於散善中、簡別持戒菩提心解第一義誦誦大乘四箇行、云以此等行殆抑念仏文。此四行中既有菩提心。加之此次下結文、捨菩提心顯然、不違毛拳。設雖許於自他宗菩提心有別、於自宗菩提心既不取之。二宗菩提心、爰已焦種、可悲可悲。是無性闡提之上首也。彼書五十許紙之内、半許紙載善導道綽之積文、其余分私詞不幾。其中十余处卑乎菩提心、或以為小利、或以名余行。

*375上

現今東流一切經論、雖大小頭密樞實漸頓不同、菩提心居其中為王。如前出經論文。或云稽首菩提心、或云至誠頂禮等、然汝始立小余名忽緒〔仁本・活本「諸」之〕。菩提心何恥耶。華嚴經云、菩提心者、猶如妙華、一切世間所樂見故。文。一切世間中、汝獨不欲菩提心、為菩提心非宝乎、為汝無漸乎。仏法妙華之菩提心、枯于汝之一門、結往生之菓実、待何時乎。又同經云、如下人学射先安其足後、習其法及諸劔術。一切武藝斯為根本。菩薩摩訶薩亦復如是。欲学如来一切智道、先当安住菩提之心。然後修一切佛法。文。汝之一門念仏安足〔底本・仁本附訓「アシフミ」不直、不能渡狭少白道、可墮落火河水河〕。又同經云、譬如有人欲護身、先護命根。菩薩摩訶薩亦復如是。護持一切諸仏正法、応先守護菩提之心。文。当知有菩提心命根者、護持諸仏正法。汝無菩提心命根。是先仏法中死人也。倍欲絶他人慧命。是臙脹蘭壞之屍骸也。速可棄邪道之野外、何安正見之窓。此人豈可護特弥陀一教耶。可為衆生能化乎。又同經云、譬如有人命根若斷、所務皆息、不能

*375下

と、此の段の処処に遍滿す。今、出す所の文、又之を簡ぶ為に、且く成ずる所の義なり。且く下の一处の文に付して、一の問答ありて曰く、「問うて曰く、何が故ぞ定散の諸行を以て、而も付屬流通せざるや。若し夫れ業の浅深に依りて、嫌いて付屬せずば、三福業の中に、浅あり深あり。其の浅業というは、孝養父母・奉事師長なり。其の深業というは、具足衆戒・發菩提心・深信因果・誦誦大乘なり。須く浅業を捨てて深業を付屬すべし。○答えて曰く、仏の本願を望まんに意は衆生をして一向に弥陀仏の名を専称せしむるにありと云えり。定散の諸行は本願にあらず、故に之を付屬せず」と云云。乃至、此の下の文に、散善の中において、持戒・菩提心・解第一義・誦誦大乘の四箇の行を簡別して、「此等の行を以て、殆ど念仏を抑う」と云えり。文。しかのみならず、此の次の下の結文に、菩提心を捨つること顯然なり、毛拳するに違あらず。設い自他宗の菩提心において別あるを許すと雖も、自宗の菩提心において既に之を取らず。二宗の菩提心、爰に已に種を・がす、悲しむべし悲しむべし。是れ無性闡提の上首なり。彼の書の五十許りの紙の内、半許の紙に善導・道綽の積文を載せ、其の余分に私詞幾かならず。其の中の十余処に菩提心を卑しむ、或いは以て小利と為し、或いは以て余行と名く。

現今東流の一切の經論、大小頭密樞實漸頓の不同ありと雖も、菩提心を其の中に居する王と為す。前に出す經論の文の如し。或いは「稽首菩提心」と云い、或いは「至誠頂禮」等と云う、然るに汝は始めに小余の名を立て之を忽緒〔緒〕の字、仁本・活本「諸」にす。菩提心を何ぞ恥ずるや。『華嚴經』に云く、「菩提心は、猶お妙華の如し、一切世間の見ることを樂う所なるが故に」と。文。一切世間の中に、汝独り菩提心を欲せず、菩提心を宝にあらずと為んや、汝は無漸と為んや。仏法妙華の菩提心、汝の一門に枯れて、往生の菓実を結ばん、何れの時を待たんや。又同『經』に云く、「人の射を学ばんに先ず其の足を安んじて後、其の法および諸の劔術を習うが如し。一切の武芸は斯れを根本と為す。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。如来の一切の智道を学ばんと欲するに、先ず當に菩提の心に安住すべし。然る後に一切の佛法を修行す」と。文。汝の一門の念仏の安足〔底本・仁本「アシフミ」の附訓〕直ならず、狭少の白道を渡ること能わず、火河・水河に墮落すべし。又同『經』に云く、「譬えば人ありて身を護らんと欲するに、先ず命根を護るが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。一切の諸仏の正法を護持するに、応に先ず菩提の心を守護すべし」と。文。当に知るべし、菩提の命根ある者は、諸仏の正法を護持す。汝に菩提心の命根なし。是れ先の仏法中の死人なり。倍うるに他人の慧命を絶たんと欲す。是れ臙脹蘭壞の屍骸なり。速やかに邪道の野外を棄つべし、何ぞ正見の窓に安んぜんや。此の人豈に弥陀の一教を護持すべきや。衆生の能化と為べきや。又同『經』に云く、「譬えば人ありて命根の若し断ぜば、所務皆息む、父母宗親を利益すること能わざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。菩提心一切の智命

利_レ益父母宗親。菩薩摩訶薩亦復如是。捨_レ菩提心一切智命、所有功德皆不_レ成就、不_レ能_レ利_レ益一切衆生。文。汝菩提心之命根已絕。仏家所務皆息。所化宗親皆可_レ懷_レ孤露悲。然則名_レ余行_レ為_レ小利。尚有_レ此過、然刺云_レ妨_レ礙念仏、云_レ抑念仏。是三世仏家大怨敵也。一切衆生惡知識也。無量衆生雖_レ生_レ日本国、未_レ吐_レ如此怪言。汝始誑_レ惑無量愚人、伝_レ授此大邪見。汝之邪儻遍_レ滿於七道五畿。汝居_レ其中_レ為_レ高祖。猶如_レ野狐聞_レ術経_レ為_レ諸獸王、後望_レ王女_レ亡_レ身。汝豈異_レ彼乎。

大文第二、破_レ以_レ聖道門_レ譬_レ群賊_レ過失_レ者、此一過相、就_レ集一文、勸_レ言陳_レ下意許_レ出_レ之。其集文如何。

集曰、念仏行者必可_レ具_レ足三心_レ之文。
觀無量寿経云、○
同経疏云、○
往生礼讃云、○

私云、○又此中言_レ一切別解別行異學異見等_レ者、是指_レ聖道門解行學見_レ也。其余即是淨土門意。在_レ文_レ可_レ見。明知善導之意、亦不_レ出_レ此二門_レ也。廻向發願之義、不_レ可_レ俟_レ別釈、行者応_レ知_レ之云云。(已上集文。)

決曰、見_レ所_レ引_レ觀経疏文、惣五処有_レ別解別行之言。如_レ集文具所_レ引、其五処者、疏云、又深心深信者、決定建_レ立_レ自心、順_レ教修行永除_レ疑錯、下_レ為_レ一切別解別行異學異見異執之所_レ退失傾動也。(是_レ一)又疏云、問曰、凡夫智淺惑障処深。若逢_レ解行不同人多引_レ経論_レ來、相好難証、云_レ一切罪障凡夫不_レ得_レ往生_レ者、云何對_レ治_レ彼難、成就信心、決定直進、不_レ生_レ怯退_レ也。(是_レ二)又云、不_レ為_レ一切異見異學別解別行人等之所_レ動乱破壞_レ等。(是_レ三)又云、若有_レ解行不同邪雜人等_レ來相惑乱、或説_レ種種疑難、導_レ(仁本・活本「導」)不_レ得_レ往生_レ等云云。(是_レ四)又出_レ火河水河喻_レ合喻_レ云、言_レ或行一分二分群賊等喚廻_レ者、即喻_レ別解別行惡見人等妄説_レ見解_レ迭相惑乱、及自造_レ罪退失_レ也。(是_レ五)

謹案_レ文意、今此五処所_レ出_レ別解別行人者、即是一人也。其一人

*376上

を捨つるは、所有の功德皆成就せず、一切の衆生を利益すること能はず」と。文。汝は菩提心の命根を已に絶てり。仏家の所務皆息む。所化の宗親皆孤露の悲を懐くべし。然れば則ち余行と名け小利と為す。尚お此の過あるに、然るに剩え念仏を妨礙すると云い、念仏を抑うと云う。是れ三世の仏家の大怨敵なり。一切衆生の惡知識なり。無量の衆生の日本国に生ると雖も、未だ此の如き怪言を吐かず。汝始めて無量の愚人を誑惑して、此の大邪見を伝授す。汝の邪儻は七道五畿に遍滿す。汝は其の中に居して高祖と為る。猶お野狐の術経を聞きて諸の獸王と為り、後に王女を望みて身を亡すが如し。汝豈に彼と異ならんや。

大文第二に、聖道門を以て群賊に譬うる過失を破すとは、此れ一過の相、『集』の一文に就いて、言に陳ぶるの下意許を勸えて之を出す。其の『集』の文いかん。

『集』に曰く、「念仏の行者必ず三心を具足すべきの文。
『觀無量寿経』に云く、○
同経の『疏』に云く、○
『往生礼讃』に云く、○

私に云く、○又此の中に一切の別解・別行・異學・異見等と言うは、是れ聖道門の解行學見を指すなり。其の余は即ち是れ淨土門の意なり。文にありて見るべし。明らかに知りぬ、善導の意、亦此の二門を出ざるなり。廻向發願心の義、別釈を俟つべからず、行者応に之を知るべし」と云云。(已上『集』の文)

決して曰く、引く所の『觀経疏』の文を見るに、惣じて五処に「別解・別行」の言あり。『集』の文に具さに引く所の如し、其の五処は、『疏』に云く、「深心の深信とは、決定して自心を建立して、教に順じて修行し、永く疑錯を除きて、一切の別解・別行・異學・異見・異執の為に退失傾動せられざるなり」と。(是れ一)又『疏』に云く、「問うて曰く。凡夫智淺く、惑障処深し。若し解行不同的人、多く経論を引きて來り、相妨げて難証して、一切の罪障の凡夫、往生を得ずと云うに逢わば、云何が彼の難を対治して信心を成就し、決定して直ちに進みて怯退を生ぜざらんや」と。(是れ二)又云く、「一切の異見・異學・別解・別行の人等の為に動乱破壞せられず」と。(是れ三)又云く、「若し解行不同の邪雜の人等ありて、來りて相惑乱して、或は種種の疑難を説きて、往生を得ずと導(「導」の字、仁本・活本「・」)等云云。(是れ四)又火河・水河の喻を出す合喻の処に云く、「或は行くこと二分二分するに、群賊等喚び廻すと言うは、即ち別解・別行・惡見の人等、妄りに見解もて迭に相惑乱し、および自ら罪を造りて退失すと説きたまうに喩うるなり」と。(是れ五)

謹んで文意を案ずるに、今、此の五処に出す所の「別解・別行人」は、即ち是れ一人なり。其の一人

者、即別解別行惡見人也。非雜出正見人也。何者、若是為正見入者、四意趣四秘密含心府、五力五翻備舌端、三量懸鏡、二因燃炬矣。若爾者、設雖得經論違文、於論談筵決床、立敵相對可諍乎得否。若欲會者、權実帰一、若欲分者、漸頓屢隔矣。何此人對欣求往生之輩、臨一心念仏之窓、強致動乱乎。是故疏一処云「解行不同邪雜人」、一処云「別解別行惡見人等」。余三処雖無「邪惡字」、一処云「退失傾動」、一処云「不得往生等」、一処云「動乱破壞等」者、即是出「邪雜惡見人所為」也。若爾者、此中意有「別解別行人」、帶「惡見」、欲「妨礙」往生之人。言「為」如此惡見人「不被動乱破壞」也。非「別解別行即惡見」、指「別解別行人帶惡見防之」也。設雖為「往生人」、執「禮拜等行」惑「乱称名行者」、即是可為「別解別行邪雜人」。設雖為「法華般若持者」、唯專「自業」不「動乱」往生人者、不為「邪雜人」也。是故、云「動乱破壞」、云「邪雜人」、云「惡見人」、即此意也。翻此故知、別解別行正見人、反可助成往生人。深心隨喜其行、慇懃讚嘆往生法故、更不「可」云「破壞動乱等」。是故依「善導御意」、言「別解別行惡見人等」者、取「惡見等」為本。非謂「別解別行為過」。然所以「双出」者、別解別行是因、惡見等是果也。謂惡見、依「別解別行」故、如「云」智學成菩提愚學為生死等。謂邪見人執教、任「自狂心損」仏意故、雖「双出」因果、取「惡見果」為本也。是故合喻處、以「此邪人」喻「群賊」者、貪瞋煩惱中、適「生」求「往生」心。如「向」彼「白道」。然信「惡見邪說」生「退心」、如「群賊被」喚「廻」。是故指「惡見」為「障礙」。然則「此文」作「正積」者、可「云」指「邪解邪行邪學邪見」、然言「指」聖道門解行學見、不「置」邪惡能別書之言。甚以不可也。即指「一切顯密」二宗「佛法」、言「為」群賊也。汝集上文、自引「聖道淨土二門積」、私加「釈」云、初聖道門者、就「之有」二。一者大乘、二者小乘云云。然道綽雖「立」聖道淨土二門、未「言」別解別行。善導雖「言」別解別行、加「破壞動乱邪雜惡見之言」別之、以「正解正行人」、不「為」能障「明」矣。然汝就「道綽二門」、加「解行學見之言」、出「善導別解別行人」、而刪「邪惡字」。善導積中、以下「喻」群賊「邪見人」、云「指」聖道門

*376下

*377上

は、即ち別解・別行の惡見人なり。雜えて正見の人を出すにはあらざるなり。何んとなれば、若し是れ正見の人と為さば、四意趣・四秘密を心府に含む、五力・五翻を舌端に備う、三量を鏡に懸け、二因を炬に燃やす。若し爾れば、設い經論の違文を得と雖も、論談の筵・決床の床において、立敵相對して得否を諍うべきや。若し会せんと欲せば、權実は一に帰し、若し分かつんと欲せば、漸頓屢隔てん。何んが此の人は欣求往生の輩に對して、一心念仏の窓に臨みて、強ちに動乱を致さんや。是の故に『疏』の一処に「解行不同の邪雜人」と云い、一処に「別解・別行・惡見人等」と云う。余の三処に「邪惡」の字なしと雖も、一処に「退失傾動」と云い、一処に「不得往生」等と云い、一処に「動乱破壞」等と云うは、即ち是れ邪雜惡見人の所為を出すなり。若し爾れば、此の中の意は別解・別行人にあり、惡見を帯びて、往生を樂うの人を妨礙せんと欲す。此の如き惡見人の為に動乱破壞せられずと言ふなり。別解・別行は即ち惡見にあらず、別解・別行の人の惡見を帯びるを指して之を防ぐなり。設い往生を樂う人と為すと雖も、禮拜等の行を執して称名の行を惑乱する者は、即ち是れ別解・別行の邪雜人と為すべきなり。設い法華・般若の持者と為すと雖も、唯、自業を専修して往生人を動乱せざる者は、邪雜人と為さざるなり。是の故に、「動乱破壞」と云い、「邪雜人」と云い、「惡見人」と云うは、即ち此の意なり。此に翻じて、故に知りぬ、別解・別行の正見人は、反りて往生人を助成すべし。深心に其の行を隨喜し、慇懃に往生の法を讚嘆するが故に、更に「動乱破壞」等と云うべからず。是の故に善導の御意に依りて、「別解・別行の惡見人等」と言ふは、惡見等を取るを本と為す。別解・別行を過と為るにあらず。

然るに双へ出す所以は、別解・別行は是れ因、惡見等は是れ果なり。謂く惡見は、別解・別行に依りて生ずるが故に、「智學成菩提愚學為生死」等と云うが如し。謂く邪見の人は教に執して、自らの狂心に任せて仏意を損なうが故に、双べて因果を出すと雖も、惡見の果を取るを本と為すなり。是の故に合喻の処に、此の邪人を以て群賊に喩うは、貪瞋煩惱中に、適ま往生を求むる心を生ず。彼の白道に向うが如し。然るに惡見の邪説を信じて退心を生ずること、群賊に喚び廻さるるが如し。是の故に惡見を指して障礙と為す。然れば則ち此の文に向いて正積を作さば、邪解・邪行・邪學・邪見を指すと云うべし、然るに聖道門の解行學見を指すと言ひて、邪惡能別の言を置かず。甚だ以て不可なり。即ち一切の顯密二宗の佛法を指して、群賊と為すと言ふなり。汝が『集』の上の文に、自ら聖道・淨土の二門の積を引き、私に積を加えて云く、「初めに聖道門は、之に就いて二あり。一には大乘、二には小乘なり」と云云。然るに道綽は聖道・淨土の二門を立つると雖も、未だ別解・別行を言わず。善導は別解・別行を言ふと雖も、破壞・動乱・邪雜・惡見の言を加えて之を別す、正解・正行の人を以て、能障と為さざること明らけし。然るに汝は道綽の二門に就いて、解行・學見の言を加え、善導の別解・別行の人を出すに、而も邪惡の字を刪れり。善導の積の中に、群賊を喩えて邪見の人とすを以て、聖道門の解行・學

解行学見者、豈非言除阿弥陀如来往生經以外、以一切頭密三宝為群賊乎。汝集亦云、善導之意亦不出此二門也。文。令善導荷此重罪、其過幾爾乎。汝集又云、廻向發願心の義、不可俟別釈。文。令積尊吐此惡言、汝非積尊之怨敵乎。

問曰、若不許善導積者、不足為論。若許之者、可謂以下一切聖道門解行学見為群賊。何者所引疏上文云、除仏已還、智行未滿、在其學地、由有正習、二障未除、果願未円。此等凡聖、縱使測量諸仏教意、未能決了、雖有平章、要須下請仏証為定也。若称仏意、即印可言如是如是。若不許仏意者、即言汝等所說是義不如是。不印者、即同無義〔觀經疏散善義「記」無利無益之語。仏印可者、即隨順仏之正教、若仏所有言説、即是正教正義正行正解正業正智、苦多苦少、衆不問菩薩人天等、定其是非也。若仏所説即是了教、菩薩等説尽名不了教也。応知、是故今時仰勸一切有縁往生人等、唯可深信仏語專注奉行、不可信用菩薩等不相応教以為疑礙、抱惑自迷廢失往生之大益也。〕已上〕此中既云菩薩等説尽名不了教。又云不可信用菩薩等不相応教、此即与浄土門解行不相応別解別行教也。既立菩薩名、何必限邪雜人乎。加之第一卷云通別時意段云、仰願一切願往生知識等、善自思量、寧傷今世錯信仏語、不可執菩薩論以為指南。若依此執者、即是自失悞他也。文。是又疏下文所出不相応教也。同又云菩薩論、不可限惡見人。若爾者、以一切聖道門不似往生教故、可云惑乱浄土教。爾者群賊喻何有簡別乎、如何。

答。授深教義破淺執、是菩薩之用心也。既教有了不了別、今依了義大乘説往生行故。言須一向依之、依余不了義説也。唯以了不了為簡別、非雖一向不信菩薩論。若不爾者、設仏雖説、四依論師不傳持者、法無流於末世辺州。非唯有結集傳來功、或承聖旨而自説、或蒙懸許以後顯。況復垂付屬於阿難、任護持於聖衆乎。即為如來使傳化乎末世。後学之結縁、蓋其力也。是以法華遣使還告汝父已死之文、天台有

見を指すと云うは、豈に阿弥陀如来の往生經を除きて以外、一切の頭密三宝を以て群賊と為すと云うにあらざるや。汝が『集』に亦云く、「善導の意亦此の二門を出ざるなり」と。文。善導をして此の重罪を荷わしめん、其の過は幾爾ぞや。汝が『集』に又云く、「廻向發願心の義、別釈を俟つべからず」と。文。積尊をして此の惡言を吐かしめん、汝は積尊の怨敵にあらずや。

問うて曰く、若し善導の積を許さずば、論を為すに足らず。若し之を許さば、一切の聖道門の解行・学見を以て群賊と為すと謂うべし。何者か引く所の『疏』の文に云く、「仏を除きて已還は、智行未だ満たず、其の學地にありて、正習の二障ありて未だ除こらざるに由りて、果願未だ円かならず。此等の凡聖は、縱使諸仏の教意を測量すれども、未だ決了すること能わず、平章ありと雖も、要す須く仏証を請いて定と為すべし。若し仏意に称えば、即ち印可して如是如是と言わく。若し仏意にかなわざれば、即ち汝等が所説、是の義不如是と言う。印せざるは即ち無義〔義〕の字、『觀經疏』散善義「記」・無利・無益の語に同じ、仏の印可したまうをば、即ち仏の正教に隨順す。若し仏の所有の言説は、即ち是れ正教・正義・正行・正解・正業・正智なり。若しは多、若しは少、衆て菩薩・人天等を問わず、其の是非を定めんや。若し仏の所説は即ち是れ了教なり、菩薩等の説は尽く不了教と名くるなり。応に知るべし。是の故に今の時、仰いで一切有縁の往生人等を勸む、唯、深く仏語を信じて、專注奉行すべし。菩薩等の不相応の教を信用して以て疑礙を為し、惑いを抱きて自ら迷いて往生の大益を廃失すべからざれ」と。〔已上〕此の中に既に菩薩等の説は尽く不了教と名くと云えり。又菩薩等の不相応の教を信用すべからずと云う、此れ即ち浄土門の解行と相應せざる別解・別行の教なり。既に菩薩の名を立つ、何ぞ必ず邪雜の人に限らんや。しかのみならず、第一卷に別時意を會通する段に云く、「仰ぎ願わくば一切の往生を願う知識等、善く自ら思量せよ、寧ろ今世の錯を傷みて仏語を信ぜよ、菩薩の論を執りて以て指南と為すべからず。若し此の執に依る者は、即ち是れ自ら失い他をまつなり」と。文。是れ又『疏』の下に文に出す所の不相応の教なり。同じく又「菩薩の論」と云う、惡見人に限るべからず。若し爾れば、一切の聖道門を以て往生の教に似ざる故に、浄土教を惑乱すと云うべし。爾れば群賊の喩え何ぞ簡別ありや、いかん。

答う。深教を授けて淺執を破す、是れ菩薩の用心なり。既に教に了・不了の別あり、今、了義大乘に依りて往生の行を説く故に。須く一向に之に依りて余の不了義の説に依らざるべしと言ふなり。唯、了不了を以て簡別と為す、一向に菩薩の論を信ぜずと謂うにあらず。若し爾れば、設い仏の説くと雖も、四依の論師の傳持せずば、法は末世の辺州に流れることなし。唯、結集傳來の功あるにあらず、或いは聖旨を承けて自ら説く、或いは懸許を蒙りて以後に顯わす。況んや復付屬を阿難に垂れ、護持を聖衆に任すをや。即ち如来の使いと為りて末世に伝化せん。後学の結縁、蓋し其の力なり。是を以て『法華』の「遣使還告汝父已死」の文、天台に一釈あり、四依の菩薩を以て使いと為す。即ち『法華文句』に云

一積、以四依菩薩為使。即如法華文句云、今用四依菩薩語衆生云、仏已滅度、但留此法。我今宣弘、汝當受行也。後時衆生、若無四依傳述經法、豈能自知仏已滅度。故用四依、是如來使人也。文。是以仏滅百歳、分小乗教之多部、漸迄千歳、興菩薩藏之異執。此皆四依大士、觀根機開多門、末學仰之而見仏日之光。後代信之以受法雨之霑。雖入門異所詣莫一。諍衣之譬、折杖之況、良有所以乎。若不信之者、善導所說亦以難倍欺。是故今立邪雜名者、未指論說、唯名執淺教人也。依善導御意、於不善人猶令運歸教。仁本・活本「敬」之思。如「積」至誠心「処」云。若非「善業」者、敬而遠之。亦不隨喜也。文。豈以「聖道門」為「群賊」乎。是故第一卷中、引別時論文「會」通之。非「限」論文、引「人師會積」、雖「破」與「遠生」為「因義」、下文云、願行不具不往生、與「遠生」為「因者、其義實也。文。未「必」一「邊捨」之、又第四疏文、逢「解」行不同人多引「經論」來、好云「不得」往生、設「答」中云、如「我意」者、決定不受「汝破」、然我亦不「是」不「信」彼諸經論、尽皆仰信、然時「処」對「機」利益不同、縱汝等百千萬億「不」生、唯增「長」我信心。「取意」既以「仏説」經菩薩論、會「時」對「機」利益不同、悉仰「信」之。對「不」通「教意」邪雜人、云「縱使汝等百千萬億等、明知群賊喻不闕聖道門也」。

問。爾者何故、疏第一卷、善導傷嘆云、未審今時一切行者、不知何意凡小之論乃加信受、諸仏誠言返將妄語、苦哉、奈劇能出「如」此不忍之言云云。凡小之論等教誡、豈非「闕」論家乎、如何。答。如「前説」、令「授」了義「捨」不了之言也。而此又傷「嘆」愚人「也」。是故此上文云、久來通論之家不「會」論意等云云。臨「文」可「見」之。若不「爾」言「善導」以「一切」聖道門「佛法」為「往生」能障「者」、令「善導」有「斷種」之過。如「十住毘婆娑論」云、問曰、三乗所學皆為「無余」涅槃。若無余涅槃中無「差別」者、我等何用於「恒河沙」等大劫、「往」來生死、具「足」十地。不「如」以「声聞」辟支「乘」速滅「諸苦」。答曰、是語弱劣、非「大」悲有益之言。若諸菩薩効「汝」小心、無「慈愍」意、不「能」精勤修「十地」者、諸声聞辟支仏、何由得「度」、亦復無「有」二

*378上

うが如し、「今、四依を用いる菩薩の衆生に語りて云く、仏已に滅度したまうに、但、此の法を留めたまう。我れ今、宣弘せん、汝は當に受行すべきなり」と。後の時の衆生、若し四依の經法を伝述することなくば、豈に能く自ら仏已に滅度したまうを知らんや。故に四依を用うるは、是れ如來の使人なり」と。文。是を以て仏滅百歳に、小乗教の多部に分れ、漸く千歳まで、菩薩藏の異執を興せり。此れ皆四依の大士、根機を觀じて多門を開く、末學は之を仰ぎて仏日の光を見たてまつる。後代に之を信ずれば以て法雨の霑を受けん。入門の異なりと雖も所詣に二なし。衣を諍うの譬、杖を折るの況、良に所以あるかな。若し之を信ぜずば、善導の所説も亦以て信じ難きか。是の故に今、邪雜の名を立つるは、未だ論説を指さず、唯、淺教を執する人に名くるなり。善導の御意に依らば、不善人において猶お歸教（「教」の字、仁本・活本「敬」の思を運ばしむ。至誠心を積する処に云うが如し。「若し善業にあらざれば、敬して之を遠ざかれ。亦隨喜せざれとなり」と。文。豈に聖道門を以て群賊と為んや。是の故に第一卷の中に、別時の論文を引きて之を會通す。論文に限るにあらざり、人師の會積を引きて、遠生の与に因と為る義を破すと雖も、下の文に云く、「願行具せざれば往生せず、遠生の与に因と為るとは、其れ義義なり」と。文。未だ必ずしも一辺に之を捨てず、又第四の『疏』の文に、解行不同の人の多く經論を引きて來たりて、好んで往生を得ずと云うに逢うて、答を設くる中に云く、「我が意の如きは、決定して汝が破を受けず、然るに我れ亦是れ彼の諸の經論を信ぜざるにはあらず、尽く皆仰信す、然るに時・処・對機・利益は不同なり、縦い汝等百千萬億ありて生ぜずと・うとも、唯、我が信心を増長せん」と。「取意」既に仏説の經・菩薩の論を以て、時・処・對機・利益の不同に會して、悉く之を仰信す。教意に通ぜざる邪雜人に対して、「縦使汝等百千萬億等」と云う、明らかに知りぬ、群賊の喩え聖道門に關わらざるなり。

問う。爾れば何が故ぞ、『疏』の第一卷に、善導の傷嘆して云うや、「未審し、今の時の一切の行者、知らず、何の意か凡小の論には乃ち信受を加えて、諸仏の誠言をば返りて將に妄語とせんとす、苦しきかな、奈んぞ劇しく能く此の如き不忍の言を出すや」と云云。凡小の論等の教誡、豈に論家に關わるにあらざるや、いかん。

答う。前説の如きは、了義を授けて不了を捨てしむるの言なり。而も此に又愚人を傷嘆するなり。是の故に此の文の上に云く、「久來通論の家、論の意を會せずして」等と云云。文に臨みて之を見るべし。若し爾らざして、善導は一切の聖道門の佛法を以て往生の能障と為すと云わば、善導をして斷種の過あらしむ。『十住毘婆娑論』に云うが如し、「問うて曰く、三乗の所學は皆無余涅槃の為なり。若し無余涅槃の中に差別なくば、我等何の用ありてか恒河沙等大劫において、生死に往來して、十地を具足せんや。しかず、声聞・辟支仏乘を以て速やかに諸苦を滅せんをや。答えて曰く、是の語は弱劣なり、是れ大悲有益の言にあらず。若し諸の菩薩の汝が小心に効いて、慈愍の意なく、精勤に十地を修すること能わざ

乘差別。所以者何、一切声聞辟支仏皆由_レ仏出。若無_二諸仏_一、何由而出。若不_レ修_二十地_一、何有_二諸仏_一。若無_二諸仏_一、亦無_二法僧_一。是故汝所說者、則斷_二三宝種_一。非_二是大人有智之言_一。不可_レ聽察。文。声聞緣覺道果、猶依_二大乘_一立。況淨土門者、是大乘教一門也。若無_二聖道円滿法門_一者、豈得_二淨土門立_一乎。能可_レ思_レ之。又善導合_レ喻文中、出_二自他障礙_一。喻_二群賊喚廻_一。即如_二文云_一。言_レ或行一分二分、群賊等喚廻_レ者、即喻_レ別解別行惡見入等、妄說_二見解_一迭相惑亂、及自造_レ罪退失也。文。此中有_二二句_一出_二二種障礙_一。一為_二他人惡見被_レ障礙_一。如_二文云_一。別解別行惡見人等、妄說_二見解_一迭相惑亂是也。二往生人自造_レ罪業被_レ障礙。如_二文云_一。及自造_レ罪遺失是也。行人自造_レ罪業喚、不_レ得_二往生_一。此亦如_二群賊被_レ喚廻_一也。及之言即相違積也。上即他下即自、即自他相違義也。

*178 下

問。此二句文、別解別行惡見入、說_二邪見邪解_一之外、及造_二余罪業_一、指_レ此可_レ云_レ及。爾者二句俱非_レ出_二惡見人之過_一乎。答。不然。此惡見人、非_レ唯自不_レ望_二趣_一白道、還妨_二趣向人_一。何得_レ退失名_一乎。今言_二造罪退失_一者、彼単独人既向_二白道_一行一分二分、以_レ有_二自他_一退、喻_レ被_レ呼_レ廻於群賊也。是故及之言、即自他相違積也。然汝集引_二此文_一、雖_レ積_二別解別行句_一、不_レ積_二此句_一。若為_レ雜_二亂文句_一一向為_レ別解別行人之過_一乎。爾者有_二無智過_一、何作_レ書乎。苦為_レ党_二念仏者_一隱_二其罪業_一乎。爾者有_二偏頗過_一。又有_レ違_二善導_一之過。於_レ此文_一不_レ顯_二其義_一、而剩於_レ殊抑_二念仏_一四行中、亦出_レ持戒。是豈非_レ令_二所化勸_一犯戒乎。凡大邪見之重過、不可思議不可思議也。汝非_レ唯不_レ足_レ為_レ念仏者導師、剩為_レ念仏者惡知識。一切念仏者、先須_レ遠_二離汝近辺_一。如_二善導云_一。深信者、仰願_二一切行者等_一、一心唯信_二仏語_一、不_レ顧_二身命_一、決定依行。仏遣_レ捨者即捨、仏遣_レ行者即行、仏遣_レ去処即去。是為_レ隨_二順仏教_一隨_二順仏意_一。是名_二隨_二順仏願_一、是名_二真仏弟子_一云云。十輪等諸經、如來大誠_二大邪見過_一。若有_二邪見者_一、為_二衆生惡知識_一、為_二仏法怨賊_一。若能親近者、斷_二滅善根_一。如_二導積云_一。仏遣_レ行処者、專在_二于大菩提心_一。汝

*179 上

れば、諸の声聞・辟支仏も、何に由りてか度を得ん、亦復二乗の差別あることなけん。所以は何ん、一切の声聞・辟支仏は皆仏由り出でたり。若し諸仏なくば、何に由りてか出でん。若し十地を修せずば、何ぞ諸仏ましますさん。若し諸仏ましますさん、亦法・僧なけん。是の故に汝が所説は、則ち三宝の種を断ず。是れ大人有智の言にあらざ。聽察すべからず」と。文。声聞・緣覺の道果、猶お大乘に依りて立つ。況んや淨土門は、是れ大乘教の一門なり。若し聖道門の円滿法門なくば、豈に淨土門の立つことを得んや。能く能く之を思ふべし。又善導の合喻の文中に、自他障礙を出して群賊の喚廻に喩う。即ち文に云うが如し。「或いは行くこと一分二分するに、群賊等喚び廻すと云うは、即ち別解・別行の惡見人等、妄りに見解を説きて迭いに相い惑亂し、及び自ら罪を造りて退失するに喩うるなり」と。文。此の中に二句ありて二種の障礙を出す。一には他人の惡見の為に障礙せらる。文に云うが如し。「別解・別行の惡見人等、妄りに見解を説きて迭いに相い惑亂し」と是れなり。二には往生人の自ら罪を造りて罪業の為に障礙せらる。文に云うが如し。「及び自ら罪を造りて退失する」と是れなり。行人の自ら罪業を造りて、往生を得ず。此れ亦群賊に喚び廻さるるが如きなり。「及び」の言は即ち相違の積なり。上は即ち他、下は即ち自にして、即ち自他相違の義なり。

問う。此の二句の文、別解・別行の惡見人、邪見・邪解を説くの外、及び余の罪業を造る、此れを指して「及び」と云うべし。爾れば二句は俱に惡見人の過を出すにあらざや。

答う。然らず。此の惡見人、唯、自ら白道に趣くを望まざるのみにあらざ、還りて趣向人を妨ぐ。何ぞ退失の名を得んや。今、造罪退失と云うは、彼の単独人の既に白道に向いて行くこと一分二分、自他の二退あるを以て、群賊に喚び廻さるるに喩うるなり。是の故に「及び」の言、即ち自他相違の積なり。然るに汝の『集』に此の文を引きて、別解・別行の句を積すと雖も、此の句を積さず。若しは文句を雜亂して一向に別解・別行人の過と為すと為んか。爾れば無智の過あり、何ぞ書を作さんや。若しは念仏者を党して其の罪業を隠さんと為んか。爾れば偏頗の過あり。又善導に違するの過あり。此の文において其の義を顯わさず、而も剩え殊に念仏を抑うる四行の中において、亦持戒を出す。是れ豈に所化に犯戒を勧めしむるにあらざや。凡そ大邪見の重過、不可思議不可思議なり。汝は唯、念仏者の導師と為るに足らざるのみにあらざ、剩え念仏者の惡知識と為す。一切の念仏者は、先ず須く汝が近辺を遠離すべし。善導の云うが如し。「深信する者、仰ぎ願わくは一切の行者等、一心に唯、仏語を信じて、身命を顧みず、決定して行に依りて、仏の捨て遣めたまうをば即ち捨て、仏の行ぜ遣めたまうをば即ち行ず、仏の去て遣めたまう処をば即ち去つ。是れを仏教に隨順し、仏意に隨順すと名く、是れを眞の仏弟子と名く」と云云。『十輪』等の諸經に、如來大いに大邪見の過を誡めたまう。若し邪見ある者は、衆生の惡知識と為す、仏法の怨賊と為す。若し能く親近する者は、善根を断滅すと。善導の積して云うが如し。仏の行ぜ遣めたまう処は、専ら大菩提心にあり。汝は之を撥去せり。仏の捨て遣めたまう処、仏の去て

撥去之。仏遣捨処、仏遣去処、善導遣捨処、善導遣去処、更不可有「一法過汝斷菩提心邪見。是故信善導解釈一人、先可捨離汝也。又汝所引文中云、若不可「仏意者、即言汝等所說是義不如是。念仏者、先以「汝所說」可為「不知是義」。又次下文云、不「印者、即同「無義無利無益之語」。文。此所言無義無利等者、可有「通無記性」。汝所說是大邪見、可「斷滅自他善根」。一切念仏者、先於「此選集集義」、可有「用意」也。速遠「離此集義」、可入「善導一門」也。

問曰、選集所言一切別解別行異學異見等者、是指聖道門解行學見也者、於「五処別解行文」、指「第一番文」也。全非「指譬」後群賊「文」。然汝雜亂取「義致」此難破、還非「成自狂」乎、如何。答。五処別解行人、愚為「一人」、更非「為五人」。其旨如「上成」之。善導以「之譬群賊」。汝若言「以「一処文」指「聖道門」者、其過全無」。差別。「可察可察矣」。上來「二門唯拳」講經日所出「二難」。自余邪義不違「一一破難」。唯「智人思量」而已。

問。專修一門云、此書作者上人已遂「往生之素懷」云云。《去春已入滅。》然汝破「往生人之製作書」、猶可「為罪業」。剩処処加「謗言」、或云「斷種之過」、或云「魔說、寧非「重罪」乎、如何。答。大聖雖「去教法是存」。証道雖「澆」、法印無「改」。是故設雖「天魔說」、其理順「正法」、名為「仏法」。設雖「現「聖身」、所說順「邪道」、名為「魔說」。如「入大乘論」云。假令魔說、能除「滅障」、不「違」正法、雖「曰「魔說」、即是正法、与「仏語」不「異」。何以故、如「仏所說」、依「法不「依於人」、是以我今但從「正理」、不「取」名字、又我等所求、能滅「智障煩惱障」者、即是世尊、若実魔者、終「不」能「說」菩薩之法「等云云。既云「依法不「依人」。上人所言、若有「道理」者、設雖「不「遂」往生、尚可信之。既有「此大過」、何不「破」之乎。既論云、若実魔者、終「不能」說「菩薩之法」。文。菩提心者、是菩薩所樂法也。上人厭「惡」之。知是魔儻也。十住毘婆娑論、出「失菩提心法」中頌云、不「覺」諸魔事、「菩提心劣弱、業障及法障亦失」菩提心。長行釈云、不覺魔事者、若不「知」諸魔事、則「不」能「制伏」、若不「制伏」、則失「菩提心」。《乃至

*379下

遣めたまう処、善導の捨て遣めたまう処、更に一法として汝が断菩提心の邪見に過ぎることあるべからず。是の故に善導の解釈を信ぜん人、先ず汝を捨離すべし。又汝が引く所の文の中に云く、「若し仏意にかなわざれば、即ち汝等が所説、是の義是の如くならずと云う」と。念仏は、先ず汝が所説を以て不如是の義と為すべし。又次の下の文に云く、「印せざるは、即ち無記・無利・無益の語に同じ」と。文。此に言う所の無義・無利等は、無記性に通することあるべし。汝が所説は是れ大邪見にして、自他の善根を断滅すべし。一切の念仏者、先ず此の『選集集』の義において、用意あるべきなり。速やかに此の『集』の義を遠離して、善導の一門に入るべきなり。

問うて曰く、『選集集』に言う所の「一切の別解・別行・異学・異見等は、是れ聖道門の解行・学見を指すなり」とは、五処の別解の文において、第一番の文を指すなり。全く後の群賊を譬うる文を指すにあらざり。然るに汝は雜亂して義を取りて此の難破を致す、還りて自狂を成ずるにあらざりや、いかん。

答う。五処の別解の行人、是れ一人と為す、更に五人と為すにあらざり。其の旨は上に之を成ずるが如し。善導は之を以て群賊に譬う。汝、若し一処の文を以て聖道門を指すと言わば、其の過は全く差別なし。察すべし察すべし。《上来的二門は唯、講經の日に出る所の二難を挙ぐ。自余の邪義は一一の破難に違あらず。唯、智人の思量に關わるならくのみ。》

問う。專修の一門の云く、「此の書の作者の上人は已に往生の素懷を遂げたり」と云云。《去る春已に入滅せり。》然るに汝は往生人の製作の書を破さん、猶お罪業と為すべし。剩え処処に謗言を加えて言わく、或いは「断種の過」と云い、或いは「魔説」と云う、寧んぞ重罪にあらざりや、いかん。

答う。大聖は去りたまうと雖も、教法は是れ存す。証道は澆うと雖も、法印は改むることなし。是の故に設い天魔の説と雖も、其の理の正法に順ずるを、名けて仏法と為す。設い聖身を現わすと雖も、所説の邪道に順ずるを、名けて魔説と為す。『入大乘論』に云うが如し。「假令魔説なれども、能く障りを除滅し、正法に違せざれば、魔説と曰うと雖も、即ち是れ正法にして、仏語と異ならず。何を以ての故に、仏の所説の如きは、法に依りて人に依らず、是を以て我れ今、但、正理に従いて、名字を取らず、又我等の所求、能く智障・煩惱障を滅するは、即ち是れ世尊なり、若し実魔ならば、終に菩薩の法を説くこと能わず」等と云云。既に法に依り人に依らずと云えり。上人の言う所、若し道理あらば、設い往生を遂げずと雖も、尚お之を信すべし。既に此の大過あり、何ぞ之を破せざらんや。既に『論』に云く、「若し実魔ならば、終に菩薩の法を説くこと能わず」と。文。菩提心は、是れ菩薩所樂の法なり。上人は之を厭惡せり。知りぬ、是れ魔の儻なり。『十住毘婆娑論』に、失菩提心の法を出す中の頌に云く、「諸の魔事を覺らず、菩提心劣弱にして、業障および法障の亦菩提心を失す。長行の釈に云く、不覺魔事とは、若し諸の魔事を知らずば、則ち制伏すること能わず、若し制伏せずば、則ち菩提心を失す。

下文云、取要言之、於一切法有障礙者、皆是魔事。文。既厭惡三世諸仏重宝菩提心。当知是大魔縁也。如法界無差別論說菩提心因義頌云。能益世善法聖法及諸仏、所依宝処因、如地海種子。長行云、如種子一切仏樹出生相續之因故。文。凡如^レ此論藏華嚴等諸經、此文遍滿、不能始成立。凡生在仏家、以菩提心為羯羅藍種子。然撥去之。豈非煎仏性種子乎。仍付乎斷種過、汝何咎之乎。若咎之者、汝又可^レ有彼同類罪也。諸經論中、以大乗為三宝種子、於大乘、以菩提心為最上無過珍宝。然厭惡之人、豈可在^レ人数中乎。

問曰、沙門之法、以柔和為先。衆僧之道、以和合為本。乖一人、尚以可^レ為過。況專修已成群、剩立一宗名。然汝劬勞致此難破。豈非重罪乎、如何。答。邪教興、正法廢。諸惡增長、衆善損減。依之諸大論師出世造種種論。然正法燈、破邪見暗。仏法由^レ此住持、為世間依怙。此事自非沙門所作、更無其人。入大乘論云、若言摩訶衍是魔所說者、則為^レ仏法之大患也。文。然汝所說雖正不^レ言魔説、同言魔説。何者、汝集云菩提心妨礙念仏為宗、敵者云菩提心助成念仏者、已礙汝集所立故。立者可^レ言、此是魔説、如前出論文、障善法為魔事云云。即違汝所立故。若爾者、豈非^レ仏法之大患乎。仏子何不^レ痛之乎。若為^レ痛之者、隨其力能可^レ破邪立正也。

問。設雖可^レ然、世間有高僧碩学、威德巍巍明誉芬芬。須讓於彼人。汝是非高僧非明德、唯須謙居念仏、何致此利口乎。答。此難突然、無遁処。然則年来雖聞此事、仰彼高僧碩学之良斷。然余雖無德、既入^レ仏家。見此邪書、心府如割。不能^レ默止、聊述^レ愚懷也。如菩提資糧論第五頌云。不羨諸境界、行癡盲瘡聾、時復師子吼、怖諸外道鹿。彼論長行自釈云、若見他人增長利養恭敬名聞之時、於色等境界中不^レ應希羨、於愛不愛色声香味中、雖非癡盲瘡聾、而作癡盲瘡聾之行。若有^レ力能、莫常瘡住。應以正法遣、或破繫持倒。為怖外道鹿故、及住持正教故、復當振師子吼。文。謹案論意、道心行者、

*388上

（乃至）下の文に云く、要を取りて之を言わば、一切の法において障礙あるは、皆是れ魔事なり」と。文。既に三世諸仏の重宝の菩提心を厭惡せり。当に知るべし、是れ大魔縁なり。『法界無差別論』に菩提心の因義を説く頌に云うが如し。「能く世の善法・聖法および諸仏を益す、所依の宝処の因は、地海の種子の如し。長行に云く、種子の如しとは一切の仏樹出生相續の因なるが故に」と。文。凡そ此の如き論藏と『華嚴』等の諸經に、此の文遍滿す、始めに成立する能わず。凡そ仏家に生在するは、菩提心を以て羯羅藍種子と為す。然るに之を撥去す。豈に仏性の種子を煎すにあらずや。仍お断種の過を付す、汝は何ぞ之を咎めんや。若し之を咎めざれば、汝に又、彼の同類の罪あるべし。諸の經論の中に、大乘を以て三宝の種子と為す、大乘において、菩提心を以て最上無過の珍宝と為す。然るに之を厭惡するの人は、豈に人の数の中にあるべきや。

問うて曰く、沙門の法は、柔和を以て先と為す。衆僧の道は、和合を以て本と為す。一人乖く、尚お以て過と為すべし。況んや専修は已に群を成じて、剩一宗の名を立つ。然るに汝は劬勞して此の難破を致す。豈に重罪にあらずや、いかん。

答う。邪教の興らば、正法は廢せん。諸惡の增長せば、衆善は損減せん。之に依りて諸の大論師は世に出て種種の論を造れり。正法の灯を燃やし、邪見の暗を破る。仏法は之に由りて住持し、世間の依怙と為る。此の事は沙門の所作にあらずによらば、更に其の人なけん。『入大乘論』に云く、「若し摩訶衍は是れ魔の所説と言わば、則ち仏法の大患と為すなり」と。文。然れば汝の所説は正しく魔説と言わずと雖も、魔説と言ふに同じ。何となれば、汝が『集』に菩提心は念仏を妨礙すると云いて宗と為す、敵者の菩提心は念仏を助成すと云わば、已に汝が『集』の所立を礙ぐる故に。立者は言うべし、此れは是れ魔説なりと、前に出す論文に云うが如し、「善法を障るを魔事と為す」と云云。即ち汝が所立に違する故に。若し爾れば、豈に仏法の大患にあらずや。仏子、何ぞ之を痛まざらんや。若し之を痛むと為さば、其の力能に隨いて邪を破し正を立つべきなり。

問う。設い然るべしと雖も、世間に高僧の碩学あり、威德の巍巍として明誉は芬芬たり。須く彼の人に譲るべし。汝は是れ高僧にあらず、明德にあらず、唯、須く謙居に念仏すべし。何ぞ此の利口を致さんや。

答う。此の難は実に然なり、遁処なし。然れば則ち年来に此の事を聞くと雖も、彼の高僧・碩学の良断を仰ぐ。然るに余は無徳なりと雖も、既に仏家に入れり。此の邪書を見るに、心府の割れんが如し。默止する能わず、聊か愚懷を述ぶるなり。『菩提資糧論』第五の頌に云うが如し。「諸の境界を羨まず、癡盲・聾を行ず、時に復師子吼するに、諸の外道の鹿を怖する」と。彼の『論』の長行の釈に云く、「若し他人の利養恭敬名聞を増長せんを見るの時、色等の境界の中において希羨すべからず、愛・不愛・色・声・香・味の中において、癡盲・聾にあらずと雖も、癡盲・聾の行を作す。若し力能あらば、常に・

*388下

於「世事」無「執著」、猶如「無」分別。譬「之」以「癡盲瘡聾人」。然對「外道鹿」、作「師子吼勢」、聞「非理非法音」、莫如「聾盲」。然則設雖「非」高名碩學、何無「此心」乎。仏法者是我法也。何必待「他護」乎。況守「護受」持如來正法、是法師所作也。覺「諸魔事」破「邪立」正、是法師所作也。依「之」立「持正法法師覺諸魔事法師名」。如「探玄記」第八云。於「十方界」仏滅度後、守「護受」持如來正法、広宣流布開化不「絶」、為「法師」也。如「辨積法師及那羅延法師他摩室利法師等」。并由「其人」、使「仏法再興久住」世間等、此為「持正法法師」也。覺「諸魔事者」、如「莊嚴論中」、有「魔詐現」神通、作「羅漢形」、感「乱諸比丘」、愚皆「熯伏」、有「多聞比丘」、以「阿毘達磨石」磨「之」、仮金遂露。即呵「噴之」、余愚人嗔「此法師」、後果方知云云。嗚呼哀哉。人有「護法之志」之昔、魔王不「尽」力者、何作「滅法計」。是故作「羅漢出世」、現「神通」誑「人」。諸論伝記中、多有「此事」。涅槃等諸經、先亦有「仏記」。近日未「見」此「反相」。定魔王「拱手」、只待「汝邪心」歟。依「汝迷謬」、世人多無「嘗」乎甘露法味「之心」、絶「翫」乎無上宝珠「之思」。皆齊「馳」於邪見衢、各「絞」手趣「於自利道」。於焉大乘正法將「絶」、豈非「苦乎」、非「痛乎」。准「前所」引文証、汝既無「守護正法義」、法師名依「何立」乎。

*332 上

問。設我雖「作」此書「防」菩提心「以」正。「仁本・活本」「聖」道門「喻」群賊、世有「如」汝等「之罪人」、道心不「可」絶、聖道不「可」滅、何強致「憂愁」乎。答。我聞「此不忍」之辭、心府忽加「割」。時属「末代」、人倦「求法」、邪魔設「方便」、動作「滅法計」。〔前出經説〕。汝之「邪法」、興而年數未「久」、人多捨「正道」、舉「世信」邪説、遂成「群立」。宗、遍「滿諸国」。掩「耳於説經之音」、背「面於聖道之衆」。然如「碎船漂」浪、而纔有「誦」經典「之男子」。似「殘燈待」風、以適有「歸」余仏「之女人」。是併依「宿善多幸遇」明主「正化」也。昔聞大人出「世」、鷄鳥孕「鳳凰」、牝馬産「麒麟」。汝邪化下希有「此」一類。良匪「直爾」也。夫我之「聖主」、等「心於須弥」、比「思於蒼海」、明「揚仏日」、敬「重大

に住まるなかれ。応に正法を以て遣わし、或いは繫を破し倒を持つべし。外道の鹿に怖れらるる故に、及び正教を住持する故に、復当に振るいて師子吼すべし」と。文。謹んで論意を案ずるに、道心の行者、世事において執著なし、猶お分別なきが如し。之を譬うるに癡盲・聾人を以てす。然るに外道の鹿に對して、師子吼の勢を作すに、非理非法の音を聞きて、聾盲の如くするなかれ。然れば則ち設い高名碩學にあらざると雖も、何ぞ此の心なきや。仏法は是れ我が法なり。何ぞ必ず他護を待たんや。況んや如來の正法を守護し受持せん、是れ法師の所作なり。諸の魔事を覺り邪を破し正を立つ、是れ法師の所作なり。之に依りて持正法法師・覺諸魔事法師の名を立つ。『探玄記』の第八に云うが如し。「十方界において仏の滅度の後、如來の正法を守護し受持し、広宣に流布し開化して絶えざるを、法師と為すなり。弁積法師および那羅延法師・他摩室利法師等の如し。並びに其の人に由りて、仏法をして再興せしめ久しく世間に住せしむる等を、此れを持正法法師と為すなり。覺諸魔事は、『莊嚴論』の中の如し、魔あり、詐りて神通を現じ、羅漢の形を作し、諸の比丘を惑乱す、愚は皆熯伏す、多聞の比丘あり、阿毘達磨の石を以て之を磨くに、仮金の遂に露わる。即ち之を呵噴す、余の愚人は此の法師を嗔る、後の果方知る」と云云。嗚呼哀しきかな。人に護法の志あるの昔は、魔王も力を尽くさずば、何んが滅法の計を作さんや。是の故に羅漢と作りて世に出で、神通を現じて人を誑かす。諸論の伝記の中に、多く此の事あり。『涅槃』等の諸經、先ず亦仏記にあり。近日未だ此の反相を見ず。定んで魔王は手を拵めて、只、汝が邪心を待つか。汝が迷謬に依りて、世人の多くは甘露の法味を嘗むの心なし、無上の宝珠を翫ぶの思いを絶つ。皆頭を齊しく邪見の衢に馳せ、各の手を絞りに自利の道に趣く。焉に大乘の正法は將に絶えんとす、豈に苦にあらざや、痛みにあらざや。前に引く文証に准ずるに、汝に既に守護正法の義なし、法師の名を何に依りてか立てん。

問う。設い我れ此の書を作りて菩提心を妨げ正（「正」の字、仁本・活本「聖」道門を以て群賊に喩うると雖も、世に汝等如きの罪人あり、道心絶つべからず、聖道を滅すべからず、何ぞ強ちに憂愁を致さんや。

答う。我れ此の不忍の辞を聞く、心府忽ち割けんが如し。時は末代に属す、人は求法に倦む、邪魔は方便を設けて、動きて滅法の計を作す。〔前出の經説の如し〕。汝の邪法、興りて年數未だ久しからず、人の多くは正道を捨て、世を挙げて邪説を信ず、遂に群を成して宗を立て、諸国に遍満す。耳を説經の音に掩いて、面を聖道の衆に背く。然れば碎船の浪を漂うが如し、而も纔かに經典を誦するの男子あり。殘灯の風を待つに似る、以て適たま余仏に帰するの女人あり。是れ併びに宿善多く幸いに明主の正化に遇うに依るなり。昔に聞けり、大人の世に出でるは、鷄鳥の鳳凰を孕む、牝馬の驎・を産む。汝が邪化の下に希に此の一類あり。良に直爾にあらざるなり。夫れ我が聖主、心を須弥に等しくして、思いを蒼

乘。以「歸」有「余」信法無「外」、囑「千萬」龍象衆、書「一日」一切經、抑「國」務、誦「一乘」法華、運「仙」毫、書「十七」地論、繼「已」絕聖跡、興「未」興「佛」事、倩「察」大「乘」聖教旨趣、厭「苦」欣「樂」之心未「必」為「珍」、咄「禽」蹇獸厭「乎」苦患、外道邪宗欣「乎」解脫、適「信」因果一人、何必愛「生死」乎。惟難「有」者、愛「樂」大「乘」之心也。其無「上」者、守「護」佛法之志也。我之「皇」有「此」聖德、快哉幸哉。一國涼「於」曼荼灌頂之定風、萬人沐「乎」一乘。三乘。「仁」本・活本「三乘」一乘之智水、專依「之」也。如「下」妙光城人民誇「大」慈幢行樂、莫「非」大光王之聖德。我聞「汝」之邪說「為」深悲、值「此」之正化「為」大幸。若不「爾」者、我等從「冥」入「冥」從「闇」入「闇」、何畜「〔底本とも三本まま〕」見「仏」。「仁」本・括本「聞」資糧、向「菩提」大道乎。倩「思」此理、坐「解」脫之床、亦酬「我」之「聖」主之鴻恩。如「下」華嚴經多知解婆羅門對「善」財「說」甘露大王德「中」云。復次我王宣「流」正化、諸「仏」護念、何況「竜」神以「是」正心能制「諸」惡。如「執」鈎策、邪法「不」生、能「與」世間「作」無利「者」、威化調伏正見修行、亦如「牛」王王若行時、一切「諸」牛悉皆隨從。王亦如「是」、正化流行、一切有情悉皆隨順。又如「鉄」鈎能制「狂」象。王治正化能伏「惡」人、究竟令「共」同「歸」解脫。「己」上「是」知「值」明主正化、專「為」解脫因乎。我之「皇」敬「重」佛法、亦「為」諸「仏」護持力。如「下」清涼大師積「前」經文中云。諸「仏」護持流「心」仏教、特「異」余王「云」云。當「知」國主「歸」汝邪見「者」、仏法「一」時隱沒。今不「爾」者、定諸「仏」護持之力也。問云、專修門人有「一」類徒党「云」、雜行善導之所制也。聞「如」此文理、是「可」為「雜」行、仍不「聞」念仏外余事、不「奈」同行外余人。汝雖「作」此決、稱「別」解別行人之所為、不「可」倍用。可「有」何「益」乎。答。聞法之益、諸教所「讚」嘆也。善導全「不」制「之」、如「善」導觀經疏第四云。行者當「知」、若欲「學」解、從「凡」至「聖」、乃至仏果、一切無礙皆得「學」也。苦欲「學」行者、必籍「有」縁之法。少用「功」勞、多得「益」也。文。准「此」文、行法雖「籍」有縁「一」法、言「學」解「有」一切無礙之言。專修人何「不」肯聞法之益乎。如「法」華云。聞「法」歡喜、讚「乃」至「發」一言、即「為」已供「養」一切三世仏。如「此」文經論非「一」。菩薩万行、皆無「聞」法「不」為「先」。善導所制、是「指」別解別行邪

* 32 下

海に比したまう、仏日を明揚し、大乘を敬重したまう。帰仏に余ありて信法に外なきを以て、千万の龍象衆を・し、一日一切経を書し、国務を抑え一乘法華を誦誦し、仙毫を運びて十七地論を書写し、已絶の聖跡を継ぎ、未だ興さざる仏事を興す。倩ら大乘の聖教の旨趣を察するに、苦を厭ひ樂を欣うの心は未だ必ずしも珍と為らず、咄禽蹇獸も苦患を厭う、外道の邪宗も解脫を欣う。適たま因果を信ずる人、何ぞ必ずしも生死を愛せんや。惟れ有り難しと雖も、大乘を愛樂するの心なり。其れ無上は、仏法を守護するの志なり。我が皇に此の聖徳まします、快きかな幸いなるかな。一國は曼荼灌頂の定風に涼む、万人は一乘・三乘（仁本・活本「三乘」一乘）の智水に沐す、専ら之に依るなり。彼の妙光城の人民の大慈幢行の樂を誇るは、大光王之聖徳にあらざるることなきが如し。我れ汝が邪説を聞きて深く悲しまされんも、此の正化に値うを大幸と為ん。若し爾らざれば、我等は冥より冥に入り闇より闇に入らん、何ぞ見仏（「仏」の字、仁本・活本「聞」）の資糧を畜わえて、菩提の大道に向わんや。倩ら此の理を思うに、解脫の床に坐す、亦我が聖主の鴻恩に酬わん。『華嚴經』の多知解婆羅門の善財に対して甘露大王の徳を説く中に云うが如し。「復次に我が王は正化を宣流したまうに、諸仏護念したまう、何に況んや竜神を以て正しく心に能く諸悪を制す。鈎策を執るが如し、邪法生ぜず、能く世間の与に無利を作す者は、咸く化して調伏し正見に修行す、亦牛王の王の若し行ずる時、一切の諸牛は皆悉く随従するが如し。王も亦是の如し、正しく化して流行したまうに、一切の有情は悉く皆隨順す。又鉄鈎の能く狂象を制するが如し。王の治は正しく化して能く悪人を伏し、究竟して其れ同じく解脫に歸せしめたまう」と。「己上」是に知りぬ、明主の正化に値うを、専ら解脫の因と為んを。我が皇は佛法を敬重したまう、亦諸仏の護持力を為したまう。清涼大師の前の經文を積する中に云うが如し。「諸仏護持して心に仏教を流したまうこと、特に余王に異なれり」と云云。當に知るべし、国主の汝が邪見に歸したまわば、仏法一時に隱没す。今、爾らざるは、定んで諸仏護持の力なり。

問うて云く、專修門人に一類の徒党ありて云く、雜行は善導の制する所なり。此の如き文理を聞きて、是れ雜行と為すべし、仍お念仏の外の余事を聞かず、同行外の余人に奈ぞあらずや。汝は此の決を作すと雖も、別解・別行の人の所為を稱う、信用すべからず。何の益あるべきや。

答う。聞法の益、諸教の讚嘆する所なり。善導は全く之を制せず、善導の『觀經疏』第四に云うが如し。「行者當に知るべし、若し解を學ばんと欲せば、凡より聖に至るまで、乃至仏果まで、一切無礙に皆學ぶを得るなり。若し行を學ばんと欲せば、必ず有縁の法に藉れ。少しく功勞を用いるに、多く益を得るなり」と。文。此の文に准ずるに、行法は有縁の法に藉ると雖も、學解を言うに「一切無礙」の言あり。專修人、何ぞ聞法の益を肯わらずや。『法華』に云うが如し。「法を聞きて歡喜し、讚すること乃至一言も發さば、即ち已に一切の三世の仏を供養すと為す」と。此の如き文は經論に一にあらず。菩薩の万行、皆聞法を先と為ざるはなけん。善導の所制、是れ別解・別行・邪雜の人の往生行を惑乱せんと

雜人之欲惑亂往生行_レ之言也。然則設雖_レ為_二專修人_一、必須_レ親_二近善友_一聞_レ正法_上也。

*332上

問。彼一類引_レ証云、善導云、敬而遠_レ之。西方要決云、但知深敬者、此事如何。答。其証拋更無_二其謂_一。善導云、讚歎一切衆生三業所為善、若非_二善業者_一、敬而遠_レ之、亦不_レ隨喜也。文。此中既讚_二歎聖道淨土二門善根_一、不_レ簡_二別解別行_一也。然云_レ遠_レ離不_レ善_一不_レ隨喜、此不_レ待_レ言。次西方要決文者、要決云、二者敬_二有緣善知識_一、謂宣_二淨土教者_一、若千由旬十由旬已來、并須_二敬重親近供養_一。別學之者惣起_二敬心_一。与_レ己不_レ同、但知深敬也。苦生_レ輕慢、得_レ罪無窮故、須_二惣敬即除_二行障_一。文。解曰、此文有_二三句_一、出_二三人_一。一有_二宣_二淨土教者_一、千由旬十由旬之中、隨_レ堪可_二親近供養_一。二於_二別學人_一、惣可_レ起_二敬心_一、勿_レ有_二隔心_一。此第二人、依_二善導意_一、是別解別行人無_二惡見_一人也。三逢_二与_レ己不_レ同人_一、但知深敬。此第三人者、依_二善導意_一、別解_レ〔仁本「別」あり〕行人欲_二惑亂淨土行_一人也。此文意、設雖_レ為_二別學人_一、非_レ謂_二不_レ尊_二重有德人_一。惣述_二恭敬修意趣_一故、言_レ於_二邪雜人等_一不_レ生_二輕慢_一也。於_二其中_一是淨土行者故、先_レ宣_二淨土教_一人也。第二_レ舉_二別解行人_一、第三_レ出_二邪雜人_一、於_二邪正二人_一、皆令_レ生_二恭敬心_一故、結文云_レ故須_二惣敬即除_二行障_一。文。若設唯出_二淨土知識一人_一、雖_レ不_レ出_二余人_一、恭敬修義須_二惣敬_一。況文既出_二三人_一勸_二恭敬_一。引_二此文_一還_レ隔_二別解行人_一、甚_レ以不可也。若如_レ此不_レ得_二文意_一者、此文既於_二別行邪雜二人_一者、惣勸_二恭敬_一、於_二念仏者_一、云_二千由旬十由旬已來_一、汝於_二千由旬以外念仏者_一、為_二可_レ打_二罰之_一乎。當_レ知_二国土広博故_一、知識亦無_レ辺。非_二一身遍歷可_レ親近供養_一。是故於_二無_レ辺知識中_一、先_レ舉_二自行有緣知識_一、其知識中、亦於_二近遠二辺_一、出_レ足跡可_レ尋_二之分限_一。兼令_二恭敬別行邪雜人_一。恭敬修義是足。此外置_レ不_レ論_レ之也。

良以一味法雨無_二甘鹹不同_一、和合僧中更得_レ有_二別衆_一乎。云_二聖

道門_二云_一淨土門、俱是佛法也。云_二專修人_一云_二雜行人_一、同是僧衆也。爾者須_レ同守_二一法印_一、共行_二八正道_一。是故阿彌陀經等別_レ說_二念仏者律儀_一。善導等又無_レ加_二別制戒_一。苦言_レ有_二別道理_一淨土門諸師有_レ

欲するを指すの言なり。然れば則ち設_レい專修人と為すと雖も、必ず須_レく善友に親近して正法を聞くべきなり。

問う。彼の一類の証を引ききて云く、善導の云く、「敬して之を遠ざかれ」と。『西方要決』に云く、「但知りぬ深く敬う」とは、此の事いかん。

答う。其の証拋は更に其の謂れなし。善導の云く、「一切衆生の三業の所為の善を讚歎せよ、若し善業にあらざれば、敬して之を遠ざかれ、亦隨喜せざれとなり」と。文。此の中に既に聖道・淨土の二門の善根を讚歎す、別解・別行を簡ばざるなり。然れば不善を遠離して隨喜せざれと云う、此れ言を待たず。次に『西方要決』の文は、『要決』に云く、「三者有緣の知識を敬う、謂く淨土教を宣ぶる者は、若し千由旬・十由旬より已來、並びに須_レく敬重し親近し供養すべし。別學の者に惣じて敬心を起す。己と同じからざるも、但知りて深く敬するなり。若し・慢を生ぜば、罪を得ること無窮なる故に、須_レく惣じて敬して即ち行障を除くべし」と。文。解して曰く、此の文に三句ありて、三人を出す。一には淨土教を宣ぶる者あり、千由旬・十由旬の中、堪るに隨いて親近供養すべし。二には別學人において、惣じて敬心を起すべし、隔心あることなかれ。此の第二の人は、善導の意に依らば、是れ別解・別行人の惡見なきの人なり。三には己と不同的人に逢いて、但知りて深く敬する。此の第三の人は、善導の意に依らば、別解（仁本「別」あり）行人にして淨土の行を惑亂せんと欲する人なり。此の文の意、設_レい別學の人と為すと雖も、有德の人を尊重せずと謂うにあらず。惣じて恭敬修に意趣を述ぶる故に、邪雜人等において・慢を生ぜざれと言ふなり。其の中において是れ淨土の行者の故に、先_レず淨土教を宣ぶる人を舉ぐるなり。第二に別解の行人を挙げ、第三に邪雜の人を出す、邪正の二人において、皆恭敬心を生ぜしむる故に、結文に「故に、須_レく惣じて敬して即ち行障を除くべし」と云う。文。若し設_レい唯、淨土の知識一人を出して、余人を出さずと雖も、恭敬修の義、須_レく惣じて敬すべし。況んや文に既に三人を出して恭敬を勧めり。此の文を引ききて還りて別解の行人を隔つるは、甚だ以て不可なり。若し此の如く文意を得ずば、此の文に既に別行邪雜の二人においては、惣じて恭敬を勧む、念仏者においては、千由旬・十由旬已來と云う、汝は千由旬以外の念仏者において、之を打罰すべきと為んや。當_レに知るべし、国土広博なるが故に、知識亦無_レ辺なり。一身に遍歷して親近供養すべきにあらず。是の故に無_レ辺の知識の中において、先_レず自行の有緣の知識を挙げ、其の知識の中に、亦近遠の二辺において、足跡に尋ぬべきの分限を出す。兼ねて別行邪雜の人を恭敬せしむ。恭敬修の義は是に足んぬ。此の外には置きて之を論ぜざるなり。

良に以て一味の法雨に甘・の不同なけん、和合僧の中に更に別衆あることを得んや。聖道門と云い、淨土門と云う、俱に是れ佛法なり。專修人と云い、雜行人と云う、同じく是れ僧衆なり。爾れば須_レく同じく一法印を守りて共に八正道を行ずべし。是の故に『阿彌陀經』等は別して念仏者の律儀を説かず。

制念仏者律儀者、其理不可爾。何者、謂通論如來說教、惣有二種。一化教、謂為一切、說諸因果理事等法、大小頭密諸經論是也。二制教、謂對自內衆、舉過顯非、立正法制、非理、結示罪名、辨定持犯、即大小乘諸戒律是也。化教通五種人說、一仏、二菩薩、三弟子、四神仙、五變化人也。此五人所說、順如來所說法印、皆以名仏法。是故阿毘達磨諸大論師、各各建立法相名數、簡括諸法自共相、雖廢立不同、皆以名仏説。制教者、唯是如來一人自説。以制戒輕重余無能故、更無有他説。善導等諸師、何制別律儀乎。但近代專修者、作種種別戒、甚非善導過也。如彼善導者、雖以念仏為行、不立為別宗。何以得知。觀經疏第三、積諸仏如來是法界身等文已云、或有行者一將此一門之義、作唯識法身之觀、或作自性清淨仏性觀者、甚錯。絶無少分相似也。乃至又今此觀門等、唯指方立相、住心而取境、惣不明無相離念也等云云。依他師意、實於此文作唯識真如等義。然善導既作此判。於觀經一卷中、他処全不説。雖有解第一義言、正不顯其義。是故依善導意、於此經中、更不顯唯識真如等義。若爾者、不可有不説唯識真如等義一宗也。如汝所立者、唯以淨土三經為所依、以善導一師為高祖、以稱名為宗義、立一宗、甚以不可也。須以下三經為本、以一切經論為所依立一宗。例如下以華嚴經為本、以一切經論為所依成一宗、以法華經為本、以一切經論為所依成一宗。若不爾者、更不可立一宗也。

問曰、此条、選集第一段已決畢。如集曰、問曰、夫立宗名、本在華嚴天台等八宗九宗、未聞於淨土之家、立其宗名。然今号淨土宗、有何証拠也。答曰、淨土宗名、其証非一。元曉遊心安樂道云、淨土宗意、本為凡夫、兼為聖人。又慈恩西方要決云、依此一宗。又迦才淨土論云、此之一宗竊為要路。其証如此、不足疑端云云。其証實顯然也、何會之乎。答。宗有大小不同、謂名言起必有由、指之云宗。依因明家釈云、法有法合名

*33上

善導等も又別して制戒を加うることなし。若し別の道理ありて淨土門の諸師に念仏者の律儀を制することありと言わば、其の理爾るべからず。何んとなれば、謂く如來の説教を通論するに、惣じて二種あり。一には化教、謂く一切の為に、諸の因果・理事等の法を説く、大小頭密の諸經論是れなり。二には制教、謂く自内の衆に對して、過を挙げ非を顯わす、正法を立て非理を制す、罪名を結示し、持犯を弁定す、即ち大小乘の諸戒律是れなり。化教は五種の人の説に通ず、一には仏、二には菩薩、三には弟子、四には神仙、五には變化人なり。此の五人の所説、如來所説の法印に順ぜば、皆以て仏法と名く。是の故に阿毘達磨の諸大論師、各各に法相の名數を建立し、諸法の自共の相を簡括す、廢立の不同ありと雖も、皆以て仏説と名く。制教は、唯、是れ如來一人の自説なり。制戒の輕重を余は能うことなきを以ての故に、更に他説あることなし。善導等の諸師、何ぞ別して律儀を制せんや。但し近代の專修の者、種種の別戒を作るは、甚だ善導の過にあらざるなり。彼の善導の如きは、念仏を以て行と為すと雖も、立てるに別宗と為さず。何を以て知ることを得んや。『觀經疏』の第三に、「諸仏如來是法界身」等の文を積し已りて云く、「或いは行者ありて此の一門の義を將いて、唯識法身の觀を作す、或いは自性清淨仏性の觀を作すは、甚だ錯れり。絶えて少分も相似ることなきなり。乃至又今、此の觀門等は、唯、方を指して相を立つ、心を住して境を取る、惣じて無相離念を明かさざるなり」と云云。他師の意に依らば、實に此の文において唯識・真如等の積を作す。然るに善導は既に此の判を作す。『觀經』一卷の中において、他処に全く説かず。「解第一義」の言ありと雖も、正しく其の義を顯わさず。是の故に善導の意に依らば、此の『經』の中において、更に唯識・真如等の義を顯わさず。若し爾れば、唯識・真如等の義を説かざる一宗あるべからず。汝が所立の如きは、唯、淨土三經を以て所依と為し、善導の一師を以て高祖と為し、稱名を以て宗義と為て、一宗を立てること、甚だ以て不可なり。須く三經を以て本と為し、一切の經論を以て所依と為て宗を立てべし。例えば『華嚴經』を以て本と為し、一切の經論を以て所依と為て一宗を成ず、『法華經』を以て本と為し、一切の經論を以て所依と為て一宗を成ず。若し爾らば、更に一宗を立てべからず。

問うて曰く、此の条、『選集』第一段に已に決し畢んぬ。『集』に曰うが如し、「問うて曰く。夫れ宗名を立てることは、本、華嚴・天台等の八宗・九宗にあり。未だ淨土の家に於いて其の宗名を立てることを聞かず。然るに、今、淨土宗と号する、何の証拠ある。

答えて曰く。淨土宗の名、其の証、一にあらざ。元曉の『遊心安樂道』に云く、淨土宗の意、本、凡夫の爲にして、兼ねては聖人の爲なりと。又、慈恩の『西方要決』に云く、此の一宗に依ると。又、迦才の『淨土論』に云く、此の一宗、竊かに要路たりと。其の証、此の如し。疑端に足らず」と云云。其の証は實に顯然たり、何ぞ之を會せんや。答う。宗に大小の不同あり、謂く名言の起るに必ず由あり、

宗。此於一切世出言陳、皆有此宗也。常途積云、当部所崇曰宗。此約經論文義積之。雖言異、意同之。此詮一義一事以為宗。世間短札等、非無此宗、未必學者成群也。若無之者、如風林河等音声、更無詮表也。以為小宗。今所言。五宗八宗等者、簡積諸法自共相、妙尽空有等底。大門有額、學者成群。僅入一門、癡暗水解、適昇學堂、慧炬光暉、是為大宗。清涼云、多分為宗云云。准例尽広多諸法性相、可為大宗。然汝集文萃問端大宗為本、出答文以小宗為証。又彼答文所引証、不隔一切經論。我不必諍為大宗、汝既隔一切經論而立大宗。若爾者、於唯識真如等法門十八界諸法性相、去幾仏利乎。依阿弥陀經說可答曰。過十萬億仏土。問曰、爾者聖教說、虚空無辺故世界無辺、世界無辺故衆生無辺云云。若有問、若過十萬億仏利有淨土者、十萬億刹外無穢土乎。若爾者、世界無辺等文、唯約穢土說之、何言無辺乎。汝若不答者、一宗不成、若又引余經論作此答者、汝所立宗又不成也。若汝言立宗時不捨余經論者、勿以持戒菩提心等為障礙、勿以聖道門譬群賊。若不爾而專念仏一行者、我仰汝為西方導師、衆生亦歸汝可出生死大苦。若爾者、仏法一味僧衆和合。豈非幸耶、豈非喜耶。

夫仏正法是一味、終歸菩提。汝邪法是別法、隔菩提心故、不相応正道、終不到菩提。仏弟子是一味、終歸涅槃。汝門弟是別衆、隔別解行人故、終不歸涅槃、其過豈不同破僧罪乎。夫愛罪不斷善根不損他人、見罪能害慧命亦損他人。是故雖破戒、尚有正見者、得隨在福田數中。若有邪見者、於仏法為大賊。若親近戒見俱壞惡行苾芻人師及弟子、俱斷善根、當墮地獄。其証如三上出之。然汝立一宗、云以持戒菩提心為念仏能障。豈非令人勸戒見俱壞惡行乎。設雖上人隨分立持戒淨行好道心修行、依此邪言、門弟記貝葉鏤簡牘、永代住持、以為上人素懷。此事奈於仏知見、可恐可恐

*283下

*284上

之を指して宗と云う。因明家に依るに積して云く、法有法を合して宗と名く。此れ一切の世・出世の言陳において、皆此の宗あるなり。常途の積に云く、当部の崇むる所を宗と曰う。此れ經論の文義に約して之を積す。言は異なりと雖も、意は之に同じ。此れ一義一事を詮わして以て宗と為す。世間の短札等、此の宗なきにあらず、未だ必ずしも学ぶ者の群を成さざるなり。若し之なくば、風林河等の音声の如し、更に詮表なからん。以て小宗と為す。今、言う所の五宗・八宗等は、諸法の自共の相を簡積して、妙に空有等の底を尽せり。大門に額あり、学ぶ者は群を成す。僅かに一門に入りて、癡暗の水く解け、適たま学堂に昇り、慧炬の光暉す、是れを大宗と為す。清涼の云く、「多分を宗と為す」と云云。准じて例するに広多の諸法の性相を尽すを、大宗と為すべし。然るに汝が『集』の文に問端を挙ぐるに大宗を本と為し、答文を出すに小宗を以て証と為す。又彼の答文に引く所の証、一切の經論を隔てず。我れ必ずしも大宗の為に諍わざるに、汝は一切の經論を隔てて大宗を立つ。若し爾れば、唯識・真如等の法門・十八界の諸法の性相・仏果・有為・無為の功德において、何をか弁定せんや。先に汝に問うて曰く、樂う所の安樂国土において、幾ばくの仏利を去くや。『阿弥陀經』等の説に依りて答えて曰うべし。十萬億仏土を過ぐ。問うて曰く、爾れば聖教の説、「虚空無辺の故に世界無辺なり、世界無辺の故に衆生無辺なり」と云云。若し問いあらば、若し十萬億仏利を過ぎて淨土あらば、十萬億刹の外に穢土なきや。若し爾れば、「世界無辺」等の文は、唯、穢土に約して之を説く、何ぞ無辺と云うや。汝、若し答えず能わらずば、一宗を成せず、若し又余の經論を引きて此の答を作さば、汝が所立の宗は又成ぜざるなり。若し汝、宗を立つる時に余の經論を捨てずと言わば、持戒・菩提心等を以て障礙と為すなかれ、聖道門を以て群賊に譬うるなかれ。若し爾らずして、念仏一行を専らにするは、我れ汝を仰ぎて西方の導師と為さん、衆生も亦汝に歸し生死の大苦を出るべし。若し爾れば、仏法一味にして僧衆和合す。豈に幸いにあらずや、豈に喜びにあらずや。

夫れ仏の正法は是れ一味なり、終に菩提に歸す。汝が邪法は是れ別法なり、菩提心を隔つる故に、正道に相應せず、終に菩提に到らず。仏弟子は是れ一味なり、終に涅槃に歸す。汝が門弟は是れ別衆なり、別解の行人を隔つる故に、終に涅槃に歸せず、其の過は豈に破僧罪に同じからずや。夫れ愛罪は善根を断ぜず、他人を損せず、見罪は能く慧命を害し亦他人を損せん。是の故に破戒と雖も、尚お正見ある者は、福田の數中に隨在を得。若し邪見ある者は、仏法において大賊と為す。若し戒見俱に壞する悪行・苾芻に親近せる人師および弟子、俱に善根を断じて、当に地獄に墮すべし。其の証は上に之を出すが如し。然るに汝は一宗を立てて、持戒・菩提心を以て念仏の能障と為すと云う。豈に人をして戒見俱に壞す悪行を勧めしむるにあらずや。設い上人は隨分に持戒淨行を立て道心修行を好むと雖も、此の邪言を興すに依りて、門弟は貝葉に記し簡・に鏤めて、永代に住持し、以て上人の素懷と為ん。此の事、仏の

矣。沙門高辨敬白、諸人中、若千万中一人有信、此能破人上者、必不_レ可_レ輕_レ稱名行、唯無_レ此邪見者、本望是足。余不_レ誘_レ稱名行、不_レ背_レ善導_レ。是故所_レ出皆依_レ淨土門意、唯詳_レ善導宗義。但於_レ弘法_レ一_レ邊者、是為_レ魔說。如_レ修禪要決云。問。有人言、經說禪定牢固者、如來滅後第二五百年也。時今遠矣、不_レ合_レ修禪。若_レ拋_レ此言、合_レ修禪不_レ。答。經亦広説云、仏本不_レ滅、何論_レ之久近也。西方現今坐得_レ四禪八定者、其數極多、不_レ可_レ勝計。若言_レ不_レ合、其事如何。三慧之中禪是修慧、今時豈_レ可_レ但學_レ聞思、不_レ許_レ修也。此言偏拋、極非_レ通説、雖_レ引_レ仏經、其間不_レ無_レ邪正、且於_レ聖教_レ偏_レ一_レ文、以_レ弊_レ多義者、此當_レ魔説耳、深可_レ察_レ之、深可_レ察_レ之。(已上) 諸行皆以可_レ然。若執_レ一行_レ求_レ其文証者、諸行皆非_レ無_レ文証。若就_レ稱名_レ如法行可_レ立、就_レ余行_レ如法行難_レ立、於_レ此人_レ尤可_レ好_レ稱名。若稱名雜行俱如法行難_レ立者、善導專修文、於_レ此人_レ未_レ必_レ為_レ証也。

近代愚童少女等、立_レ宗成_レ群、口誦_レ專修文、心無_レ專念誠、以_レ上慢_レ為_レ心、以_レ貢高_レ為_レ思、凌_レ蔑誦誦大乘行人、輕_レ睨秘密真言持者、其過幾爾乎。此事往生宗中、專制_レ為_レ大罪。如_レ善導觀念法門引_レ觀仏三昧經云。仏告_レ阿難、未來衆生、其有_レ得_レ是念仏三昧者、觀_レ仏諸相好者、得_レ諸仏現在三昧者、當_レ教_レ是人_レ密身口意莫_レ起_レ邪命、莫_レ生_レ貢高。若起_レ邪命及貢高法、當_レ知此人_レ是増上慢、破_レ滅仏法。多使_レ衆生起_レ不善心、乱_レ和合僧、顛_レ異惑衆。是惡魔伴。如_レ是惡人、雖_レ復念_レ仏、失_レ甘露味、此人生処_レ以_レ貢高_レ故、身恒卑小、生_レ下賤家、貧窮諸衰。無量惡業、以為_レ嚴飾。如_レ是種種衆多惡事、當_レ自防護令_レ永不_レ生。若起_レ如_レ是邪命業者、此邪命業、猶如_レ狂象壞_レ蓮華池。今此邪業亦復如_レ是、壞_レ敗善根。仏告_レ阿難、有_レ念仏者、當_レ自防護、勿_レ令_レ放逸。念仏三昧人、若不_レ防護_レ生_レ貢高者、邪命惡風、吹_レ橋慢火、燒_レ滅善法。善。(觀念法門「法」あり)者、所謂一切無量禪定、諸念仏法、從_レ心想_レ生、是名_レ功德藏云云。汝説_レ別法_レ起_レ別衆、初心比丘比丘尼、多出_レ和合衆、入_レ汝邪門。經文所_レ指乱和合僧過、実顯然

*32下

知見を奈んせん、恐るべし恐るべし。沙門高弁が敬して白さく、諸人の中に、若し千万中に一人此の能破を信ずる人あらば、必ず称名の行を軽んずべからず、唯、此の邪見なき者は、本望は是れ足れり。余は称名の行を誇らず、善導の釈に背かず。是の故に出す所は皆淨土門の意に依りて、唯、善導の宗義を詳らかにす。但し弘法において一辺を挙ぐるは、是れ魔説と為す。『修禪要決』に云うが如し。「問う。ある人の言わく、經説の禪定牢固は、如來滅後の第二の五百年なり。時今に遠し、禪を修すべからず。若し此の言に拋らば、禪を修すべきや、いなや。答う。經に亦広説して云く、仏本より滅せず、何ぞ之の久近を論ぜんや。西方に現に今坐して四禪八定を得る者は、其の數極めて多し、勝計すべからず。若しべからずと言わば、其の事いかに。三慧の中に禪は是れ修慧、今の時に豈に但、聞思を学んで修を許さざるべけんや。此の言は偏拋なり、極めて通説にあらざり、仏經を引くと雖も、其の間に邪正なきにあらず、且く聖教において偏えに一文を挙げ、以て多義を弊するは、此れ當に魔説ならくのみ、深く之を察すべし、深く之を察すべし」と。(已上) 諸行も皆以て然るべし。若し一行に執して其の文証を求むるならば、諸行に皆文証なきにあらず。若し称名に就いて如法の行を立つべく、余行に就いて如法の行を立て難くば、此の人において尤も称名を好むべし。若し称名と雜行と俱に如法の行を立て難くば、善導の專修の文、此の人において未だ必ずしも証と為さざるなり。

近代の愚童少女等、宗を立て群を成す、口に專修の文を誦するも、心に專念の誠なし、上慢を以て心と為し、貢高を以て思いと為して、誦誦の大乗人を凌蔑し、秘密真言の持者を輕睨す、其の過幾爾ぞや。此の事は往生宗の中に、専ら制して大罪と為す。善導の『觀念法門』に『觀仏三昧經』を引きて云うが如し。「仏、阿難に告げたまわく、未來の衆生、其れ是の念仏三昧を得ることある者、仏の諸の相好を觀ずる者、諸仏現在三昧を得る者は、當に是の人に教えて身口意を密し邪命を起すことなかるべし、貢高を生じなかれ。若し邪命および貢高の法を起さば、當に知るべし、此の人は是れ増上慢にして、仏法を破滅す。多く衆生をして不善の心を起さしめ、和合衆を乱し、異を顛わし衆を惑わす。是れ惡魔の伴なり。是の如き惡人、復仏を念ずと雖も、甘露の味を失う、此の生処は貢高を以ての故に、身は恒に卑小にして、下賤の家に生まれ、貧窮諸衰なり。無量の惡業、以て嚴飾と為す。是の如き種種の衆多の惡事、當に自ら防護して永不_レ生ぜざらしむるべし。若し是の如き邪命の業を起さば、此の邪命の業、猶お狂象の蓮華池を壞すが如し。今、此の邪業も亦復是の如し、善根を壞敗す。仏、阿難に告げたまわく、念仏ある者は、當に自ら防護すべし、放逸せしむるなかれ。念仏三昧の人、若し防護せずして貢高を生じる者は、邪命の惡風、慢の火に吹かれ、善法を燒滅す。善(『觀念法門』「法」あり)者、所謂一切の無量の禪定、諸の念仏の法、心想より生ず、是れを功德藏と名く」と云云。汝は別法を説きて別衆を起す、初心の比丘・比丘尼、多く和合衆を出で、汝が邪門に入る。經文に指す所の乱れ、和

者也。傷嘆之至、唯限此一事也。愚僧雖不屑、忝贖仏子稱。臨兩部大壇、希浴五智之法水、入華嚴円宗、纔嘗十玄之義味。雖恐非器、深仰宿縁。解脱資糧、只憑此善根。然若有偏守慧果弘法之一流、一朝永帰真言、唯仰香象清涼之遺風、諸国専崇華嚴、令毀些念仏之法、廢退余乘之行。我聞此事、甚不随喜心。宛今如噴汝過、全不可有差異也。此一言定落于琰魔王之玉鏡、彰於俱生神之金札歟。又両部曼荼諸尊聖衆、華嚴海会一切三宝、十眼朗垂照見、十通深加証知。且彼講經曰、先述此意趣、一会諸人皆所聞也。病患巨多、方薬非一。己宅遠近、道乗千差。若唯授称名一行、異類機何相契乎。如善導疏第四云、諸仏教行數越塵沙。稟識機縁随情非一。〔乃至〕随出一門者、即出一煩惱門也。随入一門者、即入一解脱智慧門也。〔乃至〕是故各随所樂而修其行者、必疾得解脱也云云。此言誠乎。汝又可守比誠言也。

問曰、近代愚童少女等、設雖不称仏号、不可修真言瑜伽、不可行諸宗慧学。然依我之勸進、一向称仏号。然如善導所积、百即百生行故、順次決定往生極樂。是可為無上大利。然汝謗我非罪業乎、如何。答。汝若勸進彼愚童少女等、不令一言一事違善導教誡者、良可有首即百生憑。若不然者、順次往生為不定。見不堪余行勸専称者、我亦少少有之。況呵汝乎。若不然強勸進之者、其根機不必相当也。設阿弥陀如来、与觀音勢至等清浄大海衆、来此穢土勸化無量衆生、雖欲令往生極樂浄土、於三学雜行仏法、雖為何法、以一行不能成就之。何者、無量衆生根機不同故、機根多種、教法一種、不応理故。設耆婆出世、設一方投一薬、可療四百四病乎。病患多種、方薬一種、不応理故。病患多種故、方薬又多種也。病投薬、痼疾得除。是耆婆医王之秘術也。応機根設随宜法、是大聖善巧也。十二部經八万法門、浅深差別開合不同、専依此義也。

是故汝強授念仏一行、不能成就多類衆生。彼愚童少女所住

*33下

*33上

合衆の過、実に顕然たるなり。傷嘆の至り、唯、此の一事に限るなり。愚僧は不屑なりと雖も、忝くも仏子の稱を贖さん。両部の大壇に臨み、希に五智の法水に浴す、華嚴の円宗に入り、纔かに十玄の義味を嘗む。非器なるを恐ると雖も、深く宿縁を仰ぐ。解脱の資糧、只、此の善根を憑む。然るに若し偏に慧果弘法の一流を守り、一朝に永く真言に帰し、唯、香象清涼の遺風を仰ぎ、諸国に専ら華嚴を崇め、念仏の法を毀皆し、余乗の行を廢退せしめることあらん。我れ此の事を聞くに、甚だ随喜の心を生ぜず。宛て今、汝が過を噴める如きは、全く差異あるべからざるなり。此の一言は定んで炎魔王の玉鏡に落ち、俱生神の金札を彰わさんや。又両部の曼荼の諸尊聖衆、華嚴海会の一切三宝、十眼朗らかに照見を垂れ、十通深く証知を加う。且く彼の講經の日、先ず此の意趣を述べん、一会の諸人の皆聞く所なり。病患は巨多にして、方薬も一にあらず。己宅は遠近にして、道乗も千差なり。若し唯、称名の一行を授くるならば、異類の機は何ぞ相契うや。善導の『疏』の第四に云うが如し、「諸仏の教行、教塵沙を越えたり。稟識の機縁は情に随いて一にあらず。〔乃至〕随いて一門を出る者は、即ち一煩惱門を出るなり。随いて一門に入る者は、即ち一解脱智慧門に入るなり。〔乃至〕是の故に各の所樂に随いて其の行を修する者は、必ず疾く解脱を得るなり」と云云。此の言、誠なるかな。汝は又此の誠言を守るべきなり。

問うて曰く、近代の愚童少女等、設い仏号を称せずと雖も、真言・瑜伽を修すべからず、諸宗慧学を行すべからず。然るに我が勸進に依りて、一向に仏号を称す。然れば善導の所积の如く、百即百生の行の故に、順次に決定して極樂に往生す。是れ無上の大利と為すべし。然るに汝の我れを謗るは罪業にあらずや、いかん。

答う。汝、若し彼の愚童少女等を勸進して、一言一事も善導の教誡に違せしめざるならば、良に百即百生の憑あるべし。若し然らずば、順次の往生は不定と為ん。余行に堪えざるを見て専称を勧めは、我れも亦少少之あり。況んや汝を呵するをや。若し然らずして強ちに之を勸進するは、其の根機に必ずしも相当せざるなり。設い阿弥陀如来、觀音・勢至等の清浄大海衆と、此の穢土に來たりて無量の衆生を勸化して、極樂浄土に往生せしめんと欲すと雖も、三学雜行の仏法において、何の法の為なりと雖も、一行を以ては之を成就すること能わず。何となれば、無量の衆生の根機は異なる故に、機根は多種にして、教法は一種ならば、理に応ぜざる故に。設い耆婆の世に出るも、一方を設けて一薬を投じて、四百四病を療べきや。病患は多種にして、方薬は一種ならば、理に応ぜざる故に。病患は多種の故に、方薬も又多種なり。病に應じて薬を投じて、痼疾の除くるを得ん。是れ耆婆医王之秘術なり。機根に応じて随宜の法を設けること、是れ大聖の善巧なり。十二部經の八万の法門、浅深の差別・開合の不同、専ら此の義に依るなり。

是の故に汝は強ちに念仏の一行を授けて、多類の衆生を成就する能わず。彼の愚童少女の所在の近辺

近辺、必有僧尼。彼僧尼、或是為兄弟、或是為知音、其僧尼隨分有所行、或誦經、或學問、或勤修瑜伽秘法、或造立堂塔僧房。如此諸行、雖淺深不同、皆歸一解脫門。竊勸僧尼、其所行各差別。皆與道合、悉是為德。親近結緣人、其功不唐損、若失理、損自他善根。依之經論立大賊名。然男女等親近彼僧尼、讀一卷經典、愛一尊真言、投財寶致給仕。所歸僧尼雖破戒、若有正見、悉為勝緣、衆生皆無不獲大益。如十輪等經說。隨其善根勝劣、各得勝進、是如來利生方便也。良依汝勸進、稱名為先、雖似善根、又依汝勸進、住大邪見。是為善根乎、如何。若有此邪見者、設雖稱名為先、順次往生難期。不如此善心相応余行。若爾者、稱名音遍滿、為何詮乎。還是往生宗陵遲也。此順法印探実義、汝定謂非稱名行歟。不得心之至、不可稱計。依汝一言、男子女人、或捨已修之諸行、或止當修之諸行。夫法依人持、人待法昇。一人修之、法已一興、一人捨之、先一法滅也。如光宅大師積自行流通義云。普賢勸發品一品、詔為自行流通。所以爾者、前明藥王妙音等諸大菩薩苦行、通經皆亡身濟物沒命度人。但始行菩薩未全能爾、便於通經之道生退沒之心。是故如來勸人言、若使不能喪身護法弘經化他者、亦可自能受持誦誦。自受持誦誦、即是自行流通。何故然、若使此人不自受持誦誦者、經於此人則不流通。此人既能受誦誦、經於此人得流、即是通也。〔已上〕翻此可知、無量衆生廢諸行者、即是無量法滅也。今者設汝雖制之、此邪見不可止。唯不限汝在世、至法滅時、汝邪義亦可流通。依之現當所滅經卷、其數幾幾爾乎。此事若為善根者、良可為無上善根。此事若為罪業者、亦可過五逆罪。然於罪福中、是非如何。我任常途許當根佛法、是非我說、任經論設雖非功德、亦不為罪業。汝立新義偏廢余行。若非大功德者、恐為大罪歟。自所好者、是一有緣行也。如大賢云。隨其宿習、心樂住故。文。作此法滅過、偏抑所好者、必可計其當根。若不然而者、即是損他人也。若如汝勸進者、善導已來、宋朝皆

*366上

に、必ず僧尼あり。彼の僧尼、或いは是れを兄弟と為し、或いは知音と為す、其の僧尼に随分に所行あり、或いは誦經、或いは學問、或いは瑜伽秘法を勤修す、或いは堂塔僧房を造立す。此の如き諸行に、淺深の不同ありと雖も、皆一解脫門に歸す。竊かに僧尼を勸ふるに、其の所行に各の差別あり。皆道と合して、悉く是れ徳と為る。親近し結縁する人の、其の功は唐損ならず、若し理を失わば、自他の善根を損なう。之に依りて經論に大賊の名を立つ。然れば男女等は彼の僧尼に親近し、一卷の經典を読み、一尊の真言を受け、財寶を投じ給仕を致す。所歸の僧尼は破戒と雖も、若し正見あらば、悉く勝縁と為す、衆生皆大益を得ざるはなし。『十輪』等の經說の如し。其の善根の勝劣に隨いて、各の勝進を得、是れ如來利生の方便なり。良に汝が勸進に依らば、稱名を先と為す、善根に似たりと雖も、又汝が勸進に依らば、大邪見に住す。是れ善根たりや、いかん。若し此の邪見ある者は、設い稱名を先と為すと雖も、順次の往生を期し難し。善心相応の余行にしかず。若し爾れば、稱名の音の遍滿するも、何の詮ありと為んや。還りて是れ往生宗陵遲なり。此れ法印に順じて実義を探るに、汝は定んで稱名の行にあらざと謂うや。不得心の至り、稱計すべからず。汝の一言に依りて、男子・女人、或いは已修の諸行を捨て、或いは當修の諸行を止めん。夫れ法は人に依りて持ち、人は法を待ちて昇る。一人の之を修せば、法は已に一たび興り、一人の之を捨てば、先の一法滅するなり。光宅大師の自行流通の義を釈して云うが如し。「普賢勸發品一品、・けて自行流通と為す。爾る所以は、前に藥王妙音等の諸大菩薩の苦行、經に通じて皆身を亡ぼし物を濟い命を没して人を度するを明かす。但し始行の菩薩は未だ全く能く爾ならず、便ち通經の道において退沒の心を生ず。是の故に如來、人を勸めて言わく、若使身を喪い法を護り經を弘め他を化すること能わざる者は、亦自ら能く受持誦誦すべし。自ら受持誦誦せば、即ち是れ自行の流通なり。何の故か然ると、若使此の人自ら受持誦誦せざれば、經は此の人において則ち流通せず。此の人既に能く受け誦誦せば、經は此の人において流を得、即ち是れ通なり」と。〔已上〕此に翻じて知るべし、無量の衆生の諸行を廢するは、即ち是れ無量の法滅なり。今は設い汝の之を制すと雖も、此の邪見を止むべからず。唯、汝が在世に限らず、法滅の時に至るまで、汝が邪義は流通すべし。之に依りて現當に滅する所の經卷、其の數幾幾爾ぞや。此の事を若し善根と為さば、良に無上の善根と為すべし。此の事を若し罪業と為さば、亦五逆の罪に過ぐべし。然れば罪福の中において、是非いかん。我れ常途に任せて當根の佛法を許す、是れ我が説にあらざ、經論に任す。設い功德にあらざと雖も、亦罪業と為さず。汝は新義を立て偏えに余行を廢す。若し大功德にあらざるは、恐らく大罪と為んか。自らの好む所は、是れ一有縁の行なり。大賢に云うが如し。「其の宿習に隨いて、心樂いて住する故に」と。文。此の法滅の過を作し、偏えに好む所を抑うる者、必ず其の當根を計るべし。若し然らずば、即ち是れ他人を損なうなり。若し汝が勸進の如きは、善導已來、宋朝皆稱名の一行を守るべし、他の佛法あるべからずと。汝、念仏以外の余行を好むの人は釈迦・弥陀に違すと云うに依りて、諸人は心を驚かし色を

可_レ守_二称名一行、不可_レ有_二他佛法。汝依_レ云_二好_二念仏以外余行_一之人違_中積尊弥陀、諸人驚_レ心改_レ色、不覺而廢_レ余行。汝令_二百人廢_レ余行_一中一人、若不_レ得_レ往生者、於_レ彼人_一損益如何。

問。彼人設雖_レ修_レ余行、往生淨土為_二不定。若期_二結縁益_一者、称名亦非_レ無_二其德。然者於_レ彼人、何為_二極損_一乎。答。余行功積、彼果將_レ近。汝抑_レ之有_レ令_レ入_二專修、於_レ余行_一撥為_二無用_一故、感果遲滯。称名行未熟、不_レ往_二生淨土。若依_レ撥無過、余行暫不_レ感果者、生_レ惡趣、何必不定乎。百人中有_二此一人者、豈非_二極損_一乎。又設雖_レ不_レ生_レ惡趣、遠_レ離_二仏因、豈非_二極損_一乎。

問。如_二光宅所積、於_レ不_レ受持_一人_一處_上名_二法滅。汝等罪人受持者、一朝_レ佛法不_レ可_レ滅。然者何憂_二法滅_一乎。答。如_二思益經第四云。如_二劫尽燒時、諸小陂池江河泉源在_レ前枯竭、然後大海乃當_二消尽。正法滅時、亦復如是。諸行小道正法先尽。然後菩薩大海之心正法乃滅。文。當_レ知、依_レ信_二汝邪言、愚童少女廢_レ經卷、非_レ彼陂池江河枯竭乎。此邪法增長、國主若信_レ之者、大海正法即滅。護法聖衆捨_レ國、世間無_レ依怙。思益經又云、如_レ彼大海有_二金剛珠、一名_二集諸宝、乃至七日出時火至_二梵世、而此宝殊不_レ燒不_レ失、轉至_中他方大海之中。若是宝珠在_二此世界、世界燒者、無_レ有_二是處。此諸菩薩亦復如是。正法滅時、七邪法出、爾乃至_二於他方世界。何等七。一者外道論、二者惡智〔仁本・活本〔知〕識、三者邪用道法、四者互相惱乱、五者入邪見棘林、六者不修福德、七者無_レ有_二得道。比七惡出時、是諸菩薩知_二諸衆生不_レ可_レ得度、爾乃至_二於他方仏國、不_レ離_二見仏聞法、教化衆生、增長善根。文。當今七邪雖_二已現、一朝未_レ廢者、當_レ知_二酬_二國主福德_一也。

問。善導既云_二自余衆行雖_レ名_二是善、苦比_二念仏者、全非_中比校_上也。文。明知修_レ称名_一行者、是為_二無上乘機。然者一朝皆有_二此大人者、即是可_レ謂_二人宝莊嚴之国土。然者一朝不_レ廢、可_レ為_二極損_一何謂_レ之為_二王德_一乎。答。善導所立念仏義、如_二前諸門成_レ之、不_レ違_二再出、非_レ謂_レ指_二不法称名_一易_中如說余行_上也。往生宗所引念仏善証文中、称名外有_二無量余行、不_レ違_二一一出。若撥_レ彼者、念

改め、不覺にして余行を廢す。汝が百人をして余行を廢せしむる中に一人にても、若し往生を得ざれば、彼の人において損益いかに。

問う。彼の人は設い余行を修すと雖も、往生淨土は不定と為ん。若し結縁の益を期せば、称名も亦其の徳なきにあらず。然れば彼の人において、何ぞ極損と為んや。

答う。余行の功績、彼の果は將に近づくかとす。汝の之を抑えて專修に入らしめんことあるは、余行において撥して無用と為す故に、感果遲滯せん。称名の行は未だ熟せずして、淨土に往生せず。若し撥無の過に依りて、余行に暫くも感果せざる者は、惡趣に生まる、何ぞ必ず不定ならんや。百人の中に此の一人あらば、豈に極損にあらずや。又設い惡趣に生ぜずと雖も、仏因を遠離す、豈に極損にあらずや。

問う。光宅の所積の如き、受持せざる人の處において法滅と名く。汝等罪人にして受持する者、一朝に仏法滅すべからず。然れば何ぞ法滅を憂うるや。

答う。『思益經』第四に云うが如し。「劫の尽くる燒の時、諸の小陂池江河泉源は前にありて枯竭するが如し、然して後に大海の乃し當に消尽すべし。正法乃し滅せん」と。文。當に知るべし、汝が邪言を信ずるに依りて、愚童少女の經卷を廢すは、彼の陂池江河の枯竭にあらずや。此の邪法の增長、國主若し之を信ぜば、大海の正法は即ち滅せん。護法の聖衆は國を捨て、世間に依怙なし。『思益經』に又云く、「彼の大海に金剛珠あり、集諸宝と名く、乃至七日出る時に火は梵世に至る、而も此の宝珠は燒けず失せず、轉じて他方の大海の中に至るが如し。若し是の宝珠、此の世界にあらば、世界の燒くは、是の處あることなし。此の諸の菩薩も亦復是の如し。正法の滅する時、七邪法出て、爾して乃し他方世界に至る。何等をか七と為ん。一には外道の論、二には惡智〔智〕の字、仁本・活本〔知〕識、三には邪用道法、四には互相惱乱、五には入邪見棘林、六には不修福德、七には得道あることなし。此の七惡出る時、是の諸菩薩は諸の衆生の得度すべからざるを知りて、爾して乃し他方の仏國に至る、見仏・聞法を離れず、衆生を教化し、善根を增長せん」と。文。當今の七邪、已に現わると雖も、一朝に未だ廢かずば、當に知るべし、國主の福德に酬うるなり。

問う。善導、既に自余の衆行は是れ善と名くと雖も、若し念仏に比ぶれば、全く比校にあらず」と云うなり。文。明らかに知りぬ、称名を修する行者、是れを無上の乗機と為す。然れば一朝に皆此の大人あらば、即ち是れ人宝莊嚴の国土と謂うべし。然れば一朝の廢かざるを、極損と為すべし。何ぞ之を謂いて王徳と為すや。

答う。善導の所立の念仏の義、前の諸門に之を成せるが如し、再び出すに違あらず、不法の称名を指して如說の余行に易しと謂うにあらざるなり。往生宗の所引の念仏善の証文の中に、称名の外に無量の

仏深義又不_レ可_レ成。若如_二汝所_レ言守_二一文_一者、称名行是為_二下劣根機_一所_レ說也。如_二十住毘婆娑論第四云_一。若諸仏所說、有_レ易行道疾得_レ至_二阿惟越致地_一方便_レ者、願為_レ說_レ之。答曰、如_二汝所說_一、是傳弱怯劣、無_レ有_二大心_一、非_二是丈夫志幹之_レ言_一也。何以故、若人發願、欲_二求阿耨多羅三藐三菩提_一、未_レ得_二阿惟越致_一、於_二其中間_一、心_レ不_レ惜_二身命_一、昼夜精進、如_レ救_二頭燃_一。〔乃至〕汝言_二阿惟越致地_一、是法甚難、久乃可_レ得、若有_レ易行道疾得_レ至_二阿惟越致地_一者、是乃怯弱下劣之_レ言、非_二是大人志幹之_レ說_一。汝若必欲_レ聞_二此方便_一、今當_レ說_レ之。仏法有_二無量門_一、如_二世間道有_レ難有_レ易_一、陸道步行、若_二毘婆沙論_一「則苦_二」水道乘_レ船則樂_一。菩薩道亦如_レ是。或有_レ勤行精進、或有_レ信方便_一、易行疾至_二阿惟越致_一者。如_二偈說_一。東方善徳仏、南梅檀徳仏、西無量明仏、北方相徳仏、東南無憂徳、西南宝施仏、西北華徳仏、東北三乘行仏、下方明徳仏、上方広衆徳。如_レ是諸世尊、今現在_二十方_一。若人疾欲_レ至_二不退轉地_一者、応_レ以_二恭敬心_一執持_二称名号_一。〔乃至〕更有_二阿弥陀等諸仏_一、亦応_二恭敬礼拝称_二其名号_一等_二云_一。

依_レ此而言、称名一行為_二劣根一類_一所_レ授也。汝何以_二天下諸人_一、皆為_二下劣根機_一乎。無礼之至、不可_レ称計。依_レ引_二此文証_一、非_レ不_レ執_二称名行_一。唯是汝之一門、以_レ称名_レ為_二無上殊勝行_一、撥_二余行_一為_二下劣_一。如_二汝集云_一。仏名号功德、勝_二余一切功德_一故、捨_レ劣取_レ勝、以為_二本願_一。〔文。〕積_二称名_一為_二本願_一、出_二勝劣難易_一二義_一中、第一義也。問答法譬文、不_レ能_レ具出_二云_一。唯_二往生勝行_一、云_二契_一合下根_一者、其理可_レ然。此文上文、盛成_二名号功德_一為_二殊勝_一、余功德皆為_レ劣義、是頗任_二胸臆_一。如來三業皆遍_二法界_一、一一功德皆無_レ不_レ會_二法性_一。名号勝徳亦依_レ有_二此義_一也。何以_二名号_一為_二殊勝_一、以_二余徳_一為_レ劣乎。近代專修男子女人等、盛述_二此義_一。今思以_二此集文_一為_二本説_一也。不可_レ說不可_レ說也。為_レ懲_二此執心_一故、且出_二此義_一也。理実十住毘婆娑論意、分_二易行難行_一二道_一、試_レ好_二易行道_一之人_上、非_レ謂_二称名行無_レ勝徳_一也。如_二彼云_一。兜率天王持_二一切諸仏名号_一者、於_二諸天中_一、補処菩薩必住_二此天_一故、嘆_二天王修_一念仏三昧、為_レ勝

※上

※下

余行あり、一一出ずに違はず。若し彼を廢せば、念仏の深義又成すべからず。若し汝が言う所の如き一文を守るは、称名の行は是れ下劣の根機の為に説く所なり。『十住毘婆娑論』の第四に云うが如し。「若し諸仏の所説、易行道の疾く阿惟越致地に至ることを得る方便あらば、願わくは為に之を説きたまへ。答えて曰く、汝が所説の如きは、是れ・弱怯劣にして、大心あることなし、是れ丈夫志幹の言にあらざるなり。何を以ての故に、若し人、發願して阿耨多羅三藐三菩提を欲求して、未だ阿惟越致を得ざれば、其の中間において、心に身命を惜しまざるべし、昼夜に精進して、頭燃を救うが如くすべし。〔乃至〕汝、阿惟越致地、是の法甚だ難し、久しくして乃ち得べし、若し易行道の疾く阿惟越致地に至るを得るありと言わば、是れ乃ち怯弱下劣の言にして、是れ丈夫志幹の説にあらざるなり。汝、若し必ず此の方便を聞かんと欲せば、今、當に之を説くべし。仏法に無量の門あり、世間の道に難あり、易あり、陸道の歩行は、若_二〔十住毘婆娑論〕_一「則ち苦しく」水道に船に乗るは則ち樂しきが如し。菩薩道も亦是の如し。或いは勤行精進あり、或いは信方便を以て易行の疾く阿惟越致に至る者あり。偈に説くが如し。東方善徳仏、南梅檀徳仏、西無量寿仏、北方相徳仏、東南無憂徳、西南宝施仏、西北華徳仏、東北三乘行仏、下方明徳仏、上方広衆徳なり。是の如き諸の世尊、今、現に十方にまします。若し人疾く不退轉地に至らんと欲する者は、恭敬の心を以て執持して名号を称すべし。〔乃至〕更に阿弥陀等の諸仏あり、亦應に恭敬礼拝し其の名号を称すべし」等と云云。

此れに依りて言わく、称名の一は劣機の類の為に授くる所なり。汝は何ぞ天下の諸人を以て、皆下劣の根機と為すや。無礼の至り、称計すべからず。此の文証を引くに依りて、称名の行を執らざるにあらず。唯、是れ汝の一門、称名を以て無上殊勝の行と為す、余行を廢して下劣と為す。汝が『集』に云うが如し。「仏の名号の功德、余の一切の功德に勝る故に、劣を捨て勝を取り、以て本願と為したまうか」と。〔文。〕称名を本願と為すを積して、勝劣難易の二義を出す中の、第一義なり。問答法譬の文、具さに出す能わずと云云。唯、往生の勝行を云いて、下根に契合すと云うは、其の理は然らず。此の上の文、盛んに名号の功德を殊勝と為して、余の功德は皆劣と為す義を成ぜり、是れ頗る胸臆に任ず。如來の三業は皆法界に遍ず、一一の功德の皆法性に会せざるはなし。名号の勝徳も亦此の義あるに依るなり。何ぞ名号を以て殊勝と為し、余徳を以て劣と為んや。近代專修の男子・女人等、盛んに此の義を述ぶ。今、思うに此の『集』の文を以て本説と為すなり。不可_レ說なり、不可_レ說なり。此の執心を懲せん為の故に、且く此の義を出すなり。理は実に『十住毘婆娑論』の意、易行・難行の二道を分かちて、易行道を好むの人を誡めん。称名の行に勝徳なしと謂うにあらず。彼に兜率天王の一切諸仏の名号を持つと云うが如きは、諸天の中において、補処の菩薩は必ず此の天に住するが故に、天王は念仏三昧を修するを嘆じて、勝徳と為すなり。唯、根性の大小を讚毀す、未だ必ずしも所行の勝劣を定めざるなり。委

德也。唯讚毀根性大小、未必定所行勝劣也。不能委曲而已。

問曰、上人作此書途念仏義、不信人稍尠、帰信人は多。終迄于滅後項、(活本「頃」)在家出家男女貴賤、皆疑恋慕修追善、遍滿諸国、不可称(仁本・活本「勝」)計。是知所言充(仁本・活本「允」)道理、若為「邪法」者、豈有如此威勢乎。答。宝積經説末法行事中云、柔和者難得、邪友勢力増。(広文可)見。凡如此文、諸經中充滿。如彼大莊嚴仏滅後五比丘、一人知正道、度多億人、四人住「邪見」、此四人命終後墮阿毘地獄、仰臥伏臥、左脇臥右脇臥、各九百万億歳、於熱鉄上燒燃焦爛。死已更生灰地獄大灰地獄活地獄黒繩地獄、皆如上歳数受苦、於黒繩地獄死還生阿毘大地獄中、若在家出家親近此人、并諸檀越凡六百万億人、与此四師俱生俱死、在大地獄受諸燒煮。大劫苦尽、是四惡人及六百万億人、從此阿毘獄轉生他方大地獄、無數百千万億那由地歳受大苦惱、世界還生、亦生此間大地獄中、後生人中、五百世中得生盲報、後得值一切明仏、出家十萬億歳勤行精進、如救頭燃、不得順忍、況得道果。命終後還生阿毘地獄、後得值九十九億仏、亦復如是。是故汝莫募威勢矣。聖人隱邪儻出、正法廢邪法興、是末世行事經論定説。即汝之邪法増長、是末代大患也。昔如来在世先有明鑑、如来憐愍此事、大会恐怖此事、当今果而有感徴、可悲可痛。如大般若經第六百云。善勇猛、我今自持如是法印、令久住世、利樂有情。所以者何、我声聞衆、無勝神力能持般若波羅蜜多微妙法印、至我滅後之時後分後五首歳、饒益有情。(乃至)爾時世尊、告賢守菩薩導師菩薩等五首上首菩薩及善勇猛菩薩摩訶薩言、(乃至)汝等心持如是法蔵、我涅槃後後時後分後五首歳、無上正法將壞滅時分転時、広為有情宣説開示、令彼聞已獲大利樂時、諸菩薩聞仏語已、皆從座起、頂礼仏足、合掌恭敬、俱白仏言、(乃至)我等當持如是法蔵、仏涅槃後後時後分後五百歳、無上正法將欲壞滅時分転時、広為有情宣説開示、令彼聞已獲大利樂。世尊、當於

*388上

曲する能わざるのみ。

問うて曰く、上人の此の書を作りて念仏の義を述べ、不信の人稍尠なし、帰信の人は是れ多し。終に滅後の項(「頃」)の字、活本「頃」まで、在家・出家の男女・貴賤、皆恋慕を疑らし追善を修して、諸国に遍満すること、称(「称」)の字、仁本・活本「勝」計すべからず。是に知りぬ、言う所の道理を充(「充」)の字、仁本・活本「允」つ。若し邪法と為さば、豈に此の如きの威勢あらんや。答う。『宝積經』の末法の行事を説く中に云く、「柔和者は得難く、邪友の勢力は増せり」と。(広く文に見るべし)凡そ此の如きの文、諸經の中に充滿す。彼の『大莊嚴』の仏滅後の五比丘の如し、一人の正道を知りて多億人を度す、四人は邪見に住す、此の四人は命終の後に阿毘地獄に墮ちて、仰ぎ臥し仰ぎ臥し、左脇臥し右脇臥して、各の九百万億歳、熱鉄の上において燃焼・爛す。死に已りて更に灰地獄・大灰地獄・活地獄・黒繩地獄に生まれて、皆上歳の数の如く苦を受く、黒繩地獄において死に還りて阿毘大地獄の中に生まる、若しは在家・出家の此の人に親近せん、並びに諸の檀越の凡そ六百万億人、此の阿毘獄より転じて他方の大地獄に生ず、無數百千万億那由地歳に大苦惱を受く、世界に還り生じ、亦此の間の大地獄の中に生ず、後に人中に生まれて、五百世中に生盲の報を得、後に一切の明仏に値うを得、出家して十萬億歳に勤行精進すること、頭燃を救うが如くするも、順忍を得ず、況んや道果を得るをや。命終の後に還りて阿毘地獄に生じ、後に九十九億の仏に値うを得ること、亦復是の如し。是の故に汝が威勢を募ることなかれ。聖人は隠れ邪儻の出で、正法は廢し邪法の興る、是れ末世の行事にして經論の定説なり。即ち汝が邪法の増長は、是れ末代の大患なり。昔に如来の在世に先ず明鑑あり、如来此の事を憐愍したまう、大会此の事を恐怖す、当今の果にして感徴あり、悲しむべし痛むべし。『大般若經』の第六百に云うが如し。「善勇猛、我れ今、自らは是の如き法印を持ちて、久しく世に住せしむ、有情を利益せん。所以は何ん、我が声聞衆、勝神力の能く般若波羅蜜多微妙の法印を持ち、我が滅後の時の後分の後の五百歳に至りて、有情を饒益することならん。(乃至)爾の時に世尊、賢守菩薩・導師菩薩等五百の上首菩薩および善勇猛菩薩摩訶薩に告げて言わく、(乃至)汝等心には是の如き法蔵を持ち、我が涅槃の後の後時後分後五百歳に、無上の正法將に壞滅せんとする時分転する時に、広く有情の為に宣説開示して、彼をして聞き已りて大利樂を獲しむべき時に、諸の菩薩は仏語を聞き已りて、皆座より起ち、仏足を頂礼し、合掌恭敬して、俱に仏に白して言さく、(乃至)我等當に是の如き法蔵を持ち、仏涅槃の後の後時後分後五百歳に、無上の正法將に壞滅せんと欲する時分転する時に、広く有情の為に宣説開示して、彼をして聞き已りて大利樂を獲しむべし。世尊、當に彼の時において大恐怖あり、大險難あり、大暴悪あり。彼の時に當りて、諸の有情の類、多分に遺法を感じる業を成就す。心に貪欲多し、不平等の貪および非法の貪に染・せらる、慳・嫉妬にして其の心を纏縛せらる、多忿凶勃にして

彼時、有大恐怖、有大陰難、有大暴惡。當於彼時、諸有情類、多分成_下就感_上遺法_上業。心多意欲、不平等貪及非法貪之所_上染汗、慳慳嫉妬纏_上縛其心、多忿凶勃好_上麤惡語、詭曲矯誑樂行_上非法、多懷_上輕蔑_上鬪訟相違、住_上不律儀_上耽嗜所_上蔽、懈怠增長、精進下劣、忘_上失正念_上、住_上不正知_上、口強啄長、偃蹇_上憍傲、喜行_上惡業、隱_上覆內心。貪恚癡增、善根薄少、無明聲之所_上闇蔽、諸有所行皆順_上魔_上、與_上深法律_上恒作_上怨害、於_上法寶藏_上常為_上大賊、稟_上性弊惡_上難_上可_上親附_上。世尊、我等今者、決定能持_上如_上是如來無量無數百千俱_上那由他劫所集無上法藏、與_上彼有情_上作_上大饒益。世尊、彼時當_上有_上少分有情_上於_上斯法藏_上勤求樂學。彼性質直、無_上誣無_上誑、寧_上捨_上身命_上、不作_上法怨_上、於_上法亦無_上誑謗厭背_上、我與_上彼類_上當_上作_上饒益、於_上此深法_上、示現勸導、讚勵慶喜、令_上勤_上修學。爾時世尊、即以_上神力_上、護_上持般若波羅密_上〔仁本「蜜」〕多微妙甚深無上法藏、令_上惡魔衆不_上能_上壞滅_上、復以_上威力_上護_上能受持精進修行此法藏者_上、令_上斷_上魔羅_上蕭然解脫、於_上所修行_上速至_上究竟_上。仏時微笑、放_上大光明_上、普照_上三千大千世界_上、人中天上處處有情、因_上仏光明_上、互得_上相見_上云云。(已上經文)

凡如_上此文遍_上滿諸經_上。或有_上聞_上如_上此末世_上變相_上大會_上悲泣_上嗚咽_上。如_上當來_上變經_上說_上。時諸弟子_上聞_上說_上是法_上、悉皆_上稽首_上、禮_上大仙足_上、心意_上惶怖_上、身體_上戰掉_上。悲泣_上白言_上、將來_上之世_上、法沒_上盡時_上、見_上此世_上者_上、意當_上云何_上、何忍_上見_上之_上。我等今日_上聞_上說_上是事_上、心用_上崩破_上。彼世_上之人_上遭_上此惡_上者_上、身心_上豈不_上裂_上作_上百段_上耶。時諸弟子_上忽復_上自議_上、至心_上投_上地_上、同聲_上白_上師_上、我甚_上惶怖_上、云何_上得_上道_上、免_上于斯_上苦_上、不_上遭_上斯惱_上云云。如_上此等_上文_上、亦非_上一_上。嗚呼_上哀哉_上悲哉_上。我等_上正值_上此時_上、身不_上裂_上百段_上、如_上彼癡人_上戲笑_上生育_上歡樂_上、重病_上還似_上無病_上、此言_上誠乎_上。當_上知_上授_上正法_上教手_上、浸_上生死_上泥_上、救_上沈溺_上諸子_上、置_上涅槃_上岸_上。其_上正法_上若_上隱役_上者_上、溺子_上孤_上奈何_上。是故_上如來_上存_上日_上、先憂_上沒後_上法滅_上、同會_上大士_上、起_上弘經_上願_上、常慰_上喻_上世尊_上。如_上彼法華_上經中_上八十_上萬億_上那由他_上菩薩_上同音_上白_上仏言_上、唯願_上不_上為_上慮_上、於_上仏滅_上度_上後_上、恐怖_上惡世_上中_上、我等_上當_上広説_上、有_上諸無_上智_上人_上、惡口_上罵詈_上等_上、及加_上刀杖_上者_上、我等_上皆

*38下

*38上

僣惡の語を好む、詭曲矯誑にして染みて非法を行ず、多く輕蔑を懷きて鬪訟相違す、不律儀に住し耽嗜に覆われ、懈怠增長し、精進下劣にして、正念を忘失し、不正知に住す、口強啄長、偃蹇・傲して、喜びて惡業を行じ、内心を隱蔽す。貪恚癡増し、善根薄少にして、無明の聲に闇蔽せらる、諸の諸行は皆魔党に順ず、深法律の与に恒に怨害を作す、法の宝藏において常に大賊と為る、性の弊惡なるを稟けて親附すべきこと難し。世尊、我等今は、決定して能く是の如きの如來無量無數百千俱那由他劫の所集の無上法藏を持ち、彼の有情の与に大饒益を作す。世尊、彼の時に當に少分の有情ありて斯の法藏において勤求樂學すべし。彼の性は質直にして、誑なく誑なし、寧く身命を捨て、法怨を作さず、法において亦誑謗厭背なし、我れ彼の類の与に當に饒益を作すべし、此の深法において、示現勸導し、讚勵慶喜し、修學に勤めしめん。爾の時に世尊、即ち神力を以て、般若波羅密〔蜜〕の字、仁本〔蜜〕多微妙甚深の無上の法藏を護持し、惡魔の衆をして壞滅せんこと能わざらしむ、復威力を以て能く受持精進して此の法藏を修行する者を護りたまう、魔の羅網を断ち蕭然として解脫し、所修の行において速やかに究竟に至らしめん。仏、時に微笑し、大光明を放ちて、普く三千大千世界を照したまう、人中の天上の處處の有情、仏の光明に因りて、互いに相見みゆることを得」と云云。(已上經文)

凡そ此の如きの文は諸經に遍満す。或いは此の如き末世の變相を聞きて大會悲泣し嗚咽するあり。『當來變經』の説の如し。「時に諸の弟子は是の法を説くを聞きて、悉く皆稽首し、大仙足を礼す、心意惶怖し、身體戰掉す。悲泣し白して言さく、將來の世に、法の没尽する時に、此の世を見る者は、意當に云何とすべし、何ぞ之を見ることを忍ばんや。我等今日に是の事を説くを聞きて、心用崩破せん。彼の人に於て此の惡に遭う者は、身心豈に裂けて百段と作さざらんや。時に諸の弟子は忽ちに復自ら議して、至心に地に投じ、同聲に師に白さく、我れ甚だ惶怖す、云何が道を得て、斯の苦を免れて、斯の惱に遭わざらん」と云云。此の如き等の文、亦一にあらざらず。嗚呼哀しきかな、悲しきかな。我等は正しく此の時に値えり、身は百段に裂けずとも、彼の癡人の戲笑・生育の歡樂の如し、重病は還りて無病に似る、此の言誠なるかな。當に知るべし、正法の教手を授け、生死の泥に浸し、沈溺の諸子を救い、涅槃の岸に置く。其の正法の若し隱没せば、溺子孤り奈何せん。是の故に如來の存する日、先ず没後の法滅を憂いて、同會の大士、弘經の願を起こして、常に世尊を慰諭したてまつる。彼の『法華經』の如きは八十萬億那由他の菩薩の同音に仏に白して言さく、「唯、願わくは慮かりを為したまわされ、仏滅度の後の、恐怖惡世の中において、我等當に広く説くべし、諸の無智人ありて、惡口罵詈等、および刀杖

選択集中摧邪輪卷下

當忍等云云。勸持品說相、自他所見也。此品中、学無学比丘尼衆、所以請他方国土護持者、我等功德淺薄、嗔濁諂曲心不実所致也。上所引般若經文、又簡声聞衆、不闕我等之能化。鑑我等重過、仏意致惱乱、哀哉悲哉矣。非唯菩薩声聞起護法願、歸依世尊日、魔王波旬亦護法願為先。昔二月十五日臨涅槃時、欲界魔王波旬、与無量阿僧祇眷属来至仏所白言、我等今者愛樂大乘、守護大乘。世尊、若有善男子善女人、為供養故、為怖畏故、為誑他故、為財利故、為隨他故、受是大乘、或真或偽、我等爾時當為是人除滅怖畏。《出涅槃經》彼波旬拜最後慈顔、尚有歸法之志。我等送在世二千余年、值如来遺蹤、唯在于文字經卷。恋慕在世、欣求解脱、經卷之外復憑何物乎。汝更莫輕弄頭密正法矣。夫聖教雖衆、如來說正法印印之。順此法印說名仏法、違此法印名邪法。正法取之、邪法捨之。或人師破邪義引律云、若比丘如是諸長老、我於某村某城、親從仏聞受持、此是法是毘尼是仏所教。若聞彼比丘所說、不与修多羅毘尼法律相応、違背於法、応語彼比丘、汝所說者、非仏所說。何以故、我尋究修多羅毘尼法律、不与相応、違背於法。長老不復須誦習、亦莫教余比丘、今不捨棄。若聞彼比丘所說、若毘尼法律与相応者、応語言、長老所說是仏所說、審得仏語。何以故、我尋究修多羅毘尼法律、与相応、而不違背、長老応善持誦習教余比丘勿令忘失。《略抄》撥去菩提心、已違三藏法門。此邪印所印故、汝之集是非仏法。長老不復須誦習、亦莫教余比丘、須捨棄也。余雖傷嘆此事、未染於翰墨、依聞彼講經日憤、粗記大概。此功德、興念仏行、自他衆生往生極樂矣。

*89下

選択集中摧邪輪卷下

を加うるも、我等當に忍ぶべし」等と云云。勸持品の説相、自他共に見る所なり。此の品の中に、学無学の比丘尼衆、他方国土の護持を請う所以は、我等の功德は淺薄にして嗔濁諂曲心不実の致す所なり。上に引く所の『般若經』の文に、又声聞衆を簡いて、我等の能化に関わらせず。我等の重過を鑑みるに、仏意惱乱を致す、哀しきかな、悲しきかな。唯、菩薩・声聞に護法の願の起こりて、世尊に歸依するの日、魔王波旬も亦護法の願を先と為す。昔二月十五日臨涅槃の時、欲界の魔王波旬、無量阿僧祇の眷属と与に仏の所に來至して白して言さく、我等今は大乘を愛樂し、大乘を守護せん。世尊、若し善男子善女人ありて、供養の為の故に、怖畏の為の故に、他を誑かす為の故に、財利の為の故に、他に隨う為の故に、是の大乘を受くること、或いは真、或いは偽、我等爾の時に當に是の人の為に怖畏を除滅すべしと。《涅槃經》に出でり。彼の波旬も最後の慈顔を拜して、尚お歸法の志あり。我等在世を送ること二千余年、如来の遺蹤に值う、唯、文字の經卷あるのみ。在世を恋慕し、解脱を欣求するに、經卷の外に復何物をか憑まんや。汝更に頭密の正法を輕弄するなかれ。夫れ聖教は衆しと雖も、如来は正法の印を説きて之を印したまう。此の法印に順じて説くを仏法と名く、此の法印に違するを邪法と名く。正法は之を取り、邪法は之を捨つ。或る人師の邪義を破するに『律』を引きて云く、「若し比丘の是の如きの諸の長老、我れ某村某城において、親しく仏より聞き受持したてまつる、此れ是の法・是の毘尼は是れ仏の所教なり。若し彼の比丘の所説を聞くに、修多羅・毘尼の法律と相応せずば、法に違背せり、應に彼の比丘に語るべし、汝の所説は、仏の所説にあらず。何を以ての故に、我れ修多羅・毘尼の法律を尋究するに、与に相応せず、法に違背すと。長老は復誦習を須いず、亦余の比丘を教うるることなかれ、今は應に捨棄すべし。若し彼の比丘の所説を聞き、若し毘尼の法律と共に相応するは、應に語りて言うべし、長老の所説は是れ仏の所説なり、審かに仏語を得。何を以ての故に、我れ修多羅・毘尼の法律を尋究するに、共に相応す、法に違背せず、長老應に善く持ち誦習して余の比丘に教え忘失せしむることなかるべし」と。《略抄》菩提心を撥去すること、已に三藏の法門に違す。此の邪印の印する所の故に、汝が『集』は是れ仏法にあらず。長老復誦習を須いず、余の比丘を教うるることなかれ、須く捨棄すべきなり。余は此の事を傷嘆すると雖も、未だ翰墨に染らず、彼の講經の日の憤りを聞くに依りて、粗ぼ大概を記す。此の功德に依りて、念仏の行を興す、自他の衆生、極樂に往生せん。

建曆二年十一月二十三日 華嚴宗沙門高辨率爾草之了

右二箇条疑難、去冬專修人可有「來問」之由風聞之間、為「彼
 決答」雖「草」之、不「然」之故、深納「懷中」畢。然而連連傳聞、
 偏負「破念」行之過「云云」。仍近日為「諸人証判」、雖「有」流布
 之志、尚以思惟之間也。然重又聞、專修人云、作「書破」念「仏
 行」云云。若有「遐方歷代流」此惡名者、為「恥」為「疵」、可「不」辭
 謝乎。仍先以「此書」奉「進」十方一切諸「仏善」(仁本・活本「善」)
 薩賢聖衆会并「仏法護持神祇冥衆御宝前」、副「威光」增「法樂」
 扇「正智之風」摧「邪見之幢」、次依「蒙」高命、謹以進「上」之、
 此即抽「乎懷中」之始也。
 建曆三年三月一日 非人高辨上
 進上

*308上

〔以下底本のみにあり〕

上人行状云、(依「院宣」沙門「高信」作之。)建曆二年(壬申)十一月廿
 三日、於「高山寺」製「作摧邪輪」。近年「選撰集」為「依憑」、一向專修
 盛興。偏撥「去聖道」、專住「邪執」。一味「仏法」甘「鹹分」異、法滅之
 相尤足「悲歎」。仍作「摧邪輪」三卷「莊嚴記」一卷。每「下」筆請「加被
 於大聖」、草案改「行状」(「既」)畢、清書本與「自被」記「旨趣」。其記(如
 上)。「扇」正智之風「摧」邪見之幢、書「比句」之時、俄「室内」風起、
 吹「揚」彼書於「知識」宝前、飄「飄」良久如「本降」、是「眼前」勝事也。又「夢
 有」二人「取」筆「上人」面書「觀音」、又一人書「善導」、又「從」西方「金
 色」光明來照。此等「靈夢」好「相非」一云云。

建曆二年十一月二十三日 華嚴宗沙門高弁率爾草之了

右二箇条の疑難、去冬に專修人の來たりて問うあるべしの由風聞の間、彼に決して答うる為に之を
 草すと雖も、然らざるの故に、深く懷中に納め畢んぬ。然るに連連に傳聞し、「偏えに念仏行の過
 を負破せん」と云云。仍お近日に諸人の証判の為に、流布の志ありと雖も、尚お以て思惟の間なり。
 然るに重ねて又聞く、專修人の云く、「書を作し念仏の行を破す」と云云。若し遐方歷代に此の惡
 名を流すことあらば、恥と為ん、疵と為ん、辭謝せざるべきや。仍お先ず此の書を以て十方一切の
 諸仏の善(善)の字、仁本・活本「善」薩・賢聖衆会並びに仏法護持の神祇冥衆の御宝前に進め
 奉る、威光を副えて法樂を増し正智の風を扇ぎ邪見の幢を摧く、次に高命を蒙るに依りて、謹んで
 以て之を進上したてまつる、此れ即ち懷中に抽んでるの始めなり。
 建曆三年三月一日 非人高弁上
 進上

〔以下底本のみにあり〕

上人の行状に云く、(院宣に依りて沙門高信が之を作る。)建曆二年(壬の申)十一月廿三日、高山
 寺において『摧邪輪』を製作したまう。近年『選撰集』を依憑と為て、一向專修盛興す。偏えに聖
 道を撥去して、専ら邪執に住す。一味の仏法の甘鹹異を分かつ、法滅の相尤も悲歎に足れり。仍お
 『摧邪輪』三卷・『莊嚴記』一卷を作りたまう。筆を下す毎に加被を大聖に請い、草案を改(改)
 の字、『行状記』には「既」め畢り、清書本の奥に自ら旨趣を記さる。其の記(上の如し)。「正智
 の風を扇ぎ邪見の幢を摧く」、此の句を書く時に、俄かに室内に風起る、彼の書は知識の宝前に
 吹き揚げ、飄飄良や久しくして本の如く降る、是れ眼前の勝事なり。又夢に一人ありて筆を取りて
 上人の面に觀音を書く、又一人は善導を書く、又西方より金色の光明來たりて照す。此れ等の靈夢
 の好相は一にあらざると云云。